
滑火の謡（ほたびのうた）

マオ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

榎火の謡ほたびのうた

【Nコード】

N5783C

【作者名】

マオ

【あらすじ】

幸せを知らなかった少女は、優しい虫族の村で幸せを知る。優しい虫族の少女は、人間の少女に出会って友情を知った。ぬくもりを知らない少年が、ふたりの少女に出会ったとき、何が生まれるのか。

序・それは確かな希望の櫓火

焚き火のようなぬくもりを。

灯火のような導きを どうかわたしに与えてください。

生まれつき、魔女と罵られた。

彼女は確かに他にはない力を持っており、ほかの人間から見たならば、確かに同じ人間とは思えないような存在だったから。

それでも、彼女は確かに人間で、傷つけば血を流し、心ない言葉には涙を流すこともあり、楽しいことがあれば笑った。
でも。

たとえば、人を己の力で傷つけたとき。

たとえば、意図せずに誰かの物を壊してしまったとき。

彼女は例えようもない罪悪感を覚えた。

自分がいたから、こんな力が自分にあるから。こんな力を持って生まれたから。

遡ればどこまでも自分の存在が悪いのだと彼女は思うようになる。悪いことなど何一つない。ただ、彼女が他とは違うものを持ち合わせただけで、彼女自身の罪ではない。

けれど人間は弱い生き物で、己と違うものを見たならば恐怖してしまう生き物で。

その年、村はとんでもない凶作に見舞われた。

それすらも、彼女の罪だと、

お前が。

どうして生まれてきた。

全部お前が悪い。

まだ十になっただけの彼女に、大人たちは口々に言うてのける。

お前さえ、いなければ。

一体何が変わったというのだろう。

彼女がいなくても村は凶作に陥っただろうし、彼女の力など作物の豊作、不作には何の関係もないものだ。人間は自然には勝てない。それが世界の理で、誰もがどこかでそれを理解しているはずなのに、村の人間はそう思おうとしなかった。

大人たちの声は高まっていく。責任はどこだ。誰にある。

いいや誰にもないのだよと、言ってくれる者はその場にいない、彼女はこう考えざるを得ない。

嗚呼、わたしがいるからなのだ。

わたしのせいで村は凶作になったのだ。

幼い子供まで飢えるような村。それが彼女のせいだというならば、なんと自分の存在は罪深いものなのだろう。

「ごめんさい」

小さく彼女は言った。目の前で彼女を睨みつける大人たちを見つめながら。

認めた。

認めたぞ！！

この魔女が！！

大人たちが彼女の言葉を聞いた瞬間、小さな女の子は責任の存在する場所になってしまった。この凶作は、お前が招いたものなのだ。

お前が村にいたからだ。お前が変な力を持っているからだ。お前が。お前が。お前が。

殺せ。

誰かがそう言ったような気がする。それは誰だったか、彼女には

分からなかったけれど。

「死ねば、いいですか」

彼女はポツンとそう訊いた。それでいいのか。それだけでいいのか。

小さな自分の命だけで、それで何もかも償えるの？

そうしたら、みんな幸せになれる？

「わたし、死ねばいいですか」

この場で自分の力を放って死んでしまえばいいのだろうか。

首をかしげる彼女に、大人たちはおの慄いた。彼女の力がどんなものなのか知っているからだ。

尋常な力ではないもの。その持ち主。彼女がその気になればこんな小さな村など跡形もなくなるのではないか。

村から出してしまえばいい。

また誰かが言った。彼女を指差して誰もが言う。

出て行け。

そうだ！ 出て行け！！

お前さえいなければ皆幸せになれる！！

それが子供に向ける言葉だろうか。まだ護られるべき存在である子供に放つ言葉だろうか。

彼女はそのことにすら気がつかず、ただ頷いた。

「そうします」

彼女が持っているものなど何も無い。彼女のものは彼女自身の身体だけ。

そのまま村を出た。石でも投げられるかと思っただが、村人の誰もが彼女を恐れて見送っただけだった。石など投げたら彼女の力でこの世から消し去られるかもしれない。

村人の視線には怯えだけがある。誰もが彼女を恐れている。その視線は彼女が幼い頃から受けていたもので、彼女はそれ以外の瞳を知らない。

母親は彼女を生んだ瞬間に彼女の力を受けて死んでしまった。父親は彼女を捨ててどこかへ行ったきり戻ってこない。今まで彼女の面倒は村の人々が交代で見ている。

でも、受け入れてくれたわけではない。

だからこそ、村にはいられない。

小さな女の子は悲しいまでにそれを理解している。

ここはわたしがいい場所じゃない。

とぼとぼと歩きながら彼女は泣いた。

泣きながら歩いた。父はいない。母もいない。頼るものもない。

どこへ行けばいいのか分からない。どこへ行けば許されるのかも分からない。

たった一人の小さな女の子。

罪でなく、罰でもないのに自分の存在を忌まわしい存在だと信じきっている、幼子。

彼女は歩いた。歩くことしかできなかったから。どこまで行けばいいのか。

世界の果てまで行けば自分は許されるのだろうか？

子供の足ではたかが知れている距離を歩いて、それでも村は見えなくなつた。

やがて日が暮れる。

彼女は森の中に入っていた。夜の森は暗く、獣がうるついている。再び泣き出しそうに瞳を潤ませて、くたびれた彼女は座り込んだ。

おなかが減つた。何か食べたい。周りを見回す。

ほとんど何も見えないような暗闇しか、ない。

怖い。彼女は涙を流した。誰もいない。人の気配などどこにもない森。

誰か呼びたかった。誰を呼べばいいのかそれすらも分からなかつ

たけれど。

幼子のすすり泣く声を、夜の森だけが聞いている。

ややあって。

かさり。

草を踏む音がして、彼女は顔を上げる。かすかに耳に伝わるのは獣の息遣いだ。

少しずつ増えてくる。獣にとって彼女はこの上もない美食だろう。小さな子供の柔らかい肉。食わせると言いたげに近寄ってくる。

彼女は背後の木にすがるようにして立ち上がった。

獣の気配はすでに周囲を囲んでいる。幼子の足では逃げ切れないのは確実だ。

捕まれば喰われる。喉笛を噛み千切られ、腹わたから食われるだろう。獣はそうやって獲物を喰らうのだ。

涙で潤む視界と、恐怖に震える細い足。尋常でない力の持ち主でも、喰われるのは怖かった。村から出たことのない彼女に、獣と戦った経験など皆無だ。なによりも、彼女は幼い。

護られるべき子供だったはずなのに。

ここに彼女を護る者はいない。いや、生まれた瞬間から、彼女を護ってくれる人などいなかった……！

「いや……」

弱く首を振る。

死ねばいい。脳裏に宿る声。それは彼女自身の声だった。

死んじゃえばいい。だって誰もいないんだもん。わたしには何にもないんだもん。

「やだよ……」

視界に、獣が映る。牙をむき出してこちらに襲い掛かる、瞬間。ゆっくりとゆっくりと彼女に迫る牙を、彼女は目を見開いて見ている。

死ねばいい。

声がする。

本当に？　ねえ本当に、死にたいの。
声がする。

「いやだ……！！」

泣きながら、彼女は首を振る。ほんとうは、ほんとうに。
死にたく、ない！！

紫色の光が幼子の身体を取り巻いた。優しい夜の闇を引き裂くよ
うな光が放たれる。

何度も幾度も炸裂した紫色の雷光は、彼女に襲い掛かってきた獣
全てを焼き払っていた。

一撃が弱かったのか、いまだビクビクとケイレンしている獣もい
る。それも遠くないうちに息絶えるだろう。

これが彼女の力、村人が恐れる破壊の雷。

荒く呼吸をしながら、彼女は獣に近寄った。焦げ臭い。

息をしているもの。していないもの。

彼女が奪ったもの。

いのち。

やらなければ殺され喰われていたのは彼女のほうだ。何の武器も
持たない幼子に抵抗の術があるわけもない。彼女が助かったのは彼
女自身の力があつたからだが、彼女は助かったことを喜んでいなか
った。

彼女の手で、彼女の意思で、奪った命。

なくなつた命。もはや二度と戻ってこないもの。

ゾツとして彼女は小さな手のひらを見下ろす。自分が殺した、獣。

大きな獣だった。狼と言つのだということも彼女は知らず、ただ

獣だと思わなかつたが。

群れを成して襲ってくる獣を、たった一人で自分は撃退してのけ

た。

「こわい」

呟く。あんなふうに使いたかつたわけじゃない。ただ、跳ね
除けようとしただけだった。けれど彼女自身の意思とは逆に、具現

した力は獣たちを容赦なく撃ち、殺してのけた。

コントロールできない自分の力を彼女は恐れている。

「こわいよう……」

たすけてという言葉は喉の奥で凍り付いている。誰が彼女を助けるというのだ？ここには彼女以外誰もいないというのに。

幼い子供は絶望に震えている。

そのときだ。まだ息のあった獣がか細く鳴き声を上げたのは。

きゅん……。

それは弱く、あまりにも弱く、命の終わりを告げる声。

「ッー！」

彼女は口元を覆い、言葉を失った。

罪を、突きつけられたような気がしたのだ。

お前が殺した、と。

恐怖のままに走り出した。森は暗く、無慈悲なほどに真っ暗闇で、先など見えない。

まるで彼女の心の中のように、暗闇が続いている。

「あああ、あああああつ、うわあああああつ！！」

声を上げていないと身体が心が張り裂けてしまいそうだった。悲しいのか苦しいのか、怒りなのか嘆きなのか。

それともただ、自分に対する恐怖なのか。

彼女は走り続けた。疲れて疲れて、草の中に倒れこむまで。

心臓が苦しい。このまま破裂してしまえ。

息が苦しい。このまま止まってしまえ。

自分の力は恐ろしいもの。命を簡単に奪ってしまうもの。

いのち。一度なくなってしまうえば二度と戻らないもの。

それが大切なものだということを彼女は知っている。

簡単に奪ってしまっただけとはいけないものだ、彼女の心は言っている。

なのに、殺してしまった。

「うあああん、あああああつ」

苦しい息の中でなおも彼女は泣いた。泣いて泣いて涙が枯れるかと思うくらいに、泣いた。

気がつけば、夜が明けていた。いつの間にか眠っていた彼女は、腫れた目を隠さずにのろのろと起き上がった。まぶたが重い。体中が痛い。

彼女は立ち上がる。ふらつく頭でただ、考えていたのは、これ以上、自分が生きてはいけない。

罪、罪、存在が罪。生きていることさえ罪ならば。

この身に、罰を。

パシン。彼女の周りに紫の光が灯る。それは徐々に強くなっていく。

誰かが許してくれることも無く、自分の心さえ自分の存在を許せないのなら。

罰を。命を奪った償いを、贖あがないを……。

彼女はぎゅっと目をつぶった。紫の雷光が、この上もない力を持って、彼女の頭上に炸裂する。強力な力は、あっけなく彼女の意識を薙ぎ払っていった。

楳火の謡（ほたびのうた）

序・それは確かな希望の楳火（後書き）

新しい話です。よろしければ感想・批評等残していただけると幸いです。

序・それは確かな希望の檜火・2

「……泣いているわ」

「おや、珍しいことだ。一体誰がだね？」

「行ってみれば分かるわよ。ね、行ってみましょう？」

「何を言うんだ。お前はここから出てはいけないよ。分かっているだろう？」

「ええ。だからあなたに言っているの。行ってみましょう？」

「……分かったよ、お姫様。羽の具合は大丈夫なのか？」

「うふふ、大丈夫よ。でも、連れて飛んでくれるのではなくて？」

「……はいはい。分かったよ」

冷たさを感じて彼女は落胆した。自分は死ななかつたのだ。あれだけの力を食らっても、死ななかつたのだ……。

目を開ける。真っ白な景色が広がっていた。

ぼかんとして彼女は周りを見回した。今まで見たことがない景色が広がっている。白いものに触ってみた。とんでもなく冷たい。水よりもつと冷たかつた。

「なに、これ」

ぺたぺたと触ると、手のひらはどんどん冷たくなっていく。とても寒い中で彼女は首をかしげた。

こんなところは見たことがない。ひよっとして、自分はやっぱり死んでいて、ここは死者の世界なのだろうか。だからこんなに冷たいものが溢れているのだろうか。

「おや、人間の子供だ。これは本当に珍しい」

彼女の頭の上から凜とした女性の声があった。何気なく見上げて、彼女は言葉をなくしてしまう。見たことがない、ひと。

「可愛い。ねえ、あなた、どうしてこんなところにいるの？　こんな高い山の上、人間はとも来られる場所ではないでしょう？」
ホンワカと優しい声で話しかけてくるのもまた、彼女の頭の上から。

彼女は目を丸くして答えることも出来ない。

声をかけてきた二人は彼女の目前に降り立った。

「？　話せないのか？　それとも言葉が通じていないか？」

凜とした声の女性は彼女の顔を覗き込んできた。心配そうな表情で。えらく背が高いためしゃがみこんでいる。

「人間に逢ったのは何十年ぶりだからな……言葉が変わってしまった可能性があるぞ」

「そうなの？　困ったわね。あとは……身振り手振りしかないかしら」

優しい声で穏やかに話す女性は、彼女より少しだけ年上くらいに見える。

真剣に話し合う女性たちに、彼女は目をぱちくりとさせながら指をさす。

「それ、なに」

彼女が反応を返したことで、女性たちは安心したらしい。一瞬ホツとした表情になり、それから彼女が指し示したものを、不思議そうに動かす。

「何って……羽だが」

「ええ、羽よ」

にこやかに優しくそうな女性がパタパタさせるそれ。黒く、紺色の模様が入っている。

それは、どう見ても。

「……チヨウチヨ？」

彼女が指したのは、まごうことなく蝶の羽だ。それは女性の背から生えている。

「ええ」

にっこりと女性は頷いた。

「……トンボ」

彼女はもう一人の長身の女性のほうに目をやる。その女性の背には透き通って日に煌めくトンボの羽が生えている。

「ああ。そうだ」

微笑んで女性も頷く。彼女は首をかしげた。女性たちは人間のよくな体をしているように見えるのに、背には羽が生えている。こんな人、見たことがなかった。

「なんで？」

「何でと言われてもなあ……私はトンボ族だから。もとは八手族だが」

「わたくしはチョウ族よ。羽を見て分かるでしょう？ チョウチョなの」

「……それ、なに？」

トンボ族やらチョウ族やら、聞いたことがない単語。彼女も知らない単語だ。

女性たちは顔を見合わせた。純粹な人間だろう彼女に言葉で説明するのは、はっきり言って難しい。

「どうする？」

「……置いていいたら、死んでしまうのではなくて？ なら、結論はひとつよ」

蝶の羽を持つ女性は、にこやかにさも当然と言うようにトンボの羽の女性に言い切った。

「……ゼンダが怒るだろうな」

苦笑して、トンボの羽の女性は彼女のほうに手を伸ばした。きよとんとする彼女に、微笑みかけてくる。

「一緒に行こう。私たちの里へ来れば、いろいろと分かることもある」

差し伸べられた手を、彼女は呆然と見つめる。これは、なんだろう。

どうして自分に手を差し伸べているのだろう。

彼女は首をかしげた。

「なんで？」

「……来るの、いや？ でも、ここにいたら寒いでしょう？」

蝶の羽の女性が優しく問いかけてくる。彼女の目の前にかがみこんで、まっすぐに彼女の瞳を覗き込んだ。

「……なんで」

ポツンと彼女は呟いた。見る間に瞳が潤みだす。どうしてなのかわからない。

どうしてこんな自分に手を差し伸べるんだろう。

蝶の羽の女性は一瞬目を見開いて、それから彼女の頭を撫でた。

ゆっくりと、優しく。

その手は暖かく、彼女の知らない感触を伝えてくる。

確かな、ぬくもり。

「ね、一緒に、来て？ あったかい食べ物と飲み物でぬくまってくら、いっぱいお話ししましょう？ あなたのことを、たくさん教えて？」

彼女は首を振った。言葉が出てこない。でも、これだけは分かる。行っちゃダメだ。この人たちに迷惑がかかるだけだから。

「ふむ」

トンボの羽の女性がひとつ頷いて、彼女に手を伸ばした。

「なにかいろいろ事情があるようだが、とにかくここは寒い。体毛が薄い人間には酷だろう。行くぞ」

女性は彼女を難なく抱え上げた。びっくりとする彼女に少しのためらいも無く笑いかける。

「ああ、そうだ。お前の名は？ 私はキアラ。キアラと言う」

「あ、わたくしはナンナ。ナンナよ。あなたのお名前は？」

ためらいなく彼女を抱き上げるキアラと、ためらいなく微笑みかけてくるナンナに、彼女は泣き出した。

どうしてだろう。どうしてだろう？

こんな自分にどうして笑ってくれるの。頭を撫でてくれるの。抱っこしてくれるの。

だって今まで誰もそんなことしてくれなかったのに。しゃくりあげながら訴える彼女に、二人の虫の羽を持つ女性は微笑んだ。

「分からないな。私はまだお前の名も知らないし」

けれど彼女は今にも泣き出しそうな顔でキアラとナンナを見上げていたから。

何もかもに捨てられたかのような、絶望した表情で座り込んだ子供だから。

そんな子供を、置いて行くことはキアラには出来なかったのだ。

「そうね。分からないわ。だから教えて？ あなたのこと、あなたのお名前」

こんなに小さいのに、どこまでも傷ついたような瞳をしている女の子。

こんなに可愛いのに、人が訪れることが難しい場所に薄着で座り込んでいた。

聞こえてきた泣き声はこの子のものだったのだと、ナンナは気がついていて。

強い力を持っている女の子だ。とても悲しい心を持った子だ。だからこそ放っておけない。

「名前は、あるか？」

キアラが訊くと、少女は泣きながら頷いた。

「……リンカ」

それは誰がつけた名なのか分からない。けれど確かに彼女の名だ。己の身体以外に彼女が持つことを許された、たったひとつのもの。

「リンカ。可愛い名前ね」

ナンナは微笑み、リンカの頬を撫でた。

「大丈夫よ。泣かないで。わたくしもキアラも……あなたを置いて行ったりしないから」

彼女　リンカが今まで知らなかったもの。それを惜しげもなく与えてくれる虫の羽を持った二人、キアラとナンナ。

一緒に行こうと言ってくれた彼女たちに連れられて、リンカは空を飛んだ。

宙に浮いたことに怯えてすがり付いてくるリンカに、キアラは笑いかける。

「ほら、目を開けて見てみるといい。人間は空を飛べないのだから、こういうときくらいは楽しんでおくものだ」

横を飛んでいるナンナがリンカの背を撫でてくれる。

リンカは恐る恐る目を開けた。

光が差している。

柔らかで、でも強い太陽の光が、広い広い世界を照らしているのが見えた。

大きな世界。どこまでも見渡せるような感覚。

地面を歩いていては決して分からない、全てを払拭するかのよう
な、光。

「……わぁ……！」

初めてリンカの瞳に光が宿った。それは太陽の光が反射しただけ
かもしれない。

そう見えただけかもしれない。でも、キアラとナンナは微笑を交
わした。

リンカが浮かべた表情は、本当に子供らしい嬉しそうに驚いた顔
だったから。

序・それは確かな希望の椿火・2（後書き）

序章が終了しました。

少女はこれから大切なものを知るのです。

椿火の謡（ほたびのうた）

き・とてもとても幸せな日々だった・1

五年後。

希望のような絶望を。

絶望のような希望を おれは確かに知っていた。

お前ならば出来るだろう。

いつものようにそう言われる。少年はただ黙って頷くだけだ。

青銀の髪を持ち、橙色の瞳の少年は、柄まで鉄で出来た無骨で大きな剣を床に突き刺すように携えている。大の大人でも持ち上げることが困難だろう剣だ。

それと己の身体だけが、彼の持ち物。

さあ、行け。

声に彼は頷き、大きな剣を軽々と持ち上げた。『斬る』と言うよりは『打ち砕く』用の、刃などあってないような剣。全てを、潰すような、物。

重い剣を持っているなどは思えないような身軽な動作で、彼は身を翻した。

これより始まるは、絶望。

櫓火の謡（ほたびのうた）

青い服の少女が走っていく。二つに結わえた紫がかった髪が楽しそうに揺れている。走るたびに腰に結ばれたチヨウチヨのような帯が跳ねた。

少女の顔は輝いていた。毎日が楽しい。こうしていられるのが嬉しい。

とても幸せだと、言葉よりも雄弁に彼女の紫色の瞳が述べている。何よりも、こうしてここで生きていられることが彼女の幸福。

「おはよう、リンカ。いい天気だね」

機嫌良く走ってきた彼女、リンカに、甲虫の羽を持つ少年が声をかけた。戦士であるカブト族の少年だ。虫の羽だけではない。身体の様も虫そのもので、まるで着ぐるみか服を着ているように見えても、彼らは服など着ていない。この里で、服を着ているのはリンカだけだ。転じて言えば、人間は彼女一人だけだから。

「おはよう、カレッタ！ ねえ、キアラかナンナ見なかった？」

「おいらは知らないよー。でもキアラ様ならいつものところだよ。ナンナ様は……チニユのところかなあ？」

「うー、チニユのところかあ……」

リンカが思い浮かべたのは、里に来たところからあまり仲の良くない少女の姿。

「あはは。そう言えば昨日もまたケンカしてたねえ」

里の皆がそれをよく知っているので、カレッタも笑っただけだ。なにせリンカとチニユは出会えばケンカする。それが毎日でも飽きずにケンカする。ここまで行けばもう、逆に仲がいいのだと思えないくらいに。

本人たちは頑として認めないが、リンカがケンカする相手はチニユだけで、チニユがケンカするのもリンカだけ。どう考えても仲が良いと思えない。

「うーん。じゃあ、キアラのとこ行こ」

「ナンナ様はいいの？」

「……キアラのところにいれば後から来ると思っし」

「そーだね。行くと思っよ」

カレッタの同意を得て、リンカはにっこりと笑った。

「じゃあね、カレッタ」

「あいよ。またね」

走っていくリンカを見送って、カプトムシの少年は苦笑する。

「いちいち歩かないとならないんだから、人間って不便だなあ。飛んでいけばひとつとびですぐ着くのになえ」

この里で唯一羽を持たない少女。虫族だけが住む里で唯一の人間。けれど、彼女はもう里の一員で、かけがえのない存在であることに違いない。

ここは『虫の里』。遥かな昔から強力な力を持つ虫族たちが住むところ。

赤い八子の身体を持ちながら、透き通ったトンボの羽を持つ彼女は、静かに目を閉じていた。彼女の目前には大きな滝が轟々と流れ落ちている。

瞬。

彼女、キアラは腕を振りぬいた。見えない鎌が振り切られるかのように、滝の水が大きく裂ける。その一瞬だけ、轟音が止んだ。

ぱちぱちぱちぱち。拍手の音に、キアラはわずかに瞳を和らげる。少し離れた小高い場所、そこに来たのがリンカだと、大分前から気がついていていた。キアラの精神集中を邪魔しないように、我慢して声をかけないようにしていたのだろう。

「すごいねえ、キアラー！」

紫の瞳を輝かせて、リンカは今にも川に落ちそうなくらいに身を乗り出している。

「落ちるぞ」

苦笑して注意し、キアラは背の羽を動かした。リンカの横に降り立って、彼女の頭を撫でてやる。嬉しそうにリンカは笑って、キアラを見上げた。長身のキアラと、まだ成長途中のリンカとでは、大分身長差があるので、視線を合わせるのも一苦労だ。

それでも、視線を合わせるようになっただけキアラはホツとしている。里に連れてきたばかりのころ、リンカは誰とも視線を合わせうとはしなかったのだから。

「キアラはすごいねえ。どうやったら滝を割れるの??」

「……そうだな、気合だろうか」

「わたしにも出来るかな」

「危ないから止めておけ」

「キアラは出来るでしょ」

真剣に見上げてくるリンカにキアラは再び苦笑する。この妹のような人間の少女は、キアラが出来ることは自分にも出来るのではないかとまず試したがるので、迂闊なことは言えないのだ。

リンカは人間で、キアラは虫族。しかも戦士であるトンボ族の長である。里でも一番の戦士だ。早々リンカに追いつけるような存在ではない。それに、キアラは妹のように大切に思っているこの少女に危険なことはさせたくなかった。

「私に出来てもリンカにはできないこともある。同じように、リンカにできて私にはできないこともあるだろう?」

そう言ってみると、リンカは難しい表情で考え込んだ。

「わたしが雷呼べるみたいに?」

「ああ、そうだ。あの力はリンカにしかないだろう? 里の誰にもない力だ。そして、私の力もほかの誰にもない力だ」

「うーん」

まだ納得していない様子のリンカは滝に目をやった。滝に意識を集中する。

瞬。

轟音を立てて滝に紫の雷が落ちた。

発生した熱と衝撃で、あたり一面が水蒸気に包まれる。

「……リンカ」

やれやれと言いたげにキアラが声をかける。とりあえず試したかったというのは分かるが。

「私の修行場を壊すつもりか？」

「……割れなかった」

リンカはがつくりと肩を落としている。自分の力である雷で、キアラのように滝を割ってみたかったのだ。

「だから、止めておけと言ったぞ？」

「うーうー、やってみたかったんだもん……強くなりたいし」

「充分だろう？ これだけのことが出来れば」

言いながらキアラは腕を振った。巻き起こった風が水蒸気を吹き飛ばして視界を広げる。

そこにあつた滝が、さつきまでとは形を変えていた。中ほどが大きくえぐれており、水の流れはさつきよりも激しく複雑になっている。

「全く……危うく私の修行場がなくなるところだった」

「うー、ごめんなさい……」

「まあ、これはこれで修行になりそうだが」

小さく縮こまるリンカに、キアラは笑いかけてまた彼女の頭を撫でてやった。

キアラとリンカの髪の色はよく似ている。キアラの髪もまた紫で、リンカはそれよりは少しだけ薄い紫色だ。瞳の色は二人とも同色、紫色である。キアラが虫族、リンカが人間の体でなければ本当に姉妹で通るだろう。

けれど、笑いあう彼女たちに種族など関係なく、心から大切な相手と想っているのも事実だ。

「さて、もう少しやっていくかな。リンカはどうする」

「見てるー」

「……面白いのか？ ロゼッタのところにも行って、装飾品作りでもしてきたらどうだ」

「やだ。キアラのところにいる」

楳火の謡（ほたびのうた）

とても楽しそうに言う『妹』に笑いかけて『姉』はもう一度滝の
根元に降り立った。
みっともない真似はできないなどと内心で思いながら。

喜・とてもとても幸せな日々だった・2

姉のような大好きな人の背を見つめながら、リンカは幸せを実感している。

ここは『虫の里』。遙かな過去から虫の身体を持つものだけが住むところだと聞いた。羽を持たない人間が来られる場所ではないことも。

そこに自分が来られたことはとても幸せだったと思う。リンカはここに来て初めて幸せと言うものを知った。

恐かった自分の力もキアラと特訓したおかげで今は制御できるようになった。誰を傷つけることもなく、この皆は彼女を恐れることもない。迫害も排除もせず、受け入れてくれたのだ。

拾ってくれたキアラが大好きだ。一緒にいてくれたナンナが大好きだ。受け入れてくれた里の皆がとても好きだ。

人間の間では化け物だったリンカも、ここではごく普通の女の子でいられる。

力の制御が出来るようになった時点で、リンカは人間なのだから、人間の里に帰るかと心配そうに訊かれたこともあったが、リンカはここに残ることを選んだ。

ここにすることが自分の幸せだと思っているからだ。

大好きなひとたちと暮らせる場所。

ここを護るためにリンカはキアラのように強くなりたいと思ってもいる。

里を護る戦士たち。トンボ族とカブト族とクワガタ族。彼らはとても強い戦士だ。トンボ族を率いている長、キアラの強さを見ているリンカにはよく分かる。それぞれの長は想像を絶する強さの持ち主だ。とんでもなく強いと思う。そんな強さが自分にも欲しい。

『虫の里』に来て大切なものが出来た。護りたい人たちに出会った。

だから強くなりたい。獣が襲ってきてても、災害が襲ってきてても、何が来てもここを護れるような強さが欲しい。

岩に座り込んでキアラが滝を割る様子を眺めているリンカの首に、シヤラリと何かが巻きついた。

驚いて振り返る。リンカの背後にそおっと忍び寄ってきていたのは、アゲハ蝶の羽を持つ女性、ナンナ。

「ナンナー。びっくりしたあ」

「ふふ、大成功ね」

ナンナはやわらかく微笑んでいる。茶目つ気を出してリンカを驚かせたかったらしい。ものすごくおっとりとした雰囲気はこの女性は、時折そういうことをして周りを驚かせる。

「びっくりしたでしょう」

「びっくりしたよ。ねえ、これなあに？」

リンカは自分の首にかけられた首飾りを見下ろす。金色に輝くその首飾りは太陽のような形をしていた。青い服に良く栄える。

「リンカに贈り物。ロゼッタのところで作っていたの。お日様、好きでしょう」

五年前、リンカとナンナに連れられて見たあの日の光。それからリンカはお日様が大好きだということを、ナンナはよく知っている。

「いいの？」

「ええ、もちろん」

「ありがとう！」

リンカは目を輝かせて受け取った。とても嬉しい。

「大事にする！」

「うふふ、そこまで喜んでもらえて嬉しいわ」

漆黒の髪と瞳の綺麗な女性はリンカの喜びのように嬉しそうに微笑んだ。外見だけならリンカとあまり変わらないが、彼女はリンカより大分年上だ。

「なにかお返ししないかね」

首飾りを撫でてリンカはナンナに笑いかけた。

「あら、お返しなんていらないわ。リンカが笑ってくれたから、それでもう充分なもの」

「うー、でもお、何かお返ししたいよー」

リンカが唇を尖らせたのを見て、ナンナは少し考え込んだ。本当にリンカが笑っていてくれたらそれでいいのだが、この『妹』はそれでは納得してくれないらしい。

「そうねえ、じゃあ……今度キアラと三人でちょっとお出かけにつきあってくれる？ ラクランド山にでもお弁当持って」

「うん！！」

要は単なる遠出、お出かけだ。だが、ナンナが付き合っただけで欲しかったことで、それは『お礼』に変わる。

「じゃあ、わたしお弁当作る！」

リンカは拳手して告げる。『虫の里』に来てから料理を覚えたので、作るのが楽しくて仕方ないのだ。ひいき目で見てもあまり上手な腕ではないが。

「あら、楽しみね」

リンカの料理の腕を知っていても、ナンナは動じない。むしろ嬉しそくに頷いている。

「待て。何故私まで混じっているのだ」

キアラが飛んできた。浮かんだままあきれた表情でナンナに言う。「大体、癒しの姫長がそう簡単に里の外に出られるわけがないだろう？ チョウ族の長だぞ、お前は」

キアラの言葉にナンナはころころと鈴が転がるような声で笑った。

「いやね、とても今更でなくて？ キアラ」

「そうだよー。いつも一緒に脱走してるじゃない」

リンカも小首をかしげている。ナンナは『虫の里』一番の癒しの力を持っていて、死者すら呼び戻せる力がある。癒しのチョウ族のなかでももっとも強い力の持ち主であるが故、彼女は里の皆から姫長と呼ばれている。里の中でも一番重要な立場なので、おのずと外出は制限されており、ナンナはほかの面々のように気楽に里から出

られない　という建前がある。

が、ナンナと仲がいいキアラは時折彼女を連れて遊びに行くことがあり、里一番の戦士であるキアラならば当然ほかの面々に気取られないように抜け出すことも可能で、キアラに引き取られたリンカも、しょっちゅう一緒にあって抜け出していた。

だから本当にキアラがそんなことを言い出すのは今更なのだ。

「うむ……それはそうだが」

キアラは仕方ないと言いたげに顔を苦笑いの形にゆがめて降り立った。まあ、里を出るなと頭から言うような固い思考の持ち主なら、最初からナンナを連れて遊びに行ったりしていい。

親友であるナンナが、立場に縛られて窮屈な思いをしないようにと考えているのも確かなのだ。

「リンカのお弁当楽しみよね」

「……上達したのか？　リンカ」

リンカの料理の腕を知っているキアラは真顔で『妹』に問う。大分間を置いてから、リンカは答えた。

「……… テンティオおばさんに習ってるから、大丈夫」

里での料理上手、セミ族のおばさんだ。正確にはキアラやナンナより若いはずだが、外見が二人よりふくよかで年がいつているように見えるので、リンカはおばさんと呼んでいる。

虫族は卵から生まれた容姿のまま長いこと生きることで、外見と実年齢が一致しないことが多いのだ。

「楽しみねえ。いつにしようかしら」

ナンナは無邪気に言っている。

「が、がんばる」

「……ナンナ、精神的圧力をかけるな……リンカ、別に花の蜜でいいんだぞ？」

里には山ほど溜め込まれた花の蜜がある。チョウ族であるナンナはそれを主食としている。別に普通のものも食べられるのだが、好みの問題だ。

「ダメ、がんばるの。首飾り貰ったお礼するんだから」
リンカはブンブン首を振り、ナンナはおっとりキアラに言うのける。

「わたくし、リンカが作ったものならなんだって食べるわよ？」

「ああ……まあ、それは私も一緒だが……大丈夫か、リンカ？ あまり難しいものはいいいからな。火傷でもしたら大変だ」

突き止めて言えば、味よりも何よりも単にリンカの不器用さを心配しているだけだった。ナンナは再び声を上げて笑う。

「わたくしもだけど、あなたも相当過保護でなくて？」

「……言うな。分かっている」

五年前のリンカの様子を見ていれば、おのずとそうならざるを得ない。あんなに小さな女の子が、自分の命を捨てようとしていた。自分の存在が罪だと言う、幼子。

その小さな手を引いた瞬間、護ろうと思ったのは嘘ではなく、今も変わらない。

大きくなっていく子供。やがては大人になって、里から出て行くというかもしれない。

それでも、できる限りのことをしてやりたいと願う心は、種族が違ってもまるで親のようだ。愛されることすら知らなかった子供の幸せを願う、心。

「カホゴってなあに？」

首をかしげるリンカに、『姉』二人は苦笑した。

喜・とてもとても幸せな日々だった・3

そのままリンカはナンナと二人、キアラの修行を見物し、時には話をして、笑いあいながら時間は過ぎていった。

そろそろ昼で、リンカのお腹がぐうつと鳴るころ、キアラはようやく修行を切り上げた。

「食事しに行こう」

「ごはんー」

「お腹がすいたわね」

三人で連れ立って歩く。リンカを間に挟んでいる間は、キアラもナンナも飛ぼうとはしない。『妹』に合わせて歩いてくれる。

小さいころ、リンカが自分には羽がないと泣いたことを覚えているのだ。飛べない。雷を生み出す力はあるのに、羽がない。それが悲しい。

里の皆が困り果てた出来事だ。人間に虫族の羽をつける方法はたった一つだけあるが、それをするわけにはいかない。他に方法はなにものかとナンナは真剣に探し、キアラは真剣に『妹』の説得を開始した。

方法はある。でもそれをするを本当に望むか？ と。

聞いたリンカは首を横に振った。その方法は、羽を得られてもリンカの大事なものを失うものだったのだ。そのすぐ後に疲れた様子のナンナがやってきて、ごめんなさい、他に方法はないようなのと、リンカに泣き出しそうな表情で謝ったとき、リンカは羽を求めることを止めた。

そのかわり、二人はリンカと歩くときには飛ばなくなった。

その気持ちだけで、もう充分すぎるほどだ。

ナンナと手をつなぎ、キアラと腕を組み、リンカは嬉しそうに笑う。

ここにあり、幸せ。

確かなものを感じて上機嫌のリンカに、声がかかる。

「まーたお二人にべつたりしているのですわね、リンカ！！」
射るように聞こえてきた声に、リンカは正直に顔をしかめた。

天敵、現る。

「あら、チニユ」

のほほんとナンナが笑いかけると、声をかけられた少女は照れくさそうに微笑んだ。

「ご機嫌いかがですか、ナンナ様、キアラ様」

黄色い体色の八千族の少女だ。髪は金髪で瞳は赤く、一目で気が強そうな印象を受ける。年頃はリンカよりも大分上、二十歳くらいに見えるが、実年齢ではそう変わらない。

「機嫌は良くてよ？ リンカと一緒なもの」

ナンナはおつとりと答え、その答えにチニユはあからさまにムツとした表情になった。可愛らしい顔を、ムツとした表情のままリンカに向ける。

「いい加減にお二人にご迷惑だということくらい理解したらどうなのですか？」

「そんなことないもん！ キアラもナンナも嫌がってないもん！」

べーっと舌を出してリンカはキアラの腕にすがりつき、ナンナの手を握り締める。

「あらあら」

「……始まったな、いつものやつが」

ナンナは微笑ましいと言いたげで、キアラは少しだけ口元を笑わせて肩をすくめた。

少女二人はお互いに睨み合っているが、それはどこからどう見ても小動物がピイピイ言っているような印象で、可愛らしいと思えない。

「まああ！ また呼び捨てにして！ お二人とも里の重要人物なの

ですよ！　ちゃんと敬称をお付けしなさいとあれだけ言ったでしょ？！？」

「いいんだもん！　キアラもナンナもわたしにはしなくていいって言うてくれたもん！」

「どこまでも無礼な娘ですこと！　キアラ様がお優しいことに甘えて、ナンナ様のお言葉にまで甘えるなんて！」

「いいの！　わたしキアラとナンナの『妹』なんだから！」

「~~~~っ！！　許せませんわ~~~~っ！！！」

要するに、チニユはリンカが羨ましいのだった。キアラとナンナを尊敬して、敬愛の域にまで達しているチニユである。それがある日突然、連れてきた人間の女の子に二人はかかりきりになり、その上リンカを『妹』のように可愛がる始末。それまでナンナの後継として次の姫長に決められていたチニユは、リンカが存在に心からムツとした。

……ヤキモチである。ナンナを取られたような気がしているのだ。ナンナだけでなく、ナンナの親友のキアラも幼いリンカにかかりきりだったせいで、余計だ。

小さなリンカはキアラとナンナ以外の虫族には全くと言っていいほど反応を返さなかったため、一応、チニユも心配してはいた。早くあの子が元気になればいいのにも思ってもいた。

が、それとこれとは別である。しかも元気になった今も、リンカは二人をほとんど独占しているようにチニユには見えるので、なおさら腹が立つのだった。

「いつもいつもいつもいつもっ！！　どこまでお二人の邪魔をすれば気が済むのですか、リンカっ！」

「邪魔してないもん！」

つーんとリンカは顔を背ける。実際邪魔はしていない。キアラの修行を見ている間はおとなしくしているし、ナンナと話をするのは

ナンナ自身の気分転換にも良いのだと分かっている。しかし、そんな正論が通じるのならばチニユはいちいち突つかかっては来ないだろう。

「可愛くないですわっ!!」

「チニユに言われたくないよっ!」

「何ですって!? わたくしはあなたよりずっと可愛らしいですわっ!!」

「そう。良かったね。じゃああっち行って」

「なんですのそれはっ!! 本当に不快な方ですわねっ!!」

「これから三人でご飯食べに行くんだもん。邪魔だよチニユ」

「ご一緒させていただけませんか、お二方。よろしいですわよね?」

「えーっ!! やだっ!!ダメ!!」

「あなたには訊いておりません。黙っていてくださいまし」

「ダメ!! ダメ!! ぜえったいダメーっ!!」

可愛らしい口論は、押し殺した笑い声で止まった。

身を折って笑っているのは、リンカの左右の『姉』二人。

「……キアラ、ナンナ、何で笑うの?」

「わたくし、なにかおかしいことでもいたしましたでしょうか?」

ケンカをしていた本人たちは真剣だったのだが、見ている者には和やかで面白い。

「ぷっ……くっくっ……いや、すまない、つい……」

「ご、ごめんなさい……ふっ……」

収まらない笑いに身を震わせている二人を見て、少女たちも勢いを削がれてしまった。

周りを見ると、見ていた皆が笑っている。

「……なんで皆笑うの……」

「……納得できませんわ……」

無然とする二人だが、彼女たちは自分たちがとても仲が悪いと思っっているの分かっていない。どれだけケンカしようともリンカはチニユに対して雷の力を放とうとはしないし、チニユもリンカにお

尻の針を刺そうとはしないのだ。彼女は弱く炎を放つことも出来るが、それもリンカに向けられたことは一度もない。だからこそ、皆リンカとチニユのケン力を見て笑うのだ。

ああ、またやっているよ、仲が良いねえと。

最初のうちはそれでも心配した誰かが止めていたのだが、最近ではそれも全くない。かえって皆面白そうに見守るようになった。

すっかり里の微笑ましい名物と化しているのである。

「ねえ、いつまで笑ってるのー？ もうご飯食べに行こうよー」

待っていても止まらないようなので、リンカはキアラとナンナの腕を引つ張った。

「まあ！リンカー！！ 無礼ですわよ！？」

「また始まったー。チニユきらいっ」

「わ、わたくしだってあなたなんか大嫌いですわっ」

「ふうん。じゃあ顔も見たくないよねえ？」

「も、もちろんですわっ」

「じゃあお昼一緒なんてイヤだね。じゃあねー」

「っー！！」

はめられたことに気がついて齒噛みしてももう遅い。リンカは意気揚々とキアラとナンナの手を引いて、食堂がある場所へ歩いていく。

「……リンカなんて、だいつきらいですわーっ！！」

叫びを背中に受けて、キアラが吹き出し、ナンナは声を押し殺して笑っている。

「か、かわし方が上手になったな、リンカ」

笑いをこらえながらキアラが言うと、リンカは頬を膨らませた。

「お腹減ってるのにチニユしつこいから。いつつもキアラとナンナにひつつくなってるさかいし。かわし方だってそろそろ覚えるよ」

「賢いわねえ、リンカ」

ナンナはとても楽しそうに言う。

「毎日やってればちよつとは考えるってば……」

「本当に毎日飽きないな」

「飽きてるよ。チニユがしつこいのっ」

「ふふ、仲が良いわね」

「良くないもんっ」

リンカは認めない。あれだけケンカしているというのに、どうして皆自分とチニユのことを仲良しと思うのか分からないのだ。

ケンカと言うよりじゃれ合いにしか見えていないことを、彼女もチニユも気付いていなかった。

「チニユとは仲悪いの、すぐ悪いの」

「そうか。そういうことしておこっ」

「悪いのっ」

「そうね。そういうことしておいて、ご飯食べに行きましょう」

「悪いんだってば！」

頑として認めないリンカの頭を撫でて、キアラとナンナは微笑んだ。

喜・とてもとても幸せな日々だった・4

ラクランド山は春の最中だった。お弁当を持って歩くにはちょうどいい気候で、咲き乱れた花たちが視界を潤す。ここはナンナのお気に入りの場所だ。

どこよりも花が咲き、あたり一面にいい香りが立ち込めている場所。

ナイシヨで里を抜け出して、リンカはキアラたちとラクランド山に降り立った。

「きれいだねえ」

自作のお弁当を抱えて、リンカは周りを見渡す。何度来てもここは美しい。花の中にナンナが降り立つ。その光景が、リンカはとても好きだった。綺麗なナンナが花の中に座り、そこで謳^{うた}う光景は、幾度見ても何度見ても綺麗だと思う、忘れられない光景だ。

ナンナが謳う唄は、人の里では聞いたことがないようなものばかり。なにを謳うのかと訊いたこともあった。

ナンナは虫族の者はあるものそのままを謳^{うた}うと答えた。
在るもの。

自然としてそこに在るものを、ありのまま称え、謳^{うた}うと。

とても自然に、彼女はそう答え、リンカもなるほど頷いた。虫族たちの営みはまさに自然そのものだからだ。逆らわず、自然そのままに従って生きている。

ありえないものなどそこにはなく、自分達の手に負えない品物を作り出すこともない。

世界にあるものを、そのままに認める。

とても自然で当たり前の生活だ。

「ねえ、ナンナ。唄を教えてください」

「いいわよ。一緒に謳いましょうか」

リンカにせがまれ、ナンナは微笑む。虫族の唄は人の声帯で発声

が難しいものばかりだが、ナンナはリンカにも発声しやすいように作り変えて謳った。

【 春の風よ。

優しい目覚めを告げる声よ。

息吹を伝え、全ての命を包んであげよう。

さあ、ぬくもりを、生命いのちの唄を。

春の日差しと共に、ただひたすらに、愛を注ごう。

そこにいるだけでいいのだから。

全ての命に祝福を。

尊い生命に、遥かなる祈りを教えてあげよう。

貴方の生命は、それだけで尊いと 】【

「……リンカ、音がずれているぞ」

花畑の中に座り、親友と『妹』の合唱を聞いていたキアラは苦笑している。やはり虫族の唄は人間には音のとり方と発声が困難のようだ。身体づくりがそもそも違うのだから無理もない。

「む、難しいよう」

「まあ、キアラ。リンカは一生懸命謳ったでしょう。水を差すのはやめてあげて？」

「はは、そうだな。リンカ、何度も繰り返せば上手になるさ。練習すればいい。雷の力だったたくさん練習して制御できるようになったのだから、ナンナに教われれば上手に謳えるようになる」

「うん、がんばる」

こっくりと頷いて、リンカはナンナに違う唄を謳ってとせがんだ。謳うことが好きなナンナはにこやかに頷き、可愛い『妹』に謳ってあげる。

あなたが再び絶望に捕まらないように、いくらだって謳ってあげよう。もう二度と、あんなに昏い瞳になるリンカなど見たくはない

から。

あなたの瞳にいつも、いつまでも希望が宿り続けるように。それは確かにナンナの願いだ。キアラの願いだ。

あの小さな手をとったその日から、ずっと思い続けている事柄……。

花畑の中を、ナンナの美しい唄声が流れていく。癒しの姫長の歌声に聞き惚れるのは、虫族最強の戦士とその『妹』。

やわらかく穏やかな時間が過ぎてゆく。

そうしているうちにリンカは動物たちが唄を聞きに来たことに気がついた。

可愛らしいウサギが来たのを始めに、シカやらイノシシやらクマやらがのそのそと寄ってきては歌に聞き惚れるように座り込む。

誰も邪魔しない。凶暴なはずのクマすらナンナの謳う姿に見惚れている。

獲物だろウサギやシカがすぐそばにいても、争いは起こらない。邪魔をしないことが暗黙の了解であるかのように。

唄が終わっても、獣たちはそのまま、言葉はなくとも次を要求しているようにも思えた。

「みんな来たね」

「そうだな」

「ナンナの唄、すごいね」

「そうだな」

リンカは言いながら白と桃色の花を摘んだ。花冠を編み始める。ナンナはもう一曲謳い始めた。キアラはくつろいだ様子で座っている。

「天気がいいな」

「うん。うれしいね」

「そうだな……」

たわいもない会話ばかり。それぞれがそれぞれに好きなことをし

ていても、その距離が離れることはない。

心が離れることはない。

「できたー。キアラ、あげる」

白と桃色の花冠を、『姉』の頭にかぶせる。キアラは笑って礼を言った。

「ああ、ありがとう」

謳い終わったナンナが少し寂しげに訊いてくる。

「あら、わたくしには？」

「今から編むのー。ちよっと待ってて」

「うふふ、待っているわ」

「ナンナにはこっちの色の花がいいかなー」

咲き乱れる花はどれも美しく、可愛らしく愛おしい。

「花冠だけでなく腕輪とかもつくろっかな」

「花を編むのは上手だな、リンカ」

頭に乗っている花冠を指差して、キアラは笑っている。

「これと同じくらい料理は上手になったのか？」

橙色と白い花を編んでいたリンカの手が、ぴたりと止まった。ち

よっと考えて、首をかしげ、それからキアラを見る。

「……食べたら、分かる、かも？」

「何故に疑問系なのだ……？」

自信がないのかそれともあるのか。自分でも分かっているようになりリンカの表情で判断するのは難しい。

「ううー、テンテイオおばさんに味見してもらえばよかったかなあ」

お忍びで遊びに行くので、お弁当のことをほかのひとに言うわけにはいかず、リンカひとりで作ったのである。一緒に暮らしているキアラも手伝おうかと言ったのだが、一人でやるの！と聞かなくて。首飾りをくれたナンナへのお礼なのだから、一人でやらな

いと意味がないと、リンカは変なところで強情だった。

台所から、がしゃん、がたごた、ごこん などの異音が聞こえてくるたびにハラハラしていた今朝のキアラである。

幸い大きな怪我をすることもなく（小さな火傷ならたくさんしたようだが、会うなりナンナが癒しの力で治した）今に至るのだが。「うふふ、リンカの力作のお弁当、楽しみね」

「……いろんな意味で、な……」
今朝の異音を思い出してキアラは苦笑している。あれだけががんばっていたのだから、食べた後はぜひ褒めてやりたいが、さてどんな出来になっているのやら。

リンカは再び花冠の製作に取り掛かり、完成させてナンナの頭に乗せる。

花畑の中に座るチヨウの羽を持つナンナに、花の冠は良く似合った。穏やかに微笑んでいる彼女は、まさしく姫だ。

「似合うかしら？」

「うん！」

「ありがとう、リンカ」

嬉しそうなナンナに、リンカも嬉しそうに笑って、次にウサギのところを駆けていった。ウサギは逃げるつもりもなかったのか、おとなしく少女の腕の中におさまった。

「ふかふか」

ウサギを抱っこしたまま、クマの背中に寄りかかるリンカである。クマはナンナの歌ですっかり眠くなったらしく、少女に寄りかかられても気にしないでうとうととしている。

ここでもしも暴れるようならすぐさまキアラが叩きのめしただろうが、ナンナの唄の力で、ここら一帯はのほほんとした雰囲気も満ちており、とても争いを起こすような場所ではなくなっている。野生の生き物たちはちゃんとそれを理解していて、皆ゆったりとくつろいでいた。

ウサギを撫でて満足したリンカは、ウサギをクマの背中に乗せてやり、次にのつたりと草を食^はんでいる野生馬のところに近寄った。

馬は近寄ってきたリンカに顔を寄せる。何か用？ と訊いているようなそぶり。

「ねえ、乗せて？」

小首をかしげてリンカが言うと、馬は食んでいた草を飲み込み、どうしようかちよっとだけ考え込んだようだ。

ぶるるると首を振って、馬はリンカに対して横腹を見せ、彼女が背に乗れるように座り込んだ。

「わあい、ありがとう」

お礼を言っただけでリンカが背に乗ると、馬は立ち上がる。ちゃんとリンカの意味が伝わっているのだ。

「あまり遠くに行くなよ？ 急な斜面や崖があるから」

見ていたキアラが注意する。馬に乗っているのなら馬が注意して走ってくれるだろうが、念のためだ。リンカには羽がなく、飛べないのだから。

「うん、分かった」

頷いて馬の背をぽんぽんと叩く。

「お散歩しよう」

リンカの言葉に同意するように、馬は走り出した。その背にナンナがやんわりと声をかける。

「お昼には戻ってきてね？ お弁当食べさせてくれるのじゃない？」

「はい」

喜・とてもとても幸せな日々だった・5

花畑の中を走っていく馬の背で、リンカは楽しそうに笑っている。馬は結構な速度で走っており、手綱も何もない野生馬のだが、少女は危なげなく背に乗っていた。

疾風と呼ばれるほど早く飛べるキアラに、いつも抱えられて空を飛んでいるので、ちょっとやそつとの速さでは目がまわることがないらしい。

戦士に引き取られ、自分の力の制御のために鍛錬もしていたので、実は結構反射のいいリンカである。馬が走る速度くらいでどうこうなることもないのだ。

しばらく走り回って、もうそろそろ戻ろうかな、と満足したリンカが思ったとき、馬が足を止めた。

「どうしたの？」

馬はじいっとどこかを見ている。首の角度からそう判断して、リンカもそつちを見た。

森がある。

馬はそこを見ている。リンカは眉をひそめた。子供のころ迷い込んで狼に襲われた経験から、森の中に入るのは恐かった。たとえ撃退できる力を持ってはいても、その力でたくさんの狼を殺した記憶が、リンカの心には焼きついてしまっている。

たくさんの命を奪える自分の力が、怖い。

森は彼女にそれを思い出させる場所だから、怖い。

「ね、戻ろう？」

ほんと馬の首筋を叩く。森の中に何かあるのか分からなかったが、一人で入ってみる気は起こらない。

馬は動かない。首筋を撫でてやって、馬が怯えていることにリンカは気がついた。

「……なにが、いるの？」

森の中に、馬が警戒するような何かがある。肉食の獣だろうか？
それならばなおさら森には近付きたくなかった。

「ね、戻ろう？」

なだめるように馬の首を撫で、なんとか戻るようにとお願いする。
馬だけを置いて戻るわけにはいかない。森にいるのが肉食の獣だっ
たら、乗せてくれたこの馬が襲われてしまいかもしれない。

「キアラたちのそばなら安全だよ。戻ろう？」

ぼんぼんと励ますように叩いてやると、ようやく馬は戻る気にな
ったようだ。踵を返す馬にホツとしたとき、ガサリと音がした。

「!？」

反射的に振り返る。森から現れたのは人影だった。獣ではない。
てつきり獣が来ると思っていたのに予想と違う人影に、目を丸く
するリンカを乗せて、音に驚いた馬は走り出す。

「わ、ま、待つて……っ！」

動揺していたリンカは、いきなり走り出した馬に体勢を崩してし
まう。

ぐらり。身体が傾いだ。

落ちる。下は柔らかい草原だが、ところどころに岩がある。そこ
に落ちれば怪我で済むかどうか。

「っ……！」

リンカは目をつぶった。運が良ければかすり傷。悪ければ……キ
アラとナンナのところには戻れまい。

衝撃。

だが、痛みは来なかった。代わりに伝わってきたのは、人肌のぬ
くもり。

「……？」

リンカは恐る恐る目を開けた。すぐそこに紺と赤の布地が見える。
久しく見ていない、自分以外の服を着た人。

見上げると、無表情で彼女を抱えている少年がそこにいた。髪は
青銀、瞳は夕日のような橙色。年頃はリンカとあまり変わらないく

らいか。感情が多感な年頃のはずなのに、そのわりにはやたらと無表情だ。可愛い少女を抱えているというのに、それを思わせるような感情は彼の中には浮かんでいないらしい。

ぼかんと見上げるリンカに、少年は無表情に何の感慨もなく訊いてくる。

「何故、人間がこんなところにいる？」

「え……あ！」

リンカはあわてて少年の腕から逃れた。彼女の思い出の中の人間は、優しいところなど何一つないものだ。だから馬から落ちたところを助けられたということも分からなかった。

距離をとろうとしたリンカを、少年は難なく捕まえる。

「やだっ！」

「……お前、普通の人間だろう？ 何故こんな山のとっぺんにいられる？」

「??？ 何でって……」

そう言えば、とリンカは首をかしげる。自分はキアラとナンナとここに来たが、この少年はどうやってここまで来たのだろうか？ 羽がない人間が来られる場所ではないはずだ。

「あなたも何でいるの？」

きよとんとそう問いかける。腕はつかまれたままだったが、逃げようと思えば力を使って逃げられる。

「……おれのことはいい。お前は何故ここにいる」

「何でって……ええと、お出かけ」

リンカとしてはそう答えるしかない。大好きな人たちとお出かけして来たことに嘘はないのだから。

「お出かけ……？ どうやってここまで」

少年は無表情ながらも心底不思議そうだ。どう見てもリンカは可愛い女の子で、格好も軽装、とても標高の高い山を登るような格好ではない。その点を言えば少年も同じような格好ではあるのだが。

リンカと違う点は、背中に重そうな鉄の剣を背負っていることくらいか。

「ちよつと出かけて来られるような山じゃないだろう」

それは麓から順序だてて登ってくればの話だ。虫族と一緒に空を飛んでくれば、『ちよつとお出かけ』程度なのである。

「でもお出かけだよ？」

同じような返答が返ってくるのに埒が明かないと見たのか、少年は質問を少し変えた。

「……歩いてここまで？」

「ううん、空飛んで」

「!？」

そこで初めて少年の顔に表情が浮かんだ。

ひたすらに、不可解なものを見たと言わんばかりの顔のしかめ方だ。

「……お前、人間か？」

「うん」

リンカはあっさり頷く。自分は人間だ。この上もないくらいに人間だ。異質な力を持つてはいても、どう頑張っても人間だ。

「空、どうやって飛ぶ」

「わたしが飛ぶんじゃないよ？ 連れて来てもらったの」

「連れて……？」

そのときだ。

「リンカ!!」

キアラの声がした。馬が一頭で戻ってきたのであわててリンカを捜しに来たのだろう。猛烈な勢いで飛んでくる彼女を視認した一瞬後、即座に少年は飛び退り、リンカの腕は開放された。

「大丈夫か!？」

「あ、キアラ。うん、大丈夫だよ」

キアラはリンカを背にかばうように降り立ち、いぶかしげに少年を見る。

「……何者だ」

少年は答えず、キアラの身体をじつと見ている。まるで何かを確かめているように。

「リンカ、何かされたか？」

「え。うーん……されたのかなあ？ あれ？」

よくよく考えてみると、腕をつかまれただけで、馬から落ちたところを助けてもらったのではないだろうか。リンカはようやくそのことに思い当たった。

「なんか、助けてくれたみたいだよ？」

「助け……？ 獣にでも襲われたのか？」

「ううん、馬から落ちたの」

「……そうか」

そこで初めてキアラは身体から力を抜いた。リンカがこの少年に何かされたのかと心配したが、杞憂だったようだ。少年に視線を向けて微笑みかける。

「私の妹を助けてくれたそうだな、ありがとう。礼を言う」

「……ああ」

呟くように返して、少年はリンカとキアラを見つめた。

「妹……？」

ポツリと呟く。

虫の身体を持つキアラと、人間のリンカが一緒にいることが不思議なのだろうか？

「うん、わたしキアラの妹なの」

リンカは嬉しそうにキアラの腕につかまる。

「怪我はないのか？ リンカ」

「ないよ。平気」

キアラに頭を撫でられて、リンカは心から幸せそうに笑っている。

「全く……馬が誰も乗せずに戻ってきたときはゾツとしたぞ」

「ごめんなさい。びっくりしちゃって落ちちゃったの。馬さんが悪いんじゃないよ？」

「……分かった分かった。次からは気をつけなさい」
「はい」

リンカは手を上げて言い、キアラは苦笑した。別に誰が悪いわけでもないのに叱れない。

「リンカ、キアラ」

ナンナも飛んできた。彼女はキアラほど早く飛べないので、どうしても遅れてしまうのは仕方ないだろう。

「あら、リンカ……こちらの方、どなた？」

少年を見ながらおっとりと問いかける。彼女が慌てていないのは、親友のキアラが慌てていないからだ。キアラが慌てていないのなら、リンカに怪我などないと分かっている。『妹』が怪我をしたり、なにか無体な目にあっていたのなら、今頃キアラはおとなしくなどしてはいないはず。

「知らないひと。でも馬から落ちたところ助けてくれたよ」

「あら、そうなの。それはそれは。リンカがお世話になりました」
ぺこりと頭を下げる彼女に、少年は面喰らったようだ。

「……別に」

「たいしたことはしていない、と感情があまり浮かんでいない声で答える。」

「それでもありがとうございます。おかげで可愛い妹が怪我もしないで済んだようですから」

「……妹……」

リンカに微笑むナンナを見て、少年はまた呟いた。

「ところで、あなたはどうしてここに？」

微笑みながらナンナは少年に向き直る。

少年は答えない。キアラに何者だと恫喝されたときと同様に。

「……あ、道に迷ったの？ わたしみたい」

リンカは自分がキアラたちに拾われたときのことを思い出していた。自分もよく分からないうちに山のとっぺんに移動していて、キアラたちが見つけてくれなければあのまま凍死していただろう。初

めて見た雪の中で、それが雪だと知らないまま、死んでいただろう。
この少年もリンカと同じなのではないかと考えた。

「……この子も？」

キアラはいぶかしげだ。リンカときはナンナが彼女の悲しみに
反応したので捜しに来たが、この少年にはナンナは何も感じていな
いようだ。

そもそも何故こんなところにこの少年がいるのだ？　ここは人が
来られるような場所ではない……五年前、リンカが現れた場所と同
じように。

『妹』が現れたのは彼女の持つ異質な力がその原因だと見当はつ
いている。

だが、この少年は？

「困ってるの？」

リンカは少年に近付いて、彼の顔を見上げた。

「ね、大丈夫？　お腹へってない？　わたしお弁当作って来てるか
ら、分けてあげるよ」

自分のときはとても空腹だった。寒くて心細くて、なによりも自
分の身がとても罪深く感じていたから、寂しかった。キアラとナン
ナが差し伸べてくれた手が、とてもとても嬉しかったから。

リンカはこの少年もきつとそうなのだと考えた。彼の手を握り、
少女は笑いかける。

あの日キアラとナンナが自分にそうしてくれたように。

「ね、わたしはリンカ。あなたのお名前は？」

「……アシト」

「アシト、アシト……うん、覚えた。ねえ、おいでよ。お弁当食べ
よう。わたしあんまり上手じゃないけど、頑張って作ったの。いっ
ぱい作ったからアシトがいても充分足りるよ」

リンカはアシトの手を引いて、お弁当を置いてきた場所まで連れ
て行こうと引つ張っていく。アシトも逆らわず彼女の後についてい
くつもりらしい。

その背を、ナンナは見つめて呟いた。

「……キアラ、あの子、驚かなかったわね」

ナンナの瞳は静かな光を湛えている。それは悲しみのような慈しみのような……淡い光だ。

うすうすと感じ取ってはいたが、キアラは訊き返した。

「……何を、だ？」

「わたくしたちの身体を見ても……驚かなかったわ。初めて会ったときのリンカはとても驚いていたのに」

小さな少女はキアラたちを見てとても驚いていた。虫の身体と羽を持つ彼女たちの存在を、普通の人間が知るわけがないのだから、当たり前前の反応だろう。

「……それに、あの剣、か」

キアラはアシトが背負っている重そうな鉄の剣を見取っていた。

あの剣を振り回すことが出来るのなら、かなりの力の持ち主だ。

一見細そうな体つきをしていたが、キアラを見たときのあの身のこなしから考えると、見たままの少年ではありえまい。

「……どうする？」

リンカはあの少年に親近感を覚えてしまったようだ。自分と同じ存在なのではないかと。

だが、それはありえまい。リンカのような力の持ち主がほいほいと存在しているのならば、人間世界で彼女が迫害されることなどないのだから。

「……信じたいわ」

親友の問いに、ナンナは静かに答える。

「あの子、リンカを助けてくれたのではなくて？　なら、その心を……優しさを信じたいわ」

癒しの姫長と、里一番の戦士、トンボ族の長は、可愛い『妹』が手を引く少年の背を見ている。自分たちの『妹』が繋ぐ手を、彼はどうするつもりなのだろう？

楳火の謡（ほたびのうた）

き・とてもとても幸せな日々だった・5（後書き）

ここから話は流れ始めます。

貳・覆い包むような絶望の始まり・1

「また抜け出したのか、ナンナ……」

里をまとめるセミ族の長、ゼンダは苦々しく顔をしかめている。

彼の前にはキアラ、ナンナ、後ろにリンカ、そして、アシト。アシトを連れてきたことで、ナンナの脱走がばれてしまった。そもそも連れてきてしまった以上言い訳も出来ないの、まっすぐゼンダのところに戻ってきたのである。ある意味潔く自首したとも、けろりとして開き直ったとも言おう。

「何度も訊いておるが、癒しの姫長の自覚はあるのだろうか？」

「ありましてよ？ ですからいつもキアラと一緒に出かけているでしょう。最近では、リンカもとても頼もしい護衛になってくれるもの」

ナンナはにこやかに言つてのけた。実際には護衛など全く考えずに、親友と『妹』と遊びに出ただけなのだが。

「……しかもまた拾ってきたのか」

苦い表情のまま、ゼンダは彼女たちの背後に無表情で座っているアシトを見る。五年前はそこに幼いリンカが無気力に座っていた。

あのときはキアラとナンナに押し切られ、リンカの滞在を許可してしまった。ゼンダから見ても五年前のリンカは放っておけなかった。見捨ててしまえば確実に失われる命だったからだ。心優しい虫族たちに、彼女を見捨てることなど出来なかつたのである。

だが、この少年はどうだろう。見た感じ、五年前のリンカとは印象が違う。どこへ行っていいのか分からなかつたあの幼い少女とは、違うような印象を、ゼンダは受けている。

「どこで拾ってきたのだ？」

「ラクランド山だ」

キアラが答える。

「ラクランド？ そこに、この人間が？」

同じ山脈にあるほかの山と比べて標高は低い、その代わり麓から上ってくることは不可能に近いような絶壁が中腹にある山だ。羽のない人間が登ってこられるような山ではない。

しかも、アシトは軽装だった。

背中に重い剣だけを背負った少年。怪しいことこの上ない。

「……なんでこんなもの拾ってきたのだ」

「リンカがなついてしまった。置いていこうとしたら妹が泣き出しそうだったものでな」

「……ぬしら、リンカにはほんに甘いのう……そのうちクマでも拾ってくるのではあるまいな？」

とても今更なことなので、ゼンダも怒る気が失せてしまっている。キアラたちがリンカに甘いのは、里の全員がよく知っている事柄だ。「拾ってきていいの、クマ？」

リンカは小首をかしげている。クマを拾ってくる気はないが、ゼンダがいいというのなら拾ってきたほうがいいのだろうか。しかしいくらなんでもキアラが抱えるにはクマは大きすぎるような気も、する。キアラは力持ちだから重さは問題ないが、大きすぎるとさすがに抱えてくるのは面倒だろう。抱えられている間、おとなしくしているかどうかも分からない。

危ないんじゃないかなあなど考えながら、ゼンダの言葉を待つ。

「いかん。いくらなんでもクマはよせ。シカ程度なら許すが」

「シカ……！」

シカの背に乗って里の中を駆け回るのを想像して、きらきらと瞳を輝かせているリンカに、ゼンダはにっこりと言った。

「クマは肉が固いが、シカなら美味しく食べる」

「……ゼンダ、きらい……」

むっつりと言り返すリンカに、ゼンダは豪快に笑った。

「ま、良かるう。そろそろリンカにもムコがいるだろうからの。人里からさらってくるわけにもいかんし、オスが迷い込んできたといふならちようどよいわ」

「ムコ？」

本人はきよとんとしている。アシトは無表情のまま、隣にいるリンカの横顔を見た。見た感じでは美少女と美少年でお似合いにも思えるが、リンカはまだ精神年齢が低く、アシトは……無表情でよく分からない。

「ほれ、卵を産むのに必要な相手」

「リンカにはまだ早いっ！」「」

キアラとナンナが声を揃えた。

「大体人間は卵を産まんっ」

「……リンカの子を抱いてみたいとは思わんか、キアラ」

のったりとゼンダは言つてのける。キアラの威圧もなんのその。

さすが里を治めるセミ族の長だけのことはある。

「う」

ちよつと詰まったキアラだ。長となったときからキアラもナンナも卵を産むことはできなくなったので、彼女たちは自分の子供を抱くことが出来ない。

「リンカの子ならかわいいじゃろうなあ……人間の子供は小さいじやろ？わしらと違って大きいまま卵から孵るわけではないと聞いたぞ」

「ゼンダ」

ナンナはにこやかに微笑んでいる。

「それ、いいわね……素敵。うふふ、リンカの赤ちゃん……小さいリンカがいつぱい……可愛いわ」

「おい、ナンナ……」

あつという間に洗脳されたらしい親友に、キアラは半眼になる。

「リンカはまだ子供だぞ……」

「人間の子供なぞすぐ大きくなるぞ」

ゼンダは言いながらリンカを見る。実際この五年でリンカは大きくなった。成長しない虫族から見れば、すさまじい速度で大人になるうとしていようにも見える。

心はまだまだ幼いが、それは周りが甘やかしているせいもあるだろう。特にトンボ族とチョウ族の長ふたりが筆頭で甘やかしているのだから。

「リンカの子供……うふふ」

チョウ族の姫長は陶醉中。アシト似の子供という想像はしていないらしい。キアラは頭を抱えてしまい、ゼンダはアシトをリンカのムコとして迎える気満々である。

「ねえ、何の話??」

それ以前に本人たちを置き去りにしてする話ではない。リンカは不思議そうだが、アシトは相変わらず無表情で座っている。

「いやいや、こちらの話だ。気にせんでいい。とりあえず人間よ、滞在を許そう。歓迎するぞ」

一度この里を訪れたものを、虫族たちが突き放すことはない。なによりも彼らは優しいのだ。繋いだ絆を離したりはしない。

「それでだな、訊きたいのだが、ぬし、故郷に家族はおるのか」

「……いない」

アシトは簡潔に答える。彼には身内はいないのだ。それを聞いてゼンダは満足そうに頷いた。

「では、この里にずっとおるつもりはないか？ 可愛いヨメができるぞ。リンカはこの里でただひとりの人間じゃからの」

「……」

少年は横に座っている少女に視線を向けた。虫族の住むこの里でただ一人の、人間。

とても幸せそうに笑う彼女。

何故笑えるのだろうか。アシトはそう思った。ここは彼女のいるべき場所ではないはずだ。

彼女はヒトだ。

人間だ。

虫族では、ない。

無言でリンカを見つめる少年に、ゼンダは脈アリと見たのか笑み

楳火の謡（ほたびのうた）

を浮かべる。

「ま、よく考えておくれ。その気がないのならばいずれ人里近くまで送らう。それまではゆるりと過すがよい」

式・覆い包むような絶望の始まり・2

新しい仲間、アシトが『虫の里』へ来てから二週間が過ぎた。アシトは口数が少なく、表情もほとんど浮かべない上に、なかなかほかの虫族たちと接触を持つとはしなかった。

例外は人間のリンカだけである。少女とだけはわずかに会話らしきものを交わすことがあった。

とりあえず彼に与えられた住居は、リンカとキアラが住む巣穴の近くで、リンカは不慣れだろうアシトの世話をよく焼いた。あまり上手ではない料理を作り、持って行ったり、ナンナと一緒に掃除をしに行ったりと、自分にキアラたちがしてくれて嬉しかったことをそのままにアシトにしてあげているようだった。

彼と手を繋いで歩くリンカを、虫族たちはほほえましい瞳で見守った。実はゼンダの『リンカの婿取り大作戦』が即座に里中に広がっていたせいなのだが。

どこへ行ってもアシトはリンカのムコとして扱われていたのだが、当の本人たち、特にリンカのほうは無自覚で、嬉しそうにアシトと歩いている様子から予想すると、彼女は友達としか思っていないようだ。

アシトのほうは、感情の動きが薄いのでよく分からない。

結構な美少年なのは間違いないのだが、リンカと同じく自覚はしていないようだった。

この分では、彼女と彼が恋仲になるまではかなりの時間がかかるかもしれない、と、里の皆は苦笑していた。

それならそれでかまわない。どれだけ時間がかかっても、リンカとアシトが幸せになるのなら、優しい虫族の皆が幸せを感じるだろうから。

ここは『虫の里』。とても優しい虫族たちが住むところ。

しばらく雨が続いた。

その日も雨が降っていて、リンカはつまらなさそうな表情だ。雨が降ったら、里の皆は巣穴の中から出てこないから。

羽が濡れてしまうので、ほとんどの虫族は巣穴から出ないです。いくら里最強の戦士でも、羽根を持つ以上、キアラもやはり外には出られない。

ここ数日、キアラともナンナとも一緒に出かけられなくて、リンカはちよつと機嫌が悪い。

「つまらないよー」

ふてくされて彼女は足をぶらぶらさせている。雨が降っても八チ族の作った住居は寒くないし、湿気もしない優れたものだが、退屈を和らげるものはキアラの家にはあまりない。もともと戦士の長なので、飾りや遊び道具よりも体の鍛錬になるようなもののほうが家中には多いのだ。

「ロゼッタのところにも行っておいで」

キアラは苦笑してそう進めた。装飾品作りの八チ族のところなら、ヒマもつぶせるだろう。

「そうしようかな。あ、アシトも誘ってあげよう。まだロゼッタのところでは飾り作ったことないんだ」

リンカは座っていた椅子から飛び降りて、出入り口に向かった。かかっていた御簾をめくり、外に生えている大きなフキの葉っぱを取る。

「行ってきます」

「ああ、行ってらっしゃい」

キアラに見送られ、フキのはっぱを傘代わりに、リンカはすぐそこのアシトが住居にしている巣穴に向かった。きつと彼も退屈しているだろう。

ぱらぱらぱちぱち。雨の落ちる音がする。フキの葉っぱも雨が降っているときは楽器のようだ。ナンナならこの音を聞いて唄を作るかもしれない。

装飾品を作つたら、きつと退屈しているだろうナンナに上げようと決め、リンカは御簾をめくって声をかけた。

「アシトー、遊ぼう。あのね、ロゼツタっていうハチ族のところ、腕輪とかいろいろ作って」

中を覗いて、リンカは首をかしげた。

アシトの姿は、ない。

「あれ、どこか出かけちゃったかな。誘ってくれればいいのに」

少年は里のどこかへ出かけてしまっているようだ。一人で出かけることなど今までほとんどなかったというのに珍しい。それとも、里に慣れてきたということだろうか。

それなら嬉しいなと、リンカは一人でにつこりした。大好きな『虫の里』をアシトも好きになってくれたら嬉しい。

「まあ、いいや。今度一緒に行けばいいよね」

呟いて彼女はアシトの家を後にした。ときどき水溜りの中に入つて雨水を蹴つたりして遊びながら、目的のロゼツタがいる巣穴に向かう。

「ロゼツター、こんにちは」

「あら、リンカ。こんにちは。いらっしやい」

入ってきたリンカを、警戒もせずにこやかに出迎えてくれたのは、優しそうなハチ族の女性だった。

「ヒマなのー。キアラに何か作って遊んでおいでって言われて」

「あらあら、そうよね、ずっと雨だものねえ」

フキの葉っぱを出入り口の外に立てかけて、リンカは中に入った。中にはたくさんさんの虫族がいる。装飾品を作りに来て雨にあつて自分の住居に戻れなくなったのだろう。こういう普段から虫族がたくさん集まるような巣穴には食料が豊富に置かれているので、たくさんさんの虫族が数日いても別段困ることはない。

「リンカはいいよなあ、雨でも外に出られるもんね」

「えへへー。でもヒマなの。キアラもナンナも皆も出られないですよ。雨の日はやっぱりつまらないよ」

「そっかあ、そうだね」

クワガタ族の少年と会話を交わし、リンカは装飾品を作っている虫族たちを覗き込む。彼らも他にやることがないので、暇つぶしにいろんなものを作っていた。

腕 輪やら足環やら指輪やら……いろいろである。上手なものもいれば下手なものもいるが、それを話にしてまた笑いあっている。平和な光景だ。

自分まで嬉しくなってきた、リンカも微笑んでいた。

が、とある一箇所を目にした瞬間、その笑みがひきつった。

視線の先にいるのは、天敵。

そのまま反転しようとするリンカに、

「あら、珍しいものを見ましたわ」

声をかけてきた八手族の少女。

「お二人と一緒にいないあなたなんて、里に来てから初めてではなくて？ ようやくご迷惑だと気がついたのかしら。ずいぶんと遅いこと」

チニユである。彼女もここで耳飾りを作っていたらしい。細い手には可愛らしい花の形の耳飾りがある。

「迷惑じゃないもん。雨だからヒマを潰しに来ただけ！ 作ったらナンナのところに行くもん！」

「まあ！ それこそご迷惑に決まっていますわ！！」

「うるさいなあ、いいの！ 何日も雨降っててナンナも絶対退屈してるから」

チニユはうっと言葉に詰まった。確かに雨が続いていて、彼女も退屈している。できれば早く晴れてほしかった。晴れた日の空を飛ば喜びは、何にも変えがたいくらいに気持ちがいいものだ。

それが出来ない状況が続いていて、確かにナンナも退屈しているだろう。チニユもナンナのところに行きたかったが、雨が降ってい

る以上、虫族であるチニユも出歩けない。

羽が濡れてしまえば乾くまでに時間がかかるし、下手をすると羽同士がくっついてしまつて後で大変なことになるからだ。癒し手の力が必要な事態になりかねない。

「……いけない、いけない。今ちよつと人間がうらやましいと思つてしまいましたわ……空も飛べないのに」

「キアラが連れてつてくれるもん」

リンカは勝ち誇つたように胸を張る。

「きい！ 自分で飛べないくせになんですの！ その重たい体をキアラ様に預けるなどと無礼ですわよ！！」

チニユは悔しそうだ。自分の羽があるのでキアラに抱えてもらうことなどありえない。心からリンカがうらやましいと思つてしまつて悔しいのだ。

「重くないもん！」

「重いですわよ！ だから人間は飛べないんですわ！！ 絶対そうです！！ 羽があつても千切れてしまつくらい重いですわ！！」

「軽いもん！ キアラは軽いつて言うもん！」

「キアラ様は最強の戦士だからですわ！！」

あー、また始まつた。心の中で思いながら、ほかの虫族たちが面白そうにいつものやりとりを見物している。雨で退屈な中での、リンカとチニユのじゃれあいには、確かに面白い退屈しのぎだろう。

本人たちは真剣にケンカしているつもりでも、周りには面白い。

ロゼツタが苦笑した。お互いに退屈していたリンカとチニユだ。

このロゲンカはかなり長く続くだろうと簡単に想像できる。

昼食はリンカの分も増やして作ったほうがよさそうだ。

外では雨が降り、世界を暗く包んでいる。

まるで目の前にいる少年の瞳のようだと、ナンナは思う。瞳の色は夕日の色なのに、そこに宿る光は濃く暗く、太陽を知らないとも言いたげだ。

光はすぐそこにあるというのに。

晴れることを知らない、雨の日のような瞳。

彼女の『妹』と触れ合うときだけ、少年の瞳は少し柔らかくなっていたように思う。

リンカが彼の灯火になれるのではないかと、思っていたけれど。

彼はそれを、待てなかったのだろう。

いや、待つだけの時間が、彼にはなかったのではないだろうか。

ナンナはふと、そう思った。

五年前の追い詰められていたリンカのように、彼の中には自身への愛情も執着も見受けられないからだ。時間を待つ余裕を知らないのだろう。

雨を避けようとせず、頭からずぶぬれの少年は、いつも背負っている剣を手にしていた。切っ先は、ナンナに向けられている。

静かに落ち着いた瞳でそれを見ながら、ナンナは悲しく微笑んだ。

「……ここは、あなたの救いにはならなかった？」

少年の瞳には何も映らない。彼女の言葉は彼の心の浅い場所を滑っている。

届かない。

それでも。

「……あなたは、慈しみを知らないのね。誰かを大切に思うことも……知らないのね」

ナンナは少年に語りかける。そこに怯えはなく、恐怖もない。今まさに向けられた剣が凶行に及ぼうとしてみても、彼女の心は凧いでいる。

「……抵抗も命乞いもしないのか」

ここに来て初めて少年、アシトが口を開いた。剣を向けられても、怯えるどころか静かにその瞬間を待っているかのようなナンナの態度が不思議なようだった。

「何故？ あなたはそれでは止まらないわ。わたくしの言葉では止まらないでしょう。ここに……そのために来たのではなくて？」

初めて出会ったとき、虫族のキアラとナンナに驚かなかったアシト。ならば答えはひとつだ。

彼は虫族のことを知っていた。知っていて、存在を分かっている、そうしてここへ来た。

何のために？

予測はたやすい。相手は人間。己にない力を欲する種族。

もしかしたら、リンカが存在が彼の心を暖かくしてくれるかもしれないかと思つて、今まで見守ってきたけれど。

彼はリンカではなく、ほかの何かを取ってしまった。

癒すひと時ではなくて、奪う瞬間を選んでしまった。

「……ひとつだけいい？ ほかにも来るのかしら。ならば遺言と思つて聞いてほしいわ」

少年は無言。

癒しのチヨウ族、その姫長は優しく微笑む。ほかの虫族が動けない雨の日に、命すら甦らせる力を持つ自分を、まず最初に排除しに来た少年を、穏やかに見つめて。

「……わたくしの妹……リンカは、逃がしてあげて」

可愛いリンカ。彼女の存在はナンナにとっても優しい時間をくれた。愛おしい時間をくれた。

楽しいひと時だったから。かけがえのない時間だったから。

彼女には、幸せな未来をあげたかった。

「約束は出来ない」

アシトは言い切った。

「それでも、お願いよ。あの子は人間だわ。あなたと同じ人間よ。

そしてわたくしとキアラの可愛い妹……生きてほしいわ」

リンカの名を聞いたとき、彼が持つ剣先が少しだけ揺れたから。

そのわずかな揺らぎを信じよう。

彼の心には、確かにリンカと過ごした日々が宿っている。

それがいつか彼の灯火になるように、祈ろう。

ナンナは穏やかな気持ちで目を閉じた。

楯火の謡（ほたびのうた）

命を奪う灼熱の感触が彼女の腹を貫き、流れ出る体液に失われる
力を感じ取っても、ナンナの表情は変わらなかった。

恨むことなく憎むことなく、静かな心のまま、彼女は……息絶え
た。

楳火の謡（ほたびのうた）

弐・覆い包むような絶望の始まり・2（後書き）

彼女の死が、始まりを告げます。

式・覆い包むような絶望の始まり・3

ぎゃあぎゃあぎゃあぎゃあ。尽きることなくリンカとチニユのケンカは続く。

「……飽きないねえ……」

のんびり花茶をすすっているチヨウ族の男が呟く。

「そろそろお昼だよー、二人とも」

カプト族の青年が苦笑して声をかけた。

「ほらほら、ご飯作ったからそろそろ一休みしなさい」

笑いながらロゼッタが止めたそのときだ。

チニユの背から、羽がぼろりと落ちた。

「……」

その場にいた誰もが絶句した。リンカも言葉を失ってチニユの落ちた羽を見る。

八手族の羽。虫族の羽が落ちることなど、怪我以外にはたった一つの例外を除いてありえない。

例外はただひとつ。誰もが望んでいない事柄のみ。

「？ なんですの？」

リンカが言葉を失って自分の後ろの地面を見ていることをいぶかしみ、チニユも振り返って絶句した。落ちている彼女の羽。痛みも何もなかったことはチニユの表情から分かる。怪我ではないのだから痛みがあるわけがない。

「……こ、れ、は……」

それが意味すること。

声もない無音の空間に、光が満ちる。

「うそ……！」

チニユの背に現れた光を目にして、リンカは信じられずに呻く。

光は形を成していく。

「いや……！」

理解したチニユの表情が絶望に変わる。

信じたくないのに体に宿る力が理解を強いる。

光が消えて、チニユに全てが受け継がれた。

強烈な、癒しの力と、チヨウの羽。

黒地に黄色の、アゲハの羽。

チニユはへたり込んだ。彼女の手から耳飾りが転げ落ちる。大好きな尊敬しているヒトに送るつもりだった、花の飾り。

彼女を見下ろしてリンカは信じられなくて頬を覆う。

「うそ、だよな？」

脳裏に宿るのは、大好きな『姉』の笑顔。

リンカの声に微笑むチヨウの羽持つ彼女。

チニユは彼女の後継と決められていた。彼女自身がそう決めていた事柄で、里の誰もが知っている事柄だ。

だが、彼女は健康で、病などに倒れてはおらず、里の中で獣に襲われることもないはずだ。

雨が降り、里から出られない状況で、不慮の事故などありえない。

何故今この瞬間に、力の継承が起きたのだ！？

「間違いだよ……」

へたりこんだチニユの背には、間違いなくチヨウ族の羽がある。

彼女の力を継いだ印。

それが意味する、こと。

「ナンナアツ！！」

リンカは叫んで叩きつけるように降る雨の中を飛び出した。

どうして、どうして、どうして。

心の中で叫びながら走る。

昔、羽がほしいとキアラとナンナを困らせた。そのときキアラが説明してくれたこと。

人間が虫族の羽を得る方法。

それは彼らの長、その力の後継になること。

長だけが持つ強力な力を継承するときに、羽も一緒に継ぐことになる。だからキアラは八手族の体でありながらトンボ族の羽を持つのだ。

もともと八手族だった彼女は、前のトンボ族の長が死すときに、後継に指名され、力を継いだ。あの羽が、その証。

長の力は継がれていくもの。誰かが継いでいくもの。それゆえにいつも長は各種でひとりだけ。

「ナンナ、ナンナっ、ナンナあっ……」

強力な力であるがゆえに、いつも長は各種に一人だけ。それが虫族の理。

覆されることはなく、たとえそれが死者を蘇らせることができるチヨウ族の長の力でも、覆せない事柄。

継がれた力は元の場所には戻らない。

意味すべきこと。

「やだよ、ナンナ……っ!!」

リンカの大好きな『姉』、その一人が、二度と覚めない眠りについたらということ。

彼女の住居に飛び込んだ。

立っている人影に一瞬ホツとする。彼女かと思ったからだ。

けれど立っている人影には羽はない。

倒れている人影に、リンカは目を疑う。

動かない、大好きなヒト。

立っているのは自分が連れてきた少年で、その手には体液に濡れている剣があり。

「あ、しと……?」

何をしたの。問いかけたいが言葉が出てこない。

瞳を向ける。どうしたの。言葉が出てこない。

綺麗なナンナ。倒れている彼女の漆黒の髪が広がって、地面に夜が渦を巻いているかのようにだった。

大好きなナンナ。雨で退屈していたはずだ。だからと言って地面で寝たら病気の神様に取り憑かれる。

彼女の状態を、リンカは分かっているのに認めない。

「ナンナ」

近寄って、膝について、華奢な体に触れる。

「ねえ、起きてよ。こんなところに寝てたら、病気の神様が来ちゃうよ……」

倒れている彼女を包んでいるのは病気ではなく、死の眠りだと、気が付いているのにリンカは認めない。

「ナンナってば……！」

いくら呼んでも、彼女が目を開けることはない。リンカの頬を伝うのは雨ではない雫だ。

触れた体は動かない。二度と動くことはない。

彼女の唄を聞ける機会はもう訪れない。

「やだあつ！！ ナンナ、ナンナつ、ナンナアツ！！！」

声を上げてリンカは絶叫した。彼女の体を揺する。力のない体はゆさゆさと揺れるだけ。

綺麗な羽も、揺れるだけ。

もう、理解するしかない。

ナンナは、死んだのだ。

リンカは一度、喉が引きつるのを感じた。悲しみが喉に詰まり、痛みが瞳から溢れる。

「わあああああああああつ！！！」

悲痛な叫びに、傍らに立つ少年はポツリと呟く。

「何故、泣く？」

ナンナの遺体に取りすがって泣くリンカが、理解できないと言うように。

彼女は人間だ。虫族ではない。虫族のために泣くことなどないだろつ。

分からない。

「お前は人間だろう。虫じゃない」

リンカがアシトを見上げる。瞳には憎しみよりも悲しみが強い。ナンナを殺したのはアシトだと彼女も理解しているだろう。ナンナの体液で濡れた剣を見て、思わないほうがおかしい。

「何故、虫のために泣く？」

「ナンナだよ」

しゃくりあげながらリンカは言う。自分の大切な『姉』。

「虫じゃない。ナンナだよ……アシト」

「虫だ。人間にない力を持つ、虫。人間じゃない。虫に名など必要ない」

ひゅんつとアシトは軽々剣を振った。ナンナの体液を振り払う。

「虫のために泣く必要もないだろう」

「ナンナだよ！！」

リンカは立ち上がった。泣きながら、もう動かない『姉』の命を奪った剣を見る。

それを持つのはアシト。自分が連れてきた少年。

「何でナンナを。どうしてナンナを。ナンナが悪いことしたの……？」

「力を持っている」

アシトはこともなげに言い切った。

「人間にない力だ。それを欲しがっている人間がいる。おれは力を手に入れるためにここに来た。殺せば手に入ると聞いてきたんだが」
アシトは自分の体を見下ろした。変化はない。見ただけではなく、内面にも変化はない。

「……どうすればいいのか知っているか？」

彼はリンカを見た。剣を向けてはいない。人間の彼女を害するつもりはないからだ。彼女が知らないというならば、ほかの虫族にでも剣を突きつけて訊くだけだ。

「知ってるよ」

リンカは顔をぬぐって答えた。ぬぐっても涙は止まらなかったけれど。

「でも、おしえない」

どうしたらいいんだろう。自分が連れてきた少年が、自分の大好きなヒトを殺してしまった。どうしたらいいんだろう。

許せないよりも、ただ、悲しい。もう動かない彼女が、彼女をただの虫と言いつ切る少年が。

「アシトには、おしえない」

命の価値を、知らない少年。

「おしえられないよ」

だってあなたは失われる痛みを知らない。二度と戻らないという意味を知らない。

「かわいそうだね、アシト……」

リンカは知っている。失われる痛みを、奪う苦しみを、失くす悲しみを、許す痛みを、受け入れる優しさを、その強さを、人間ではなくて虫族たちに教わった。

「？ おれが、かわいそう？」

アシトは不思議そうだった。ナンナを殺しておいても、リンカには危害を加えるつもりがないのか、剣は向けられない。

人間は殺さないのに、虫族は殺す少年。命に違いなどあるのか。では、彼がそう判断する基準は？

「力があるからナンナを殺したの？」

力が欲しいから殺したと、彼は言った。力が欲しいという人間がいるからと。

そんな人間も居るのか。あれだけ力を持っているリンカを迫害しておいて、それでもまだ欲しいという人間もいるのか。

「じゃあ、アシトはわたしも殺すんだね」

嗚呼、なんて愚かなんだろう。涙で潤む視界にリンカは思う。こんなに優しい虫族を、殺してしまう人間は、なんて悲しい生き物な

のだろう。

「？ 何を言って……お前は人間だろう」

「人間だよ。わたしは人間。でも、人間のところには居られない人間」

リンカの周りに紫色の光が集うのを、アシトは見た。

何が起きようとしているのか。彼の直感は逃げると言っている。かまわず振り返らずこの場を飛び出して避けろと。

けれど、泣いているリンカから目が離せない。ナンナを殺して力を手に入れたら、ほかの力も手に入れるためにさっさとこの場から去るつもりだった。でも、リンカが駆け込んできて、ナンナの遺体に泣きつくのを見たとき、体が動かなくなった。

理解できずに戸惑った。どうして彼女は虫のために泣くのか。どうして彼女は、自分のことをかわいそうだと、言ったのか。

リンカの手の中に紫色の雷が集まり、球になった。

「これが、わたしの力」

ゆつくりと、彼女はそれをアシトのほうに押し出した。逃げることは出来た。その球はととてもゆつくりと進んでいたから。

避けてリンカに斬りつけることもできた。

「ねえ、アシト。わたしも殺すんでしょ？ 力があるから殺すのなら、わたしも殺すんだよね……？」

ナンナを殺したときのようにな。

眩く彼女の視線は何よりも悲しい。

アシトは動けなかった。

何故そんな顔をする？ 憎しみでなく恨みでもなく、悲しみだけを向けてくるのだろう？

嘆きながらも憎まないなどと、そんなことが出来るのか？

彼女の足元に倒れているもう動かないチヨウの女も、穏やかな表

情で死んでいった。

憎まないのは、何故だ!?

リンカの雷が、アシトの全身を包んだ。

「ッ!」

声にならない声を上げて少年は倒れ付す。体がしびれて動かない。避けることは出来た。

なのに、どうして避けようと思わなかったのだろうか。

彼女に殺されるのだろうか。

それでは自分の役目は果たせない。命よりも役目を遵守するべきなのに。

何故、自分は彼女に殺されようとしているのだろうか?

動かない体でリンカを見上げた。彼女には殺意も殺気もない。敵意すら、感じられなかった。それでももう一度あの力を食らったらアシトは死ぬだろう。

リンカは泣きながら首を振った。そのまま外へ出て行く。

アシトは逃げなかった。リンカの力から逃げようとしなかった。

リンカを殺そうともしなかった。彼女にも、力はあるのに。

「ナンナ……」

リンカがアシトを殺して仇をとっても、きっとナンナは喜ばない。

「分かんないよ……」

呟いてリンカは空を見上げた。どうしたらいいのだろうか?許すのは辛い。でもナンナは微笑んでいた。穏やかな表情で倒れていた。

悲しくて辛い。痛くて痛くて、苦しい。

リンカは全身で力を練り上げた。いつもならここまでではやらない。自然に生きているのならば、天候を変える必要はないからだ。

でも、今は皆にここに来てもらわなければならぬから。

少女の力は天空を射抜く。紫色の光が、次々と雨雲を切り裂き霧散させた。

楳火の謡（ほたびのうた）

長い雨が、止む……。
差してきた日の光は暖かいのに、
悲しみは消えない……。

式・覆い包むような絶望の始まり・4

リンカの力を感じ取ってキアラはすぐに飛んできた。キアラだけではない。普段無理矢理天候を変えたりしないリンカが放った強力な力を感じて、里の皆が何かあったのかと心配して駆けつけた。

理由を知っているのはロゼッタのところにはいた虫族だけだったのだ。

「リンカ」

泣きながら立ちすくんでいる彼女に、キアラが心配そうに近付く。一瞬、幼い頃のように力を暴走させたのだろうかとも思ったが、彼女の様子からそうではないと判断した。

「どうした？ 何かあった」

びしょ濡れの『妹』は、泣いている。悲しくて仕方がないというように。

「キアラ様」

泣き出しそうな表情でチニユが前に出た。彼女の背にある羽根を見て、キアラは理解する。

ナンナが死んだのだ。

長であるキアラにその予測は簡単だった。

だが、何故親友が急に命を失ったかまでは分からない。

駆けつけたゼンダにリンカを任せ、キアラはナンナの住居に入っていた。倒れている二つの人影を目にして、瞳を細める。

親友の命が失われているのはチニユの背を見たときに理解した。

その死因を、室内を見た瞬間に理解した。

倒れているのはアシトと、キアラの親友。

少年は瞳だけ動かしてこちらを見上げてきた。リンカの力を食らって体が動かないようだ。

キアラはかまわず親友の体に触れ、抱き起こした。

彼女の腹部には大きな傷跡がある。少年が持っている剣によるも

のだと、すぐに分かった。

親友は、この少年に殺された。

それでもキアラの中に怒りは湧いてこない。憎しみも恨みも湧いてこない。

ナンナはとても安らかな表情で息絶えているからだ。

「……許したんだな、ナンナ……」

今にも泣き出しそうに、キアラは微笑む。ならば自分たちがこの少年を憎む理由がない。

恨む理由がない……。

彼女が静かに死んでいったことを、彼女の死に顔が語っている。

「許し、た……？」

アシトが呻く。声はかすれていて、苦々しく、理解できないと言っていた。

「何故、だ……殺した、のは、おれなのに……！」

分からない、そう訴える少年に、キアラは呟くように言う。

「哀れだな、アシト」

悲しげに、少年は哀れだとキアラは言う。

「お前は憎しみしか知らないのか。恨みしか知らないのか……哀れだな」

リンカは彼を殺さなかった。泣きじゃくっていた『妹』は、ナンナの遺志を感じ取っているのだろう。

ナンナはアシトを恨んでいない。きっと彼の幸せすら願って死んでいった。

「お前も、おれを哀れと、言うのか……」

アシトの呟きを聞いて、キアラは悲しく笑った。リンカにも同じことを言われたのだろう。それも少年は理解できていないようだったが。

同じ人間のはずなのに、リンカとアシトは考え方や感じ方がかなり違うようだ。

「分からないのならば考えてみる。お前はナンナを殺したが、里の

ものは誰もお前を責めないだろう。ナンナはお前を許して死んだ。許された意味を、考えてみる」

「虫の、くせに……」

「……哀れだな、アシト……」

キアラは心底から言った。

「お前はここで、何を見ていたのだ？」

「……」

少年は黙り込んだ。

優しい優しい虫族たちが住まう場所。誰も拒絶しない『虫の里』で、この少年は皆を拒絶していた。かたくなに、混ざろうとはしなかった。

確かな癒される空間を、自分から拒んでいた。例外はリンカだけだった。同じ人間の少女だけは受け入れているように見えたから、遠からず里の皆とも打ち解けるだろうと思っていた。いつか彼も癒されるだろうと。

「殺せ……」

動けない少年は言う。キアラは首を振った。

「いいや。殺さない。私にはナンナが許したお前を殺す理由がない。怒りも憎しみも、ナンナの顔を見た瞬間に溶けて消えた。穏やかな死に顔の親友は、誰よりも心優しくかったから、復讐など望まないだろうとたやすく言える。」

「死にたいのか？ 考えたくないからか。理解したくないからか。許されたく、ないからか？」

まるで断罪を求めるかのようなアシトの瞳だったから、キアラは少年に告げる。

「アシト。ここは、誰かを裁く場所ではないよ」

『虫の里』。優しい虫族の住むところで、どうしようも出来ない罪を犯した少年は、愕然と言葉を失った。ここまでの罪すらも、彼らは許してしまうのか。

キアラが言ったとおり、里のものは誰一人としてアシトを責めなかった。アシトを連れてきたリンカを責めることもなかった。

ナンナの穏やかな死に顔が、彼らにとっては全てだったからだ。

彼女の遺体は、彼女が好きだったラクランド山の花畑に葬られた。涙を流しながらチニユが謳う。

もう戻らない彼女へ、心からの想いをこめて。

【 死んでなど欲しくなかったけれど、

貴女が何一つ後悔しないで逝ったのならば、

我らは誇って貴女を送ろう。

優しき貴女よ、愛しき貴女よ、

忘れない、忘れない、忘れない。

貴女が居たことを、

貴女が愛したことを、

貴女が愛されていたことを。

忘れない、大切な貴女を。

土に還り、緑に還り、その唄声をいつまでも、

忘れることはないだろう 】【

葬儀が終わり、皆が悲しみながら花畑を後にしても、リンカとキアラはその場に残った。

「ナンナ、戻ってこないの？」

泣き腫らした瞳で、リンカはキアラを見上げた。

「ああ」

キアラは頷く。悲しげに微笑み、『妹』の頭を撫でてやりながら。

「チニユ、生き返りの力継いだんだよね。チニユ、生き返らせる」と、できるんだよね」

知っているのに、それでもリンカはキアラに訊いた。

「ナンナ、生き返らないの……？」

「ああ。生き返らない……」

継がれてしまった力は戻らない。それは長の命が戻らないことを示している。

ナンナはチヨウ族の長だった。彼女の力はチニユに継がれてしまった。

だからナンナは生き返らない。チニユが全身全霊の力を振り絞っても、生き返ることはない。ほかの虫族ならば生き返る。でも、長である彼女は戻らない。

「ナンナ、もういないの……？」

「ここにいるよ」

キアラは自分の胸を指した。それからリンカの胸を指す。

「私たちの思い出の中に、ナンナはいる。リンカ、いつまでも泣いていたら胸の中のナンナが心配するぞ」

キアラは微笑んでいる。心優しい親友ならばいつまでも泣くリンカをとて心配するだろう。なによりも『妹』の幸せを、笑顔を望んでいた彼女だから。

「うん……」

リンカは頷いた。悲しみはまだ色濃く心にあるけれど、せめてナンナが心配しないように、いつまでも泣くのはやめようと思った。

辛いのは皆一緒だ。親友を亡くしたキアラだつてとても辛いだろう。

「ごめんね、キアラ」

「何故謝る？ リンカが謝るようなことはないだろう」

「でも、アシト連れてきたの、わたしだよ」

少年は今、拘束されもせず、里にいる。剣を奪われることもなかった。彼は虫族たちの力を欲しているという。その方法が分かるまではむやみやたらと虫族を殺すような真似はしないだろう。一応力ブト族とクワガタ族の戦士が二人ずつ、彼の監視には付いている。

「リンカのせいじゃない。アシトにも何か事情があるのだろうとは思うが」

キアラはナンナの言葉を思い出す。自分たちと出会った時に驚かなかった少年。

頑ななまでに虫族を拒んでいた少年。

「……わたし、アシトに訊いてみる。なんでこんなことしたのか、どうして力なんか欲しいのか」

リンカは眉を寄せている。彼女には少年が力を求める理由が理解できない。

力などないほうが幸せに生きられるだろうに。

生まれながらに力を持ち、ヒトの里から追放されてしまった彼女には、アシトが力を求める理由が分からない。

力。持つヒトを殺してまで、欲しいものなのか。

「ナンナ」

彼女が埋葬された場所に、リンカは膝をつく。虫族の墓には墓碑はない。自然に土に還るのを待つ。数年もすれば彼女は自然に還り、ここに咲く花となるだろう。

花の中で座る彼女を思う。謳う彼女が大好きだった。心に残る、あの光景を忘れたくない。

「ねえ、死んでほしくなかったよ？ いつまでも一緒にいたかったよ？ ずっと、いてくれると思ってたよ……？」

人間の自分より、彼女のほうが長生きすると知っていた。こんな別れが来るとは考えてもいなかった。夢にも思っ、いなかった……。

「大好きだよ、ナンナ。もうひとりのわたしのお姉ちゃん……」

一滴だけ 透明な悲しみの雫が地面にこぼれた。

式・覆い包むような絶望の始まり・5

里に戻るなりリンカはアシトの住居を訪れた。外に二人、見張りが立っている。あとの二人は中のはずだ。

「こんにちは。ライダー、シーナレーダ」

「こんにちは、リンカ。大丈夫かい？まだ目が赤いよ」

カプト族の戦士は心配そうに彼女に声をかけてきた。ナンナが彼女を可愛がっていたのは、里の誰もが知っていることで、アシトを連れてきたことでリンカが苦しんでいるだろうことも皆が理解していた。もう一人のカプト族の女性が言う。

「無理しないで、辛くなったら休むのよ」

「うん、ありがとう」

優しい虫族。優しい空気。まだアシトはこの里を拒絶しているのだろうか。

「アシト」

声をかけて御簾を上げる。

返事はなかったが、リンカは中に入っていった。

クワガタ族の見張り二人は居心地が悪そうに椅子に座っていた。

少年は彼らを見無視して寝台に腰掛けている。見張り二人は少女にホツとしたように声をかけてくる。

「あ、リンカ。こんにちは」

「こんにちは。アブロ、ハッタ」

「や、良く来てくれたよ……この子、全然喋らなくてさ……すごく居心地が悪いんだ」

虫族に話すことなどないとも言つような態度のようだ。全身で拒絶しているアシトは、リンカが入ってくるとピクリとした。

彼女には視線を向ける。

「こんにちは、アシト」

声をかけると、少年はうつむいた。どう返したらいいのか分から

ないという印象だ。

リンカは彼の隣に座って、彼の顔を覗き込む。

彼は一瞬うるたえて、リンカから目を逸らした。

「……今日ね。ナンナの葬儀だったんだよ」

少年の体がピクリとする。彼はまだ顔を上げない。

「あのね、ラクランド山のお花畑に、ナンナは眠ったんだ。あそこ、ナンナの好きな場所だから」

アシトと出会ったのもラクランド山だった。出会わなければ、彼女は殺されなかったのだろうか。

「ねえ、アシト。どうして力が欲しいの？」

険しい山を登ってきてまで、彼が力を欲した理由は？

「力を欲しがってる人間がいるって言ったよね？ それは誰？ どうして欲しがっているの？ そのヒトは大切なヒトが死んじゃったの？ だからナンナの生き返りの力が欲しかったの？ なら、そう頼めばナンナは叶えてくれたよ？ 優しいナンナは、きっと生き返らせてくれたよ」

「……別に、そういうわけじゃない」

ぼつりと、アシトは答えた。相変わらずリンカのほうを見ようと
はしなかったが。

「生き返りの力じゃなく、ほかのものでも良かった。ただ、手当たり次第に回復されると厄介だったから、チョウウから殺したただけだ」

どの力でも良かったと、彼は言う。ちりちりとどこかが痛むような感覚が彼にはある。

それはリンカの顔を見ていると強くなった。だからつい、アシトは話してしまう。

口にははいけないことだと、分かっているのに。

その痛みが何なのか分からないまま、彼女には口を開いてしまう。「……誰が欲しがっているの？ どうして、欲しがっているの？」

悲しげに彼女は瞳を揺らすから、その瞳を見たくなくて顔を逸ら

しているのに、声があまりにも辛そうで、かえってアシトの痛みは強くなる。

「……おれに、与えられた役目だ。それ以上は知らない」

理由など、知る必要は今までなかった。知っておけば良かったなどと思つたことも今までなかった。答えられないことが辛いなどと感じたこともなかった。

「誰がアシトに頼んだの？」

「……」

アシトは顔をゆがめた。答えたくなかった。彼女に答えてしまえば、どんな反応が返ってくるか分からない。

それが、怖い。

何故恐いなどと思うのか。不要な感情は全て切り捨てたはずなのに。

「ねえ、アシト。アシトに頼んだのはどんなヒトなの？」

「……答えられない」

呟くようにそう返す。訊かないで欲しいと祈るように思つてしまふのは何故なのか。

「おしえてくれないの？」

「……答えられない」

「……そう」

リンカは息をつき少年の頭を撫でた。

「……？」

さすがに仰天するアシトである。何をするのかと目を丸くしてリンカを見る。

「あのね、キアラもよくこうしてくれるよ。わたしが悲しいときとか嬉しいときもしてくれる。わたし、いつもそれで元気になるよ。

元気になるように、アシトにもしてあげる」

「べ、別におれには必要ない……！」

「だってアシト元気ないもん」

リンカのほうこそ赤い目をしているというのに、彼女は少年を元

気付けようと頭を撫でる。

彼女はとても簡単にアシトの心をこじ開けてくる。入り込んでく

それが彼には痛みのように感じてたまらない。知らなかった感情が、流れ込んでくるような気がする。

拒みたい。彼女の手を振り払えばいいだけのことなのに、本人の意思と違ってアシトの手は動いてくれない。

「言えないことなんだね。たくさん辛いことなんだね」

リンカは悲しそうにアシトの頭を撫でている。

「キアラが言ってた。アシトにも事情があるんじゃないかって。きつと……アシトにとつていつぱい痛いことなんだね」

「……そんなことはない」

彼女の手の柔らかさとぬくもりを感じながら、アシトは答える。

いたたまれない気持ちがする。このままここに居てはいけないう思っている。

振り払え 救われてしまう前に！

「アシトも、痛かったんだね。わたしみたいに」

「……？ お前、みたいにな？」

リンカは悲しげに言う。

「力なんてあつても人間の里ではいいことないよ。わたし、小さいころ人間の里に居たの。力があつたから追い出されたよ。皆が恐がってた。わたし、生まれちゃいけないヒトだったの。人間の里に居られない人間だって……言ったよね？」

人間の里での出来事は、彼女にとつて苦痛でしかなかった。聞いたアシトは眉を寄せている。人間のリンカが、『虫の里』にいる理由。

「ねえ、力なんかないほうがいいよ。なくてもここで皆と暮らせばいいんだもん。わたしはここで幸せだよ？ キアラとナンナが連れてきてくれて、皆と会えて、わたし、幸せなの。アシトだって幸せになれるよ」

「……幸せ……」

呟いて彼は首を振った。そんなもの自分にはありえない。あつてはいけない。そう思う。

「この空気は優しすぎる。そこにいる彼女も、自分には優しすぎる……！」

「ねえ、アシト。アシトだって幸せになっただよ……？」
少年は言葉もなく、首を横に振ることしか出来ない……。

その夜、リンカが眠ってからキアラはアシトの住居を訪れた。『妹』から、彼の話は聞いている。そして、ナンナが生きていたころ、親友と予想していた事柄を確かめるために、少年の元を訪れた。

「アシト」

少年は寝台に腰掛けたまま、キアラには視線を向けようともしない。眠っているわけではないのは分かっている。かまわない。少しでも反応があればそれでいい。

「この里を捜していたのはお前だけか？　ほかにもいるのか？」
少年はうつむいたままだ。

「……お前を逃がせばほかも来るくらいは予測が付く。力を欲しているのは、どうせ人間の軍隊やその上の人間だろう。お前はその兵隊だというくらいの予想はしていたよ」

虫族のことを知っている人間はまずいない。山の中でたまたま彼らに救われて、そのあと人里に戻った人間が、『虫の里』のことを話でもしたか……無理矢理訊き出されたのか。

あるいは何か文献にでも残したのかもしれない。それを頼りに『虫の里』の力を求めているのかもしれない。

「……アシト、お前をここから出すことは出来ない。私は里が襲われることを防ぐ立場だからな」

キアラはため息をつくように続ける。

「……ここは、お前にとって苦痛か？　里の者は、リンカは、お前に何も与えてくれないか。何かを得ることがそれほどまでに恐ろし

いか？」

少年の態度は「ここから今すぐにも逃げ出したいというようにも見える。」

「……ゆっくり考える。時間はある」

キアラの声に、アシトはようやく顔を上げた。瞳は昏い。

「……時間があると思っっているのか」

少年はどうしていいのか分からない。これも口にしていい事柄ではないのに、何故話しているのだろう。

「おれが戻らないことを、いつまでも待つと思っっているのか」

こんなことを言ってしまえば警戒するだろう。それでは自分の役目と相反するではないか。

「……そうか」

キアラは頷き、アシトに微笑みかけた。

「遠からず攻めてくる可能性があるのだな……教えてくれてありがとう。警戒する必要があるか……」

何故礼を言う。アシトには分からない。自分は彼女の敵だ。虫族の敵だ。

「アシト」

虫族の女は構わず語りかけてくる。

「もし、人間が攻めてきて、里が陥落するようならば、お前に頼みたい」

万が一のことを考えて、親友を殺した少年に、里一番の戦士は言う。

「リンカは、逃がしてやってくれ」

この手で殺した虫族の女と、彼女は同じことを言う。

「……何故だ」

アシトは呟いた。穏やかな表情で死んでいったあのチヨウの女。彼女も同じことを自分に頼んで死んでいった。敵に大切な『妹』のことを頼むなんておかしいだろう。

「お前も、あのチヨウの女も……同じことをおれに言う」

「そうか。ナンナもやはりお前にリンカを託したか」

キアラは微笑んでいる。優しい親友も、『妹』のことを案じていてくれたか。

「何故だ！ おれはお前たちの敵だぞ！」

「そうだな。でも、お前は私たちを嫌っているが、リンカのことには好きだろう」

「す、き……？」

「リンカとは会話をする。それは彼女が人間だからというわけではあるまい？」

「違う……あれは人間だ。虫じゃない。人間だから、だ……」

「それでもかまわん。リンカは逃がしてやってくれ。あの子は……可愛い私の妹だ。大切な時間をナンナと私にくれた。生きて欲しいと願っている」

それもまた、ナンナと同じ言葉。

「……約束は出来ない」

アシトはナンナに返した言葉と同じものをキアラにも返す。

「それでも、だ」

やはり親友と同じことをキアラは言うて出て行った。

「何故だ……？」

残されたアシトは、地面を見つめて呻く。敵にすら大切な『妹』を託す『姉』。

敵である自分にも幸せになっていいんだよと言う少女。

「どうして……許すんだ……」

声は、信じられないくらいに弱かった。

弐・覆い包むような絶望の始まり・5（後書き）

弐章が終了しました。

痛みを知っている少女と、優しさを知らない少年と。

これから、どうなるのか。

もうしばらくお付き合いください。

参・愚かな攻・遙かな護・1

防備を固めたほうがいい。カプト族の長、ラクラレンは言い、クワガタ族の長、ネーディアも頷き、セミ族の長、ゼンダはその意見を認めた。いつ人間が攻めてきてもいいように、里の守りを固め、万が一のときのために、避難させる種を決める会議が行われた。八チ族の長、ターネルは避難所を作り、十人ほどの力の強い八チ族を連れて里の外に出ている。

「生まれて十年に満たないものと、今、孵化^{ふか}を待つ卵は避難させたほうがいいだろう。あとは……産卵時期に近いメスか？」

ゼンダの意見に、キアラは冷静に続ける。

「八チ族のメスは戦いに向いていない。彼女らも避難させたほうがいい」

「セミ族はどうする？ 彼らは調停役だ。ほとんど戦えないぞ」

「セミ族は長のわしと、鬨いの力を持つ数名で良からう」

「わたくしは」

新しくチヨウ族の長となったチニユが、不安げに声を出す。人間の争いが起こるなど考えたこともなかった彼女の瞳には、怯えが濃い。

「わたくしは、どう動けばよろしいですか、皆様」

「後方待機を頼む。チヨウ族は前に入るな」

ラクラレンはキツパリと言い切った。癒し手であるチヨウ族に前には出られては困る。

「それから、貴女は一切避難所から出ないようにね、チニユ」

「何故ですの、ネーディア様。わたくしは癒し手ですわ。ナンナ様の力を継いだものです。わたくしも……支援くらい出来ます」

「貴女が癒し手の長だからよ、チニユ。生き返りの力持つ貴女が失われることが一番この里の損失になる。貴女は力を継いだばかりで、後継など考えてもいないでしょう？ もし、後継を決めぬうちに貴

女が殺され、その力が人間の手に渡ってしまったら……どうなるか、分かるわね」

後継を決めていないうちに命を落としてしまうと、その力は無造作に近くの者に宿ってしまう。

アシトは『殺せば力が手に入ると聞いていた』とリンカに話していた。

その方法はあながち間違っていないかったのだ。ただ、彼が殺したナンナはすでに後継を決めていたために、彼女の力は殺したアシトではなく後継のチニユに宿った。

「もし、里が全滅しても、お前が無事なら長以外は生き返ることが出来る。いいか、チニユ。お前が死ぬことが里の全滅に直結しているのだ。お前の命は力を継いだそのときから、お前一人のものではない。分かるな？」

キアラは真剣に親友の力を継いだ少女に告げる。強力な力を持つが故、癒しの姫長は里から簡単に出られない。

断じて人間に奪われるわけにはいかない力だ。自然の摂理を簡単に歪める人間に渡ってしまえば、歪める使い方しかされないだろう。チニユは震えながら頷いた。そうだ、人間にこの力を渡すわけにはいかない。自然の声を聞こうとしない人間に渡ったら、それこそ恐ろしいことになる。

「分かりました……おとなしく皆様のお帰りをお待ちしております」
足手まといにはなりたくないし、自分の力が人間に渡ることも防がなくてはならないと、チニユは納得した。

「さて、キアラよ。あの人間の少年はどうする？」
ゼンダはアシトの存在をどうするか決めかねている。避難所に連れて行って暴れられても困るし、かと言って人間が襲ってくる場所に置いておくと彼は人間の味方をするだろう。

布陣を整えている内側で暴れられるのが一番困る。

彼を殺してしまうのは簡単だが、虫族の誰もがそれを良しとしていなかった。

少年は里にとって、皆にとって大切な女性を殺したが、殺された彼女はそれを許したのだから。

「……私は避難所へやるのがいいと思うが」

キアラの意見に、ラクラレンは眉をひそめる。

「だが、ヤツが再び剣を取らんとは限らんぞ？ チニユを襲われてしまったら、今度こそ力を奪われる」

「大丈夫だろう。リンカも一緒に避難所へやるからな。アシトはリンカには弱い。私の妹がいれば何もしないさ」

「リンカを？ ……彼女の強力な雷は確実に人間への武器になるのに、避難させるといふの、キアラ」

言ってから、ネーディアは苦笑した。キアラがリンカを可愛がっているのはよく知っている。里一番の強力な戦士は、『妹』を同じ人間と争わせることを気に病んだのだろうか。

「避難所にも防備は必要だろう。リンカなら守りきってくれると思っ
っている」

「はいはい。そういうことにおきましよう」

キアラ以外の虫族たちも、あの少女を戦いの矢面に出すことはしたくないと思っ
ている。

長く人間の里で迫害されていた少女だ。辛い思いをさせたくな
かった。

人間はそう遠くないうちに攻めてくるだろう。この高山にある『虫の里』までどうやってくるのかは分からないが、平気で自然を歪める人間だ。どんな手で来ても不思議はない。

『虫の里』。優しい虫族たちの住む場所に、魔の手が忍び寄り
として
いる……。

避難所に行きなさいとキアラに言われたとき、リンカは耳を疑っ

た。

「何で？」

リンカは戦うつもりだった。里を護るために、あまり好きでない自分の雷を呼ぶ力も迷いなく使うつもりだった。

「わたし、戦えるよ」

キアラもリンカの力は知っているはずだ。滝を一撃でめぐり、雨雲さえ切り裂いて蒸発させる彼女の力を。

「ああ、分かっている。だから、リンカには避難所の皆を護ってもらいたい」

「……避難所の……」

「避難所には戦えないものが集まる。卵や産卵期のメスもだ。彼女たちや子供たちを、私の代わりに護っておくれ」

「！ うん！！ 分かった！！」

キアラの代わりに、力のないヒトたちを護る。リンカは大切な役目が与えられたと感じた。

「ちゃんと護るよ。任せて」

ぼんと胸を叩くと、肌身離さず身に着けているお日様の形の首飾りが揺れた。

「ああ、頼む。チニユもいるからな。護っておくれ」

「……チニユ、いるの？」

途端に顔を歪めた『妹』に、キアラは笑みを浮かべる。

「仕方ないだろう？ 彼女はナンナの力を継いだ。人間に連れて行かれたら大変だ」

「うー、うー、うーっ、分かった……チニユも、護る……」

ガツクリと肩を落としたリンカに、『姉』は声を上げて笑った。

「何であなたがいるんですの」

避難所で顔を合わせるなり、チニユに言われたリンカである。

「雷の力を持つているはずではなかったのですか。それとも怖気づいて逃げてきましたの？ よくそれでキアラ様の妹を名乗れますわ

ね

「違うもん！ 避難所の皆を護るようになってキアラに頼まれたの！

！」

「……本当に言われましたの？ キアラ様に厄介払いされたのでは？」

「チニユ、きらい。チニユも護れって頼まれたけど、やめようかなぶくーっとほっぺたを膨らませてすねてしまおうリンカに、ロゼッタが笑いかけた。

「リンカがいてくれたら安心だね。ほら、避難所にはあの子も一緒でしょう？ 実はちよつとどうしたらいいのか分からなかったのよ」

彼女はちらりと避難所の隅にいるアシトを見る。彼はいつものように剣を背負っていた。

「……あの子あんまり笑わないから」

「そうですね。無愛想もいいところですよものね……」

チニユも少年を見る。大好きなナンナを殺した少年。

でもチニユも彼を憎いとは思っていなかった。ナンナのような優しいヒトをその手にかけるなんて、なんて可哀想なヒトなのだろうと思っっている。

そうしなければならなかった少年が、可哀想だと思っ。

優しい里の中で、優しいヒトと触れ合うことも出来ずに、優しいヒトを殺してしまった可哀想なヒト。

彼は居心地が悪そうだった。ナンナを殺したことで責められないのが心から不思議のようだ。人間との争いが始まるから、お前も危ないので避難しておけとここに連れてこられて、どうしたらいいのか分からないらしい。虫族たちが彼を心配している気持ちが理解できないのだ。

憎まない虫族。恨まない虫族たち。

重い罪を犯した少年は、理解できずにかえって苦しんでいる。

優しさが、分からない。ぬくもりが理解できない。彼から一番遠い場所にあったものだから。

「笑えないのかしら。笑い方を知らないのかしら……可哀想な子ね」
ロゼッタは心配そうに言う。わずかな間でも一緒に里に暮らした少年だ。彼の声を聞いた事はない。話してくれなくてもかまわないから、少しでも笑って欲しいと思っている。

「リンカとは普通に話してくれるの？」

「うん。でもアシト、無口だよ。あんまり話すの得意じゃないみたい」

「そう。でも口が聞けないわけではないのよね？」

「うん。喋れるよ」

「分かったわ。なら、餌付けからしてみようかしら」

ロゼッタはふんつと息を吐いた。こういうときの彼女は強い。戦えなくても、何故だかこういうときのロゼッタは、怪力のラクラレンすら圧倒するくらい、強い。

「あはは、頑張つて、ロゼッタ」

「任せといて頂戴！」

とりあえずは今日の夕食からね！ とロゼッタはこぶしを握って気合を入れてから、アシトに歩み寄った。

リンカとチニユはじつとその様子を見守る。

そして攻防戦（ある意味一方的）は始まった。

無言で通すアシトに、ロゼッタはしつこくしつこくしつこく、しつこく！ 好物は何かと訊いている。彼が返事をするまでそれは続けられるのだ。

それはもう、しつこい。

「……………おい」

どのくらい続いただろうか。ついにアシトが声を上げた。ロゼッタにはなく、リンカに視線を向けて、ロゼッタを指差す。

「頼む。止める」

助けを求められたリンカはにこやかに首を横に振る。

「だめ。邪魔したらロゼッタに怒られちゃうから」

アシトはこころなしにゲンナリしているようだった。

「……………止めてくれ」

「アシトがロゼツタに答えてあげたら止まるよ？　好きなものか食べたいものを教えてあげたらいいだけだっただけだよ」

「おほほほほほ、そういうことよアシト。教えて頂戴？　あなたの好きなものはなあに？　今日食べたいものはあるかしら？」

ロゼツタは、めげない。何十回目かの質問を繰り返す。

虫族に話しかける気は全くないようだったアシトだが、繰り返される質問にさすがに忍耐が尽きたのか、ぐったりと頭を落として、ようやく答えた。

「……………肉」

「お肉？　なんの？」

「……………焼いてあれば……………なんでもいい……………」

おおー。避難所内で、拍手が巻き起こった。虫族の誰が話しかけてもほとんど答えようとしなかったアシトが、返事をしたのだ。

勇者ロゼツタを称える拍手である。ロゼツタは満足げに頷いて、アシトの頭をくしゃくしゃと撫でた。

「！？」

驚いて身を離す彼に、八手族の女性はにこやかに笑いかける。

「じゃあ、今日の夕食はお肉を焼くわね。ええと、確かイノシシのお肉が保管庫に運ばれてたから」

上機嫌で離れていく彼女を、少年は呆然と見ている。くしゃくしゃになった頭もそのままに。

「……………なん、なんだ……………こいつら……………」

呟きは本当に心から理解できないと述べているかのようだったが、本当にイヤならばさっさと逃げているだろう。ナンナを殺したときのように、剣を抜いて暴れてもいいのに、アシトはそうしなかった。リンカはちよつと微笑んだ。拒絶していたアシトも、ようやく打ち解けようとしているのかもしれない。

「ロゼツタ……………わたくしちよつと感心いたしましたわ」

チニユも面白そうにくすくす笑っている。アシトのビックリした

顔が面白かったらしい。

「わたしロゼッタ手伝ってこようっと」

嬉しくなってリンカはロゼッタの後を追いかけてようとして、がしつとチニユに服を掴まれる。

「お待ちなさい。あなた、料理上達したのですか？ 以前のように炭くずのようなものを作り出すつもりではないでしょうね？」

チニユは以前、キアラが持っていた『リンカ作・お弁当っぽいもの』のことを覚えていた。

とても食べられるとは思えないそれを、キアラは苦笑しながら何とか平らげていたことを覚えている。こんなものを食べさせるなどと、リンカは鬼かと思ったチニユだ。

「あなたが作るものは毒だと認識していたのですけれど、進歩しましたの？」

「……チニユ、きらい」

ぺいつと彼女の手を振り払って走り出したリンカを、あわてて追いかけるチニユだ。

「お待ちなさい！！ 上達していないのですか！？ チョウ族の長の名にかけて台所に入るのは許しませんわよっ！」

「チニユ、きらいーっ！」

「わたくしだつてあなたなんて大嫌いですわよっ、あなたの料理は死人が出ますっ！ 癒し手として目の前で犠牲者を出すわけにはまいません！！ お待ちなさい、リンカ！」

追いかけてつこを始めたチョウ族の長と、里一番の戦士の『妹』を眺めて、避難所の虫族たちは微笑んだ。

緊張感のほぐれた瞬間、破滅が産声をあげ、絶望がその手を振り下ろした。

参・愚かな攻・遙かな護・2

アシトがハツとして立ち上がった瞬間である。

何かが壁にぶつかった音がした。それはちょうどロゼッタが向かった保管庫のほうから聞こえて、

「!!! 伏せる!!!」

察知したアシトが声をあげ、リンカは咄嗟にチニユを引きずるようにして地面に倒れるように転がった。

瞬。

耳を裂くような音と、舞い上がった煙に、視界が覆われる。何が起こったのか分からない。でも、リンカは肌で感じている。

幼いあの日、森の中で獣に囲まれたときのような、恐怖。

これは何。それは何。頭は混乱していても、彼女はどこかで理解している。

現れたもの、訪れたもの、それは、彼女や仲間の虫族の命を奪おうとしている、敵だ。

何でここに。そう思いながらリンカはチニユの腕を取って部屋の隅に身をかがめて寄る。

立ち上がるのは危険だと感じた。

「チニユ、怪我した?」

「い、いいえ。大丈夫です……な、なんですの、何が起こったんですの……?」

心細げにチニユはリンカの服の袖を掴んだ。煙で何も見えない。

「ここにいて。保管庫、見てくるから」

キアラに皆を護ってくれと頼まれている。もし敵が 人間が攻めてきたのなら、皆を護らないといけない。

「わ、わたくしも参ります」

震えた声でチニユは言う。チヨウの長である身だ。彼女も護られるだけでなく、皆を護りたいと思っている。

「……うん。わたしから離れちゃダメだよ」

「……ええ。分かりましたわ」

戦う力ではチニユよりもリンカのほうが遥かに上だ。何せキアラの『妹』である。その上で雷を自在に扱う力の持ち主だ。おとなしくチニユは頷いた。今はケン力をしている場合ではないと、彼女は理解している。

「皆、怪我してない？ わたし保管庫見てくるから、壁際でじっとしてて！」

ほかの皆に声をかけておいて、リンカはチニユと壁伝いに保管庫のほうに向かう。

煙は徐々に収まってきている。保管庫が見えてきた。出入り口にかかっていた御簾がなくなっている。干切れたかのようにも見えた。

何が起きたのか。

リンカは壁に張り付いて中の音を窺った。別段何も聞こえない。

ロゼッタがいるはずなのに、彼女の気配もしなかった。

チニユに声を出さないように指示して、リンカはそつと中を覗いた。

「っ！！」

言葉を失う。声が出ない。中は外にな………。ハチ族が作った巢の壁が吹き飛んでなくなっている。広がるのは外の風景で、地面に転がっているのは……バラバラになったロゼッタの身体だ。不思議そうな表情のまま、彼女の頭が転がっている。

「う、そ………」

リンカは身体を戻して壁に張り付くようにして呼吸する。夕食をとっていたら吐き戻していたかもしれない。

「リンカ……？ どうしたんですの……？」

青ざめた彼女に、チニユが細い声で訊いてくる。彼女の様子から何かとんでもないことが起きたのだらうとは予想が付くが、それが

何なのか分からない。リンカは何とか答える。

「チニユ、見ちゃダメ……ロゼツタ、バラバラなの……」
「っ……！」

チニユは口元を覆った。蒼白になっている。

「ど、どうして……何が起きたんですの？」

「分かんない……分かんないけど、避難所にいたら危ないんだと思う」
「う」

リンカはチニユの手を引いた。とにかく彼女は護らないといけな
い。

この混乱が収まったら、チニユの力でロゼツタは生き返ることが
出来る。だが、チニユがあんな目に合わされたら終わりだ。

「皆を連れて里に戻ったほうがいいかもしれない。キアラたちとい
たほうがいいかもしれない」

ここは里の隣の山だ。避難所の異変に気がついても、里に居る戦
士たちがここに来るまでには時間がかかる。それならばこちらから
戻ったほうがいいかもしれない。

皆のところに戻ろうとしたリンカとチニユの耳に、再び轟音が聞
こえてきた。地面が揺れて、立っていられず少女たちは倒れる。

音は、今さっき彼女たちが居たところから聞こえてきた。

「……！」

リンカは立ち上がった。チニユの手を引いて走り出す。

どうして最近作ったばかりの避難所が襲われるのか。襲われるの
ならば里ではないのか。戦士たちは里に居て、ここにはリンカ以外
は戦えない者しかいないのに……！！

避難所の中は混乱を極めた。誰もがここは安全だと思っていたか
らだ。ここが襲われるなど微塵も考えていなかった。

里とは離れていて、目立たないように作られている。襲われる理
由がない。虫族の誰もがそう考えていた。

気が付いていたのは、人間の少年ただ一人だ。

彼とて今この瞬間に至るまではその可能性に考え付いてもいなかったのだが。

「やつほう、アシト。久しぶりい。生きてたのかい？ 良かったねえ」

少年の姿を見て、そんな言葉をかけてきたのは、虫のような格好をした男だった。背中に大きな管のようなものを背負い、腕にはたくさんの黒い塊をくつつけている。

「お前か……コルガ」

アシトの知った顔だった。彼の同僚と言える存在だが、アシトはこの男が嫌いだ。

「虫に捕まって殺されちゃったのかと思ってたけどねえ。生きてたのかあ。けけけ」

ぶんつとコルガは腕を振る。その手から黒い物体が飛んで、かなり離れた壁に張り付いた。

「いーち、にーい、さーんつと」

黒い物体が破裂して、壁がなくなる。爆弾というものだが、虫族たちはそれすら知らない。壁の向こう側に居たチヨウ族が、泣きながら走っていく。その子を抱え、かばっていた八手族の男は、頭を失っていた。

「けははははつ、虫には高度すぎる技術だよねえ。あわてて逃げてくよ。さーて、どいつから力を奪えばいいのかなあ？ アシトは知っているよなあ？ こんだけ長く虫と居たんだから、それくらいの情報掴んでいるんだろあ？ どの虫を殺せばいいのかなあ」

「……」

アシトは答えず、背の剣に手をかけることもない。手を握り締めて眉をしかめている。

「おーやあ？ どうしたのかなあ？ アーシト。アシトくん？」

コルガはからかうようにアシトを呼んで、それから不気味に笑みを浮かべる。

「お前、虫けらに情が移ったのかあ？」

「……違う」

「へへへ、じゃあなんだよお？ その顔はあ？」

いつも無表情のアシトが、珍しく表情を浮かべている。それは葛藤だった。苦しみだった。

虫。ただの虫だ。人間じゃない。

少年の脳裏によぎるのは、穏やかに微笑むチヨウの女、その遺体にすがって泣く人間の少女、その彼女を頼むと言う八子の体にトンボの羽の女、さきほどしつこく自分の好物を訊いてきた八子の女、人間の少女と追いかけてこをする八子の体でチヨウの羽を持つ女、そして。

ただの虫を、護るために走っていった、人間の少女　リンカ。

「違う……！」

彼女の泣き顔が、焼き付いて離れない。

人間の彼女が、どうして虫のために戦おうとしているのだ？

気配を感じてリンカは足を止め、チニユをかばう。

「あら、可愛い子見つけ」

にこやかに彼女たちに話しかけてきたのは大人の女性だった。両の手首で丸い刃物をくるくると回しながら、二人を見ている。腕にずらりと刃物が並んでいた。

「まあ、綺麗な羽ねえ。ふふふ、とっても可愛らしいし、連れて帰りたいわ」

リンカは鳥肌が立つような感覚を女性に感じ取った。人間に見えるけれども、このヒトは人間だろうか。異質な感じを受ける。

「前のあなたは……とっても可愛いけど羽がないわね？　羽のない虫もいるのかしら」

リンカを見て、女性はうっとり微笑んだ。

「可愛いわあ……二匹とも。羽虫とは思えないくらい。連れて帰ってもいいわよね？　力を手に入れるっていうのが任務だし。連れて帰っちゃダメとは言われてないものねー」

手首の刃物を器用に指先に移し、女性は微笑んでいる。

「私はアントキ。アントキっていうの。よろしくね、羽虫ちゃんたち。大事に大事に飼ってあげるわ。研究所で実験された後だろうけどね……」

彼女の手から刃物が飛ぶのを、リンカは確かに見た。

複雑な飛び方をしてくるのも空気の流れで感じる事が出来る。

避けるのはリンカには簡単だが、後ろのチニユには無理だろう。

リンカは即座に意識を集中、流れてくる空気を叩くように雷をぶつける。

紫の光がはじけて、刃物は土の上に落ちた。

「あらびっくり」

アントキは目を丸くしてリンカを見た。

「強いね、羽虫ちゃん。おねえさんびっくりよ？」

「羽虫じゃないよ。わたし人間だから」

「あら、またびっくり。あなた羽虫ちゃんじゃないの？」

「違う。羽虫なんてどこにもいないよ」

「？ あなたの後ろの子は、羽虫ちゃんじゃないのかしら？ 羽あるけど？」

「チニユだもん。羽虫じゃないよ。わたしはリンカ。羽虫じゃない」

虫じゃない。ちゃんと名前がある。虫じゃない。あざ笑うように

虫などというこの女性には分からないだろうけれど。

「あらあら」

アントキは肩をすくめた。

「羽虫ちゃんでしょ。虫は虫よ、可愛い人間のお嬢ちゃん」

「虫じゃないよ」

言いながらリンカは背後に空気の流れと気配を感じ取った。野生の獣ではない、虫族でもない異質な気配。目の前にいる女性と同じような、存在。

自然ではないもの。

「わたしもチニユも、名前がある！……」

リンカはアントキを睨みつけながら、背後の気配に向かって雷を放つ。空を裂く一撃がチニユを狙っていた男の頭上に落ちた。

くだくだ話してリンカの気を引き、仲間の不意打ちを誘っていたアントキは、舌打ちして腕につけていた刃物をリンカに放った。

この少女が侮れない存在だとようやく気が付いたのだ。力を放っていたリンカにかわせる速度ではない。アントキは確信していた。少女を殺したりはしない。ただすこおしだけおとなしくさせるだけだ。足の腱を切つてやれば、泣き出してしまっただろう。

捕らえた、と思った瞬間、アントキの刃は止められた。

リンカの身体の寸前で、刃を指で掴んで止めたのは　　すらりと背が高い赤い八手の姿。

その背にはトンボ族の羽がある。

「キアラ！！」

「キアラ様！！」

リンカとチニユが嬉しそうに声を上げた。

「リンカ、よくチニユを護った。すぐにラクラレンもネーディアも駆けつける。もう大丈夫だ」

「うん！！」

輝く笑顔でリンカは頷き、チニユの手を取って背後を見た。さっき一撃した男はピクピクとしている。

「チニユ、怪我してない？」

「ええ、大丈夫ですわ。リンカ」

少しだけ、チニユは微笑んでリンカに言う。

「護ってくださいって、ありがとう」

アシトは剣を持ちもせず、虫たちを追おうともしていない。コルガを見て、少年は自分の胸元を押さえる。

「……ここは虫の住処じゃない。何故、こちらに来た」

うすうすと答えは分かっていたけれど、確かめるために、訊いた。「そりゃあ、お前の反応がこっちにあつたからだよあ。気付いてるんだろあ？ 発信機が埋め込まれてることくらいさあ。一応アツチの山にも誰か行つてははずだぜえ？ お前の反応が長いこと動かなかつたから、住処はアツチなんだろうって見当はつけてたからなあ」

やはり、とアシトは顔をしかめる。本人も知らないうちに、体内に位置を特定する発信機が埋め込まれていたのだ。身体的にいろいろと改造を受けている身としては、今更知ったところでたいして違和感もないはずだ。アシトやコルガ、アントキはすでに人間としての機能の大半を変えられてしまっている。

彼らはすでに、兵器そのものなのだ。

だから、薄着、軽装でラクランド山に登れた。重い鉄の剣を、軽々と振り回すことが出来る。アントキとコルガと違い、アシトが受けているのは手術による内臓の強化と薬物による身体改造なので、外見はほとんど人間と同じなのだが。

「でもなあ、なんかさあ、反応が付いたり消えたりしてたらしくてさあ、お前すつかり虫に殺されたことになつてるぜえ？ 発信機、壊れたかなんかしてるらしいなあ」

黙り込むアシトに、コルガは笑っている。笑いながら腕の爆弾を逃げ惑う虫族たちに投げつけていた。

「……リンカ、か」

少女の名を呟く。一度彼は彼女の力を受けた。雷の力を身体に受けた。そのために体内の発信機は壊れかけているのだろう。

重い戒めのように感じる、発信機が存在。

自分がいたことで、この避難所が襲われたのだ。

きつと、来ているのはコルガだけではない。アシトの生死が確認できないことで、本部は確実に数人を送ってきたはずだ。

ならば……アシトは虫たちを殺さなければならぬ。疑うことを知らない虫族。受け入れようとしてくれた虫族。

任務のために、彼らを殺すべきだ。力を手に入れて、戻らなくてはならないのだから。

「ひやはははは、ほうれほれ、逃げるよお？ 逃げても殺しちゃうけどなあ」

コルガが笑っている。爆弾が放たれて、また虫族が吹き飛んだ。バラリと羽が散る。日に透ける綺麗な羽が無残に落ちた。

アシトはそこから視線を逸らして、コルガから離れた。任務を果たさなければならぬ。力を手に入れなければ、ならぬ。

この避難所にいる虫族で、強力な力を持っているのはリンカと一緒にいたチニユとか言う虫族だ。

その場から逃げるように、リンカの後を追いかけるようにアシトは走った。彼女たちは保管庫の方に向かったはず。

そこにいるはずだ。だが、見つけてどうする？ 斬るのか。リンカの目の前で、チニユを。

斬ることが、できるのか？

保管庫まではアシトの足ならすぐだった。地面を擦るように止まり、そこで見ると。

転がる首。散らばるバラバラの胴体。

アシトの好物をしつこく訊いてきたハチの女だった。きよとんとした表情のまま、首が転がっている。

コルガの爆弾で、殺されたのだろう。それは分かったのに、アシトは動揺している自分自身に驚いた。死んでいるのは虫だ。人間ではない。

ただの虫だ。なのに。

「……何故だ？」

どうして彼の手は震えているのだろう。脳裏に浮かぶのはチヨウ族の女の顔。穏やかな顔のまま、アシトに殺された女。

アシトを、許した彼女。アシトに、リンカだけは逃がしてあげてと頼んだ彼女。

「……っ!!」

苦く少年は顔を覆う。どうしたらいいのかわからない。リンカ。人間でありながら『虫の里』に住む、力を持つ少女。彼女をとても大切にしている虫族たち。

もしこの里に何かがあったら、『妹』だけは逃がしてあげて。口を揃えて言った『姉』たち。

かわいそうだね、アシト……。

少女は泣いていた。泣きながらあの時アシトに言った。

力があるから殺したのなら、わたしも殺すの？

答えられなかった。

力なんてあってもいいことないよ。なくてもここで皆と暮らせばいいんだもん。

人間なのに、人間の里にいられなかった彼女。

わたしはここで幸せだよ？

彼女は、そう言っていた。

アシトだって幸せになってもいいんだよ……？

彼女の『姉』を殺した自分にまで、そう言った。
分らない……！！

ざり。不意にした音に、アシトは咄嗟に剣に手をかけた。

現れたのは、片腕をなくし、顔の半分をえぐられたカプト族の長、
ラクラレン。

「……おお、無事だったか、小僧」

彼はホツとした様子でアシトにふらつく足取りで近寄った。体液
がぼたぼたと地面に落ちる。

「お、まえ……」

どう見ても息絶える寸前だ。アシトは近寄るラクラレンを避ける
ことも出来ずに、ただ、見ている。

「リンカは……無事なのか？ ああ……キアラがついているから……

……だが……ネーディアの力が奪われた……ゼンダも……リンカを……

……あの子を、逃がさなければ……小僧、頼む……あの子は、人間だ

……お前と同じ、人間だ……殺さないで、やってくれ。逃がして、
やってくれ……」

もう彼は目が見えていないようだった。気配で何とかアシトの前
にまでやってきて、少年の肩を掴む。

「力が欲しいのならば……俺のものをやる……リンカを、逃がして

……たの、む」

ラクラレンの身体が崩れるように地面に倒れた。

「おい！」

手を伸ばしかけてアシトはその手を止めた。触れてどうする。す
でに息絶えてしまった虫に、手を差し伸べてどうする？

こいつは虫だ。人間じゃないのに。

呆然と息絶えたカプト族の長を見下ろす少年の背に、光が宿った。

キアラの前ではアントキは敵ではなかった。即座に打ち倒され、
地面に倒れ付す。

チニユとリンカは手を取り合って騒いでいる。キアラがいるのならばもう恐がることはないと安心している。

「二人とも怪我はないか？」

少し離れた場所でアントキと戦っていたキアラが訊いてくる。

「ないよ、平気！」

リンカは元気よく答え、嬉しそうに笑った。

「わたくしたちは怪我もしておりませんわ。でも、皆が……ロゼッタたちが」

チニユは今にも泣き出しそうに告げた。それでリンカもハツとする。

「そうだ、ほかの皆を助けなきゃ！！」

離れたところから音が聞こえてくる。攻めてきた人間は一人や二人ではないのだろう。

「アシトともはぐれちゃったよ。捜してあげなきゃ！！」

リンカの言葉に、キアラは内心で微笑む。こんな状況下でも、ちゃんと人の事を心配できるリンカの強く優しい心が、誇らしい。

この『妹』を護らなければ。

人間でありながら力を持つ彼女が、力を求める人間に捕まってしまえば、どんなな目に遭わされるか分からない。

何よりも心配なのはそれだった。

「リンカ、私が行く。お前はチニユを」

護っていておくれ。そう言いたかった。危険なところに行かせたくはなかった。

どんな暴力も届かないところで、幸せに過ごして欲しい『妹』だから。

ぞぐり。

肉をえぐられる感触。

『妹』を想う気持ちをそのままに、キアラの意識は途切れた。

楳火の謡（ほたびのうた）

参・愚かな攻・遙かな護・3（後書き）

大切なヒトを護りたいだけだったのに。彼女の願いはただ、それだけでした。

参・愚かな攻・遙かな護・4

リンカは目を疑った。こちらに向かって話しかけていたキアラの
声が途中で途切れて、

「キアラ？」

彼女が声をかけた瞬間に、大好きな『姉』の身体が、斜めに、断
ち割れて 落ちた。

「ッ！！？？」

リンカの隣で、チニユが声を失っている。

今、何が起きた？

「これで、みつつめ……」

くすくすと笑う声がする。

キアラの下半身が、ゆっくりと倒れた。

「きあら……？」

呆然と、声を放つリンカの視界に、二つに割れたキアラの身体。

「弱いなあ、羽虫」

近寄ってきたのは、アシトより少し年上に見える少年だった。ア
シトとは対照的な金色の髪に青い瞳の、人間だろう、少年。だが、
彼の背にはセミとクワガタの二種類の羽がある。

「あ、あ……」

チニユが理解する。あの羽は、セミ族の長、ゼンダと、クワガタ
族の長、ネーディアのものだ。

「どう、して……」

ふたりとも後継を決めていた。殺されたとしても羽と力は後継に
宿るはずだ。

この少年はゼンダとネーディアの定めた後継ではない。では、少
年は、後継の者まで殺したのだ。力と羽が継承された瞬間に、後継
であったユリアンとリムーブまでも殺して力を手に入れ、そして。

キアラも殺した。

リンカが目を見開く。キアラ。
もういない。ナンナのように、戻らない。

「ああああああああああつ！！！」
少女の絶叫が響く。

理解が脳に届いても、心が認めたくないと叫ぶ。ナンナが死んだ
ときのように。

けれどナンナのときのように、五体満足な遺体ではなく。
それがリンカの心を引き裂いた。

少年がキアラに近付くのを見たとき、感情が爆発する。

「キアラに近寄るなああああッ！！！」
紫の雷が閃いた。次々と少年の周りに炸裂する。

「と、わ、た、なんだ？ 君、人間じゃないの？ 羽虫じゃないよ
うに見えるんだだけ、ど」

何とか避けながら、少年はリンカを見ている。

絶望のあまりリンカの力は定まらない。それでも威力は落ちてい
ないので少年は避けることしかできず、キアラにも近寄れない。

「リンカ、リンカ！ 落ち着いてくださいましっ！！！」

チニユが泣きながら少女の背に抱きついた。このままではリンカ
の心が壊れてしまう。小さなときによく暴走したように、力を弾け
させてしまいそうな気がした。そうなれば避難所の皆も巻き込まれ
てしまう。それで悲しむのはリンカだ。

キアラが殺されてしまったのはチニユも悲しくてたまらない。

どうしたらいいのかも分からない。でも、今このままリンカを放
つておくこともできない。

「キアラ、キアラ、キアラ 返せええっ！！！」

チニユの声もリンカには聞こえていない。

ナンナのと看とは状況が違ふ。目の前で無残に殺された。その事実が少女の心を打ち砕いている。

穏やかに全てを許して死んでいったナンナとは違ふ。そんなことすらできないくらいに、瞬間の出来事だ。

キアラが殺された。

それだけがリンカの頭の中に渦巻いている。

「リンカ……お願いです、やめて……っ!!」

チニユは悲痛に叫ぶ。助けてください、キアラ様。心の中でチニユは叫んだ。

このままでは、リンカが壊れてしまう……! 普段ケンカばかりしている少女のために、チニユは泣き出していた。彼女まで失くしてしまつたら、チニユは立っていられない。ナンナを失い、目の前でキアラを失つた。その上で、ケンカ友達のリンカまで壊れてしまつたら。

「キアラ様……っ」

チニユの声。

「キアラ、キアラ……キアラあああっ!!」

リンカの絶叫。少女は涙を流すことも出来ない。あまりにも心が痛くて、泣くこともできなくなっている。

無慈悲な現実が、彼女たちの目の前にあるからだ。

二つに分かたれてしまつた、キアラの身体。

彼女は、長だ。だからもう戻らない。チニユの力でも生き返らない。

ナンナが死んだときと、同じく。

リンカ。

声が出たような気がした。

「……っ！」

リンカの背に抱きついていたチニユが目を見張る。

光が。

「ああ……っ」

リンカの背に生まれる光に、チニユは声を詰まらせてケンカ友達の背から……ゆっくりと、離れた。

トンボ族の長は、後継を決めていたのだと、チニユは理解する。

何よりも大切に愛おしみ、慈しんでいた『妹』へ、己の力を。

羽が欲しいと泣いていた彼女に、己の羽を。

もしも、彼女より先に自分が死んだとき、彼女の心が壊れないように。

大切なものを、リンカに残したのだと。

「き、あ、ら……」

背中の中の温かい光に、リンカの瞳から涙がこぼれる。『姉』がいつもしてくれていたかのように、最後の想いで彼女の頭を撫でてくれた気がした。

人間の少女の背に生まれ出でたのは、最強の戦士の、最大の愛情。可愛い『妹』へ残せる、最後の想い。

『どうか、幸せに生きて欲しい……』

しやらり。『妹』の胸元でお日様の首飾りがゆれる。

それはもう一人の優しい『姉』が彼女に送ったもの。

優しい、贈り物。

『笑ってくれるだけで、いいのよ……』

彼女は思う。

優しい虫族。今まさに人間の手によって滅ぼされようとしている彼らを。

「護る、から……」
義務でなく、責務でなく、心から。

リンカが放ち続けていた雷が止んだ。少女は前を見る。

光は収まり、少女の背には日の光に煌めくトンボ族の羽がある。

少女は人間だ。だが、好きだった『姉』の力を受け継いだ。

彼女は人間だ。だが。

「ありやりや、そっちに行っちゃったのか。じゃあ、君も殺さないとならないよね……困ったな。人間でしょ？ 羽虫は殺せつて命令されてるんだけどさ……」

キアラを殺した少年は、どうしようかとリンカを見ている。

考えても答が出ない彼は、リンカの背後のチニユに視線を向けた。

「とりあえず、そっちの羽虫から」

言葉が終わらないうちに、リンカは身を翻してチニユを抱え、すぐさま飛び立った。

「あ」

間抜けな少年の言葉を背に、全速で飛ぶ。頭の中にはキアラの言葉。

ナンナの力を継いだチニユ。彼女が人間に連れて行かれたら大変なことになる。

そうだ、チニユの力を人間に渡すことは出来ない。連れて行かれてしまったら、里は元には戻れなくなる。

リンカは泣きながら飛んだ。ずっと自分の力で空を飛んでみたかったけれど、こんな形で飛ぶことになるなんて。

飛ぶのなら、キアラとナンナと一緒に飛びたかった。二人と一緒に空の散歩をしたかった。

チニユが力一杯抱きついてくる。彼女も泣いていた。止まらない涙を拭うこともしないで少女たちは泣いている。

大好きな人たち。生きていて欲しかった。力なんて要らないから、

楳火の謡（ほたびのうた）

後継なんてどうでもいいから、ただ、生きていて欲しかった。

一緒に、生きていたかった……！！

ささやかな願いだった。でも、何よりもそう願っていた。

もう、かなわない願いだ。

彼女たちは帰ってこない。永遠に、戻らない……。

「あれ、アシト。生きてたの」

少年はアシトを見て驚いたようだった。彼はとうに死んだものとみなされているらしい。二週間以上も連絡がなければ当然か。

「……シユマリ」

呟くように同僚を見て、アシトは眉を寄せた。二種類の背の羽。

「あ、これ？ かつこいい？ 僕は二匹やったからね。セミとクワガタ。結構強かったよ、特にクワガタは。でも、そいつらの力を手に入れたら……羽虫は急に弱く感じたね」

シユマリと呼ばれた少年は、にまりと笑う。

「トンボの女なんて、女の子に気をとられてたから一瞬だったよ」

「トンボ……？」

目を細めるアシトに気が付かず、シユマリは上機嫌で続ける。アシトよりかなり口数が多い。喋るのが好きなようだ。

「そう、トンボ。アントキと戦ってたんだよね。見てたら強かったからさ。あのアントキが瞬殺だよ？ これは不意をついたほうがいいと思ってたら、近くの人間に気を取られたからさ。そこを……」

シユマリは腕を振る。そこに仕込まれているのは彼の武器だ。アシトが剣、コルガが爆弾、アントキが刃物を持つように。

「ざっくりと、ね。いやあ、一番簡単だったな。でも、人間の女の子に行っちゃったんだよね……力と羽が。一体どういう法則なんだろう？ 分からないよね。セミとクワガタも一回ほかの羽虫に行っ
たしなあ……」

まいったよとシユマリは頭をかいている。何の変哲もない人間の少女が虫たちといることにも驚いたが、彼女が雷の力を放ったことにも驚愕した。

「あの子……なんなのかな。雷落としてきたけど……恐かったよ、さすがに。あれ、当たったら死んでただろうし」

頷くシユマリは、アシトに視線を向けた。

「アシトも力を手に入れたんだね。クワガタと似てるけど……ああ、一匹カブト逃がしたな、ひよっとして、それ？」

アシトの背にはカブト族の羽がある。ラクラレンが託した力。彼はシユマリに答えず、辺りを見回した。人間の少女の姿はない。

「……その子は、どこへ行った？」

「え？ ああ、トンボの羽はえちゃった子？ チョウの羽虫とあつちのほうに飛んで行ったよ。ほかの羽虫殺して力を奪ってから追いかけてよと思うんだけど、アシトはどうする？」

訊かれてアシトは手にしていた剣を見下ろした。背に羽があるために背負えなくなった剣。

チョウの女を殺した剣。

「……追いかける……」

リンカとチニユが逃げたほうを見て、少年は呟いた。

「あ、そう？ じゃあ、任せようかな。僕はほかの羽虫をやつとくよ。そつちはアシト、頼むね。あと、一応人間の女の子は連れて帰つたほうがいいんじゃないかな。なんだか彼女は特殊な気がするしシユマリの言葉に答えず、アシトは地面を蹴った。羽を広げ、空へと飛び立つ。力を手に入れた瞬間に、その力の使い方も飛び方も理解できた。そうやって虫族の力は脈々と継がれてきたのだろう。

自然にあるがままに、受け取った瞬間、そのままに使える力。

「……人間が……持っているものじゃ、ない、のか……？」

アシトの呟きは、風に溶ける。彼は首を振った。どうすればいい？

……どうしたら、いい？

リンカは涙を拭った。泣いてはいられない。護らなくては。岸壁の一部を雷で砕き、その中にチニユを下ろす。空からも地上からも死角になっているここならば、まず見つからないだろう。

「チニユ、ここにいて」

「リンカ……わたくし……わたくしっ、どうしたら……っ！」

泣きじゃくる彼女の肩を叩いて、リンカは潤もうとする瞳に力を入れてこらえる。

「長、でしょ。チヨウ族の、ナンナの力を継いだんだから、何をすればいいのかわかるでしょ。チニユは、死んじゃダメ。人間に捕まってもダメ」

「……あ、あなたに言われなくても分かってますわ……!!」

リンカが泣くのをこらえているのを感じ取って、チニユは唇を噛んだ。彼女がこらえているのに、自分が泣き喚くわけにはいかない。

「わたくしのほうが……先に長になったのですからねっ」

「そうだね、そうだったね……がんばらなくちゃ、ね……」

「行ってくださいまし。わたくし、一人で隠れていますわ。大丈夫です。ですから、ですから……ちゃんと、戻ってくるのですよ!!」

「うん」

頷いて、リンカは羽ばたいた。疾風とまで呼ばれたキアラの力を

継いだ彼女は、風よりも早く、切り裂くように空に行く。
許せない。キアラを殺したあの少年。彼はキアラだけでなく、ゼンダとネーディアも殺して力を奪った。放っておけばほかの虫族たちも殺しつくすだろう。力を得るためだけに、そんなバカみたいなことのために、命を狩りつくすだろう。

力を欲するために、他を殺す愚かなヒト。

「……返してもらおうから」

強く呟く。人間になんてあげられない。力も羽も、虫族のものだ。どんな使い方をするのかわからない人間なんかには渡せない。

自然と共にある力なのだから、自然を歪める人間になど、渡せない。

「キアラ、ナンナ……わたし、がんばるからね。見ててね。力を、貸してね……」

胸の首飾りに手を当てて、リンカは誓うように呟く。

あの人間たちと戦わなければ、『虫の里』は滅びる。あの優しい虫族たちは世界から姿を消すだろう。

櫓火の謡（ほたびのうた）

そんなのは、イヤだった。一緒に過ごして幸せだった。たくさんたくさん護ってもらった。

抱えきれないくらいに大切なものを貰った。少しでも何か返したいといつも思っていた。

出来ることがあるのならは何だってやろうと、思っていた。

ナンナ、キアラ、ゼンダ、ネーディア……優しい虫族。

「大好き」

二度と会えない大切なヒトたちのために、自分は戦おう。

祈るように願う。

願うように祈る。

迷うように望む。

望むように迷う。

泣きながら。

笑いながら。

苦しみながら。

怒りながら。

チニユは祈った。

リンカは願った。

アシトは迷う。

虫族の少女は何を祈る。

人間の少女は何を願う。

人間の少年は何を迷う。

そうして彼女たちと彼が望むのは、何？

隠そうともししていない気配に、アシトは降り立った。確かに見た目では分からないだろう場所に、チヨウの羽持つ八子の少女はいた。気配に敏感なアシトでなければ気がつかなかっただろう。ほかの者

ならば気が付かなかっただろう。

「！！」

彼を見て、少女は目を見開いた。アシトは狭い場所を見回す。捜していた人間の少女の姿はそこにはない。

「……リンカならおりませんわ」

チニユはアシトの背のカブト族の羽を見ながら、気丈に言う。彼はラクラレンを殺して羽を奪ったのだろうか。ナンナを殺したときのように。

そうして今、彼女も殺そうとしているのだろうか。

「彼女は皆を護るために戻りました。わたくしはリンカの帰りを待っているのです」

アシトは答えない。手には剣が握られている。ナンナを殺した、鉄の剣。

「わたくしはリンカが帰ってくるのを待たなくてはなりませんの。

約束しましたわ。ちゃんとリンカはわたくしを迎えに来てくださる」

チニユは震える手で、自分の胸元をおさえる。

「ですから、あなたに殺されるわけにはまいりません。あなたがわたくしを殺そうとするのなら、わたくしは抵抗いたします」

あの人間の少女は戻ってくると頷いた。大丈夫だとチニユは彼女に告げたのだから、待っていないくはならない。

「……信じているのか。彼女は人間だ。お前たち虫とは違う」

アシトの声に、チニユは今にも泣き出しそうに、それでも胸を張った。

「可哀想なヒトですわね、アシト。わたくしはリンカを待っていると言いましたわ。その言葉が、全てです。リンカのこと……大嫌いですわ。でも、帰ってくると、約束しましたもの」

可哀想なヒト。チニユもまた彼をそう思う。

「死ぬわけにはまいりません。人間に捕まるわけにもまいりません。わたくしは……リンカを待たなくてはなりませんから」

そう告げる彼女に怯えはあっても迷いはない。アシトは剣を握り

楳火の謡（ほたびのうた）

締めた。

何故だろう。虫と人間なのに。

どうしてこんなにも、彼女たちは通じ合っているのだろうか……？
そう思いながら、彼は剣を振り上げた。

四・シアワセとそうでないものの、差・1

紫色の雷光が、晴れた空から舞い降りる。青い空へ放たれる絵具のような、絶大な力。

激しく美しいその光は、嬉々として虫族たちに爆弾を投げつけていたコルガの頭上に、閃き落ちた。

「げ、が」

短く呻いて、自分の身に何が起こったのかも分からないままコルガは倒れ付し、そのまま動かなくなる。

虫族たちは空を見上げた。あの紫の雷を、自在に操れる彼女を。空に立つ、少女。

その背を見て、虫族は誰もが悲しく顔を歪ませた。

嗚呼、辛いだろう。誰よりも彼女が辛いだろう。彼女の背にあるあの羽は、彼女が大好きだったヒトの羽。

彼女を大切にし、彼女が大切にしていたヒトの羽。キアラ。

トンボ族の長。里最強の戦士。彼女の「姉」。

もういない。還らないそのヒトを想い、虫族たちは泣いた。大切なヒトの力を背負って、泣きたいだろうに、悲しいだろうに、それでも虫族たちを護ろうとしてくれる人間の少女を想って、泣いた。

ぞん。一匹の虫族の身体が断ち割れる。武器を戻してシユマリは息をついた。何匹殺してもちっとも力が手に入らない。住処らしいところにいたセミとクワガタの力は手に入ったが、ほかのはどうやら雑魚らしい。子供から大人、男女問わず殺してみたが、今だにシユマリが手に入れた力と羽はセミとクワガタの二種類だけだ。

法則がサツパリ分らない。

逃げようとしていたカブトの女を自分の武器で壁に縫いとめ、訊

いてみることにした。

「ねえ、羽虫。力ってどうやって手に入るのさ？ 何匹殺してもダメなんだよね。最初の二匹意外はぜんっぜんでさ」

カブトの女は呻いて腹を抱えている。そこには彼女の可愛い卵が詰まっているのだ。

シユマリはそこを武器で突いた。

悲鳴を上げるカブトの女。可愛い卵が死んでしまう。

「うるさいな。羽虫のクセに。いっちょまえに人間みたいに悲鳴上げるなよ。訊いてるんだけど、こっちの言葉が分からないわけ？
なあ」

シユマリが腕を振ると、女の腹が裂けて卵がこぼれ落ちた。

「きゃああああっ！！ 私の子供たちっ！！」

泣きながら悲鳴を上げる女を、シユマリはうっとおしいと言いたげに腕を振って殺してしまった。

「なんつかほんと羽虫だよな。人間様の言ってること分からないわけ？ 腹立つな」

こぼれた卵を踏みつける。靴裏にわずかな抵抗だけが伝わり、卵は潰れた。

「は、たかが虫の分際で」

どれだけ殺しても赤い血など流れていなくせに。嘲笑うようにシユマリは思っている。

彼らは虫。ただの虫。体格が人間と同じくらいに大きく、言葉を喋り、不可思議な力を持っていても、虫でしかないのだと。

あまりにも傲慢な、人間の考え方だ。

他を認めない、とても寂しくて悲しい考え方だ。いのちは確かに人間以外のものにも宿っているのに。

「殺しつくすしかないかなー。手間だなー、コルガとかどうしたんだろ？ 分担したいな……面倒だし」

呟いて、シユマリは視線を鋭くした。

瞬。

彼は立っていた場所から飛びのく。紫の光が寸前まで彼の立っていたところに炸裂した。

「うひゃ、恐い。しかもさつきより制度があがってるような気がするんですけど？」

見上げると、空から降りてくる少女の姿。髪を二つに結んで、胸にはお日様の首飾り。

可愛い人間だった女の子だ。

今、彼女の背にはトンボの羽がある。

「戻ってきてくれたんだね。まあ、あんまり友好的な態度ではないみたいけど」

笑いかけるシュマリに、地面に降り立った少女　リンカは挑むように叫ぶ。

「返して」

「？　なにを？」

「ゼンダとネーディアの羽、返して！」

シュマリは首をかしげた。リンカが何のことを言っているのかよく分からない。羽と言うことは、ひよっとして。

「えーっと、それ、セミとクワガタのこと？」

固体名などあるのかと、シュマリは不思議そうだ。

「いっちょまえに名前なんかあるわけ、あいつら？　羽虫のクセに生意気なと眉を寄せる彼に、リンカは悲しげに瞳を揺らした。

「あなたも同じなの」

あのアントキとかいう女と、この少年も同じだ。虫族たちを虫としか思っていない。

ナンナを殺したときのアシトのように。

「ちゃんと、あるのに」

名前も、いのちも、ちゃんと虫族たちにもあるのに。生きているのは人間だけではないだろうに。

「？ ナニ言ってるの？ だって、羽虫でしょ。うっとおしく飛び回ったら、叩いてつぶされる運命の、ちんけな虫だよ」

リンカは首を振った。違うと言ってもこの少年に伝わるとは思えない。彼はアシトとも違うと感じていた。アシトはナンナを殺したが、彼の瞳には戸惑いがあった。駆け込んできたリンカを見て、彼は明確に迷ったのだ。けれどこの少年やアントキと名乗った女性は虫族たちを殺すことを楽しんでた。キアラを目の前で殺されたりリンカが、あれほど取り乱したのを見ていても、少年は何も感じていないようだった。ナンナに取りすがって泣いたリンカに、何故泣くのかと訊いてきたアシトとは、違う。

心からただの虫だと思っている。顔の周りを飛んでうっとおしいから、潰しておこうかというくらいに、とても軽く彼らを殺している。

「分からないの、かわいそうだね」

リンカは言う。アシトに言ったように、少年にも可哀想だと告げる。

こんなにたくさん世界にはいのちが溢れているのに、自分たちだけと思うなんて。

あんなに優しい虫族たちを、殺してなんとも思わないなんて。

「かわいそうな、ひと」

キアラを殺された。ゼンダとネーディアも殺された。

それでも、今この少年を目の前にしてリンカが感じるのは、可哀想だという思いだ。

この言葉を聞いて、アシトはさらに戸惑っていた。

でも、目の前にいる少年はいぶかしげに眉を寄せるだけだ。後悔も罪悪感もそこにはない。

「君が何でそんなこと言うのか分かんないけど、まあいいや。僕と一緒においでよ。君、人間でしょ？」

「そうだよ」

「何でこんなところにいるの？」

「居られなかったから」

「?どこに」

「人間の里……だよ」

呟いてリンカは力を使った。閃いた雷にシユマリはあわてて身をかわす。追撃を三度ほどしてみたが、かわしきられた。ゼンダとネーディアの力を得て、少年はかなり反応速度が上がっている。人間ならば初撃でとどめになっている。コルガが倒れたように。

特にネーディアの力は戦士の長のもだから、間違いなく少年の身体能力を底上げしているだろう。リンカにもそれくらいの予測はできる。

「恐つ、恐いよ、もー、話の途中で攻撃してこなくてもいいのに……
…とここでこの雷、羽がなくても出してたよね? 何で?」

「生まれつき」

リンカは短く答える。少年を雷で捉えることは難しい。ましてこの少年はネーディアだけでなくゼンダの力も得ている。二つの長のが一人に宿るなど、聞いたことがなかった。

宿した相手が人間だからだろうか? 一種に一人の長という、虫族の理まで、人間は曲げてしまうのか。

「生まれつき? 本当に?」

へえ、と呟いてシユマリは少女を見た。生まれつきであればどの力を持つ人間がいるのか。これはぜひとも連れて帰らなくてはとシユマリは思う。人間が生まれながらにあれだけの力を持つのなら、彼女が力を持つその理由を解明できたなら、手柄になる。

もつと簡単に強くなれるかもしれない。

「やっぱり一緒に行こうよ。虫なんかと居てもいいことないでしょ。人間は人間同士でいるのが一番だよ?」

「人間の里に居ても、いいことなんかなかったよ」

リンカはぐつと腰を落として構えた。キアラがそうしていたことを、何度も見ていた。大好きな『姉』の修行を、ずっと見ていた。

力を制御するために、一緒に修行だっしてしていた。そして今、彼

楳火の謡（ほたびのうた）

「女の背には『姉』の羽がある。『姉』の力が宿っている。
虫族の皆と居るほづが……わたしはずっと幸せだった!」

四・シアワセとそうでないものの、差・2

リンカは地面を蹴った。小柄な少女の身体は風のように次の瞬間にはシユマリの目前にある。

小さな手が手刀となり、顔面をえぐるように突き出され、その速度にゾツとしながらシユマリは身をのけぞらして何とかかわす。その隙を狙って少女の左手のコブシが少年のわき腹を追撃してくる。右手の肘を落とし、肘を殴らせわき腹を防御して、シユマリは後ろに跳んだ。彼のいた場所をリンカの細い足が蹴り上げている。

一瞬で三連撃だ。

「うわ……君、強いね……」

撃たれた右肘が少しジンジンとしている。だが、固い場所を殴った彼女の手も痛いだろう。

「強いのはわたしじゃない。キアラだよ」

リンカは左のこぶしの痛みにもかまわず、もう一度構える。

悔しい。キアラならば今の一連の動作で少年を昏倒させただろう。二撃目の腹部を狙った一撃で、少年の防御など弾き飛ばしていたはずだ。

やはりリンカはキアラほど強くない。力を継承しても、キアラ個人の實力にはかなわない。

キアラは元々強かったのだ。戦いに向いていない八手族に生まれただのに、次代のトンボ族の長に選ばれるくらいに、彼女は強かったのだ。

「キアラはもっと、強かったんだ」

『虫の里』一番の戦士。でも彼女は優しかった。リンカとチニユを思い遣ったその隙を突かれてしまった。

「わたしの大好きなキアラは、もっとずっと、強かったよ!!」

ざわめく草の音を聞きながら、リンカはもう一度地面を蹴った。同時に雷をシユマリの周りに落とす。

「っ！！」

逃げ場がない。雷の強さに一瞬身を硬くする少年に、リンカは迷いなく足先を跳ね上げた。

シユマリは腕を交差させて胴体を護る。内臓に痛撃をうけたらさすがにまずい。木靴の一撃を受け、少年は吹き飛んだ。

体勢を整える間もなく、雷の追撃。まともに少年の身体を打った紫の光が消え、後には倒れている少年の姿。

リンカはシユマリの様子を窺った。動かない。死なせてしまっただろうか。一応雷は加減したけれど。

虫族たちに羽を返す前に少年に死なれてしまうのはまずいと思った。少年が死んでしまったら、力と羽は近くの者に宿ってしまう。

少年は後継など決めていないだろうし、この近くに居るのはリンカだけだ。

「ど、どうしよう。あ、う、ええと、誰か連れてこないと！ わたし、キアラのだけでいいもん」

少年のように何種も羽を持つ気は全くない。それは理を歪めたものだと思うからだ。

リンカは羽ばたこうとした。とにかく虫族の誰かを連れてこないとならない。

飛び立とうとした彼女の眼前に、紺と赤の布地が目に入る。リンカは目を見張った。

「あ、しと？」
降り立った少年の背に、羽。見慣れたその羽は、カプト族の長、

ラクラレンのもの。
「なんで？」

どうしてアシトがラクラレンの羽を持っているのだろう。
アシトは無言で手にしている剣を振った。

ぎゃりいっ！

耳障りな音がして、リンカは思わず身をすくめた。

見るとアシトは彼女に背を向けて、剣を振り切っている。

「……ありゃ、何でかばうのさ、アシト」

ぱっと倒れていた少年が起き上がる。その腕から、日の光にわずかに反射する糸のようなものが出ている。

硬質の糸、それがシュマリの武器なのだ。

「せっかくその子、僕を倒したと思っただけで油断してくれてたのに」

「……殺す気だった、のか」

「ううん。ちょっと片手を落とそうとただけ。だって、その女の子結構強いんだよ？　僕蹴られちゃったし。あれ、並みの人間だったら防げないで内臓破裂で死んでたよ」

あっけらかんと言いながら、シュマリは口元を笑わせた。

「まあ、羽虫の力で助かったってところかな？　かなりタフになっているよ、僕。羽虫も役に立つもんだね」

シュマリは言い、手を伸ばした。

「こういうことも、できるみたいだし」

背のゼンダの羽が瞬くように動く。ハツとして、リンカはアシトに飛びついた。そのまま飛び、今いた場所を離れる。

彼女が立っていた場所が陽炎のように揺らぎ、次の瞬間収縮し、音を立って弾けた。

「あれ？　彼女ひよつとして羽虫の力を熟知してるのかな。これを避けるなんて……知ってなきゃ無理だよね……？」

シュマリは離れた場所に降り立ったリンカとアシトを不思議そうに見る。ゼンダの力は空間を自在に操り、こうやってねじることもある。そこに巻き込まれたのなら確実に身体はどこかを持っているか。下手をしたら命そのものまでを。

「確かめてみようか」

楽しそうに笑ってシュマリは地面を軽く蹴った。地面のわずかな振動を感じ取って今度はアシトがリンカを片腕で抱えてその場を飛びのく。

彼らが立っていた場所から細く水が吹き上がった。水とは言って

も、高速で噴出する水は、そのまま刃になる。黙って立っていたら、リンカは身体はどこかに穴を開けられていただろう。それはネーデイアの力だ。水を自在にするクワガタ族の長の力。

「あー、アシト、かばっっちゃダメだよー。彼女のこと知ろうとしてたのにー」

「……」

アシトは黙ってリンカを腕から下ろした。

「アシト、あのひとと知り合いなの？」

「知り合いだよ」

リンカの言葉に答えたのはシュマリだ。

「同僚だもん。アシトと僕はな・か・ま。おんなじ目的で羽虫を狩りに来た仲間だよ」

にこやかに、彼は言う。

「そして、羽虫の居場所を僕らに教えてくれたのもアシトだよ」

正確には彼の体内の発信機が教えてくれたわけだが。

「……そう」

リンカは少しだけうつむいてそう言った。

「ねえアシトー。その子と仲良しなの？ 連れて行こうよ。絶対大手柄だつて。生まれつきに力を持つてるんだよ？ すごい化け物じゃないか」

化け物。

リンカの細い肩がピクリと動く。

「僕らだつていい加減化け物みたいだけどさ、彼女は上に行くよね。うん。連れて行こうよ。羽虫の力のことも知ってるみたいだし。ほらー、拘束してよ、アシト」

「……おんなじなの？」

リンカは呟き、アシトを見上げた。リンカよりちよつとだけ背の高い少年は、無表情で彼女を見下ろしている。彼もまた、リンカを

迫害する人間なのだろうか。さつき彼女を護ってくれたこの少年は、彼女の敵なのだろうか。

「違うね……アシトは、違うよ」

リンカは首を振った。

夕焼けの色の瞳が、戸惑いに揺れている。彼もどうしたらいいのかわからないのだろう。

昏いものを宿していた少年の瞳は、今は夕焼けの色に染まっている。

「アシトの目には、お日様がいるもん」

リンカの胸元で輝く、お日様の首飾り。あの日キアラとナンナと見た光。ずっと昏い目をしていたアシトは、ようやく日の光が当たる場所に立ったのだろうか。

彼を導いたのはリンカであり、ナンナであり、キアラであり、口ゼツタであり、ラクラレンだった。

彼を『虫の里』に連れてきたリンカ、彼に殺され、恨まずに死んでいったナンナ、親友を殺した彼を許したキアラ、彼の心を揺らした口ゼツタ、彼に力を託したラクラレン……。

今、アシトの前で生きているのはリンカだけだ。

死んでしまった虫族たちは、皆リンカを大切に想っていただろう。彼女の死を、誰も望んでいないだろう。

あの子だけは逃がしてあげて。

リンカだけは逃がしてやってくれ。

あの子は……お前と同じ、人間なんだ……。

少年の脳裏に宿るのは、虫族たちの言葉。願い。想い……。

アシトは首を振る。どうしたら、いい？

「……信じるのか、おれを。お前の姉を殺したのは、おれだぞ」

「ナンナだよ。わたしの大好きなお姉ちゃん。でも、ナンナはアシ

トを許したよ……」

「アシトー、早く捕まえてよー。僕がやっちゃっぞー？」
シユマリが声を上げる。

可愛い妹……生きて欲しいわ。

微笑が、彼女の言葉がアシトの脳裏に蘇る。

生きて欲しいと願っている。

彼女の羽根を持った少女が、アシトの顔を見上げている。彼女とよく似た紫の瞳。そこに宿る優しさだけは、いつも揺らがない。

少年に少女を頼むと願いを託した彼女たち。

アシトは剣を握り締めた。

やるべきことは虫の力を得ることだった。

けれど、出来ることはなんなのか。悩んで考えて、リンカの瞳を見た瞬間、自分の心はどうしたいと言っているのか、やっと分かったような気がする。

彼はリンカに背を向けて、シユマリに向けて剣を構えた。

ラクラレンの力と羽に毒されたのかもしれない。それでもいい。

護りたいと、想ったから。

四・シアワセとそうでないものの、差・2（後書き）

ようやく、決意できた彼。最初から、決意していた彼女。守るために、二人は戦います。

四・シアワセとそうでないものの、差・3

「あ、あれ？ アシト？ あららら、なに、その子に惚れちゃったとか？ 人間兵器のアシトくんが！？ 僕らの中で一番！ 無口無表情でおっかない君が！？ うっわー、珍しいこともあるもんだねー」

シユマリは心の底から驚いているようだった。

「でもさ、僕に剣向けることないんじゃないの？ その子連れて行くって言うてるのに」

「……研究所へか？ おれたちのように、実験動物と変わらない扱いを受けさせるためにか」

無表情のままアシトが言うと、シユマリは器用に片眉をはね上げた。た。

「……ふうん……本気なんだ。それはまずいよアシト。僕、君のと処断しなくちゃならなくなるけど……」

アシトはかまわず踏み込み、剣を振るう。上方から叩き込まれるように振るわれた剣を、シユマリはかわしてアシトに向かって腕を突き出そうとした。黙って見ているアシトではない。糸が放たれる前にシユマリの肩をコブシで痛打する。

まともに喰らったシユマリは顔をしかめもせずそのまま腕を振った。ごくわずかな空気を切る音。糸はアシトの腹を貫き、内臓をかき回す、はずだった。

リンカが飛び込んできてシユマリの横腹に蹴りを入れようとしたければ。

「っち！」

さすがに舌打ちしてシユマリは腕を下げた。リンカの足を肘で払い、もう一方の手で糸を放ちアシトの剣を牽制して距離をとる。

「……めっちゃめっちゃ卑怯じゃない？ 二人がかりって。アシトも強いの、そっちの子も強いしさ……」

ばやいているのではない。シユマリは楽しそうだ。二人がかりの猛攻も捌き切ってしまった。やはり長二人分の力は伊達ではない。「なんかさー、息ぴったりだし。なに？ 君ら、夫婦？ 仲良すぎ。腹立つな」

シユマリの声を無視して、アシトはリンカに囁く。

「あいつは金属の糸を腕に仕込んでいる。一度放たれたらおれはともかくお前の目で見るのは難しい。かわすのも至難だ。放てないよ。うにするしかない」

「うん、分かった。あのね、ゼンダは空間をねじったりできるの。それで身体をちぎったりも簡単だから、ゼンダの羽が動いたらその場にいちやダメ。とにかく動いて避けて。ネーディアは水を簡単に操るよ。溺れさせたり、さっきやったみたいに水で刃を作ったりもできるの。周りがすごく湿気てきたら逃げて。場所を移動すれば避けられるから」

「……分かった」

素早く情報交換をする。アシトはシユマリの武器を、リンカはシユマリが手に入れた長たちの力を。

本当なら、こんな使い方をされる力ではない。ゼンダは空間をいじる力を滅多に使わなかった。それこそ巣作りの八手族が巣を作るときに、どうしても壊せない岩があったときくらいしか力を使ったことはなかった。

ネーディアも力を使うのは水場を造るときだけだった。乾期になって、どうしても雨が降らないときだけ、水を呼び出していた。

リンカは自分の雷の力を制御するために、彼らからこういう使い方もできるよと教わっていただけの話だ。強く恐い力だけれど、ようは使い方だからねと、優しい虫族たちは教えてくれたのだ。

どれだけ強い力でも、使うヒトの心次第だと、教えてくれたゼンダはもういない。

彼の羽はシユマリの背中にある。

恐がることはないわ、リンカは大丈夫よと、笑ってくれたネーデ

イアももういない。

彼女の羽もシユマリの背だ。

「うわ、腹立つな！。なんかほんとに息びったりすぎ！。でも、そっちの子やっぱり羽虫の力に詳しいみたいだね……一緒に来てもらうよ、絶対にね！！」

「行かないよ。返してもらってから」

今度は逆にシユマリが踏み込んできた。彼の背でゼンダの羽が動いている。

アシトとリンカはその場を飛びのいた。そのまま左右からシユマリを迎撃に移る。

「こういう使い方は、どうかなっ？」

空間が歪む。それは左から来るリンカの背後、地面を爆発させて土を吹き上げる。

降り注ぐ土砂に、リンカはハツとしたが、そのまま地面を蹴った。背でキアラの羽が羽ばたき、小柄な彼女の姿は瞬間で土砂から逃れる。

シユマリから離れてしまったが、汚れひとつない。

少女の視界で少年たちが激突していた。シユマリの糸をアシトは切り払い、地面の土を蹴り上げ、シユマリの視界を奪おうとし、シユマリは顔に向かってくる土を地面に滑り込むようにして避け、アシトの足元を狙って糸を巻きつけようとする。

一旦糸が巻き付けばそこから切断することなどシユマリには一瞬だ。四肢のどこかを失えばアシトは無力化される。

それを理解しているアシトも、簡単に足を取られたりしない。前傾姿勢になり、転がるようにして糸をかわし、シユマリに剣を突きたてようとする。

首を狙われてシユマリは転がって避けた。

二人はすぐさま起き上がり、跳ねのいて距離をとった。

「くー、アシト、恐い！。容赦なく首狙う？。同僚だよ、僕」

躊躇なく同僚の四肢を切り落とそうとしておいて、シユマリはそ

んなことを言い放つ。

そこをリンカが飛びながら追撃した。勢いに乗った蹴りはシユマリのガードを弾き飛ばす。リンカは空中でぐるりと回転して、その勢いのまま少年の首筋を狙って手刀を繰り出した。

顎にでもかすれば脳震盪を起こすだろう。のけぞってかわしながら、シユマリはリンカの足首を掴んだ。少年の視界にはリンカのフオローに入ろうとしているアシトがいる。そのまま彼に向かって少女を投げ飛ばしてやろうとした。

リンカは即座に自分の足首を掴んでいる少年の手首をもう一方の足で蹴りつけ、自由を取り戻すなりその足でシユマリの脳天にかかとを落とす。

背後に飛んでかわしてのけ、シユマリは地面を足で擦った。剣を振るおうとしていたアシトが飛びのく。一瞬前に彼がいた地面から幾筋もの水が音を立てて突きあがった。

「ちえっ、全身穴だらけにしてやろうと思ったのに」
三度距離をとり、三人は向かい合う。シユマリは楽しそうにリンカに言った。

「反応いいね、君。いろいろと改造されてる僕らについてくるなんて。羽のせいなのかな、それとも、それも生まれつき？」

「かいぞう？」

何のこと、とリンカは不思議そうだ。リンカが強いのはひとえにキアラとの修行の結果だし、アシトとこの少年が強いのは、羽を得ているからかと思っていたが。

「そう、改造。僕はあちこち機械が埋め込まれてて、アシトはいろんな薬を飲まされて、手術もされてる。ま、人間やめたって感じかな。長生きも出来ないみたいだし」

シユマリの言葉に、リンカは瞳を見開いた。

「なんでそんなことするの」

生まれ持った身体を、どうして不自然に変えてしまうのか。そんなことをして、一体どうするつもりなのか。

「さてね。僕は強くなりたかったから志願したクチだけど。アシトはどうなのかな？ 国の兵器として生きてみたかったとか？ それもカッコイイよねー」

アシトは答えない。答えないまま踏み込んだ。シユマリと会話を交わす気はないらしい。

ぎっぎっぎっ！ 糸と剣がぶつかり合う音。

シユマリは楽しそうに、アシトは無表情に、対のような表情で少年たちは己の武器をぶつけ合っている。

決定打が出ないのは、シユマリが強いからだ。ゼンダとネーディアの力を得ているからだ。

これがどちらか一種の力だけならばすでに決着は付いていただろう。

あと少しが届かない。リンカは飛びながら少年たちの動きを目で追う。

キアラ、どうしたらいいかな？ リンカは心で問いかける。

雷の力を使えばアシトを巻き込む。彼を巻き込まないで力を使う方法はあるか。

「……キアラ」

呟いたリンカの脳裏に走るもの。

滝を切り裂く『姉』の姿。それはトンボ族の長である彼女の力。

リンカの周りで風が渦を巻く。

「できる、かな」

雷のようにうまく使える自信はない。でも、これはキアラが持っていた力だから、出来るような気がする。

リンカは腰を落としてかまえる。キアラがそうしていたように。

シユマリは遠い。アシトが押されているのが見える。四方から襲ってくる糸が、彼の逃げ場を奪い、避ける場所をなくしている。シユマリは笑った。連れて帰ると決めたリンカ以外を助けるつもりな

どない。たとえそれが元同僚でも。

彼は、今は敵なのだから。

ネーディアの力が発動する。

「死んじゃえ、アシト！」

叫んだ瞬間、シユマリは吹き飛んだ。空中で体勢を立て直し、なんとか立つが、腹部を大きなコブシで殴られたような衝撃に、思わず膝をつく。

げほつと血を吐いた。改造された身体は痛覚が薄いので痛みに阻害されることはないが、さすがに腹部に違和感がある。

「なに、したのさ」

見るのは、こちらに手を突き出しているリンカ。あれだけ離れた場所から、彼女は一体何をしたのだろう。

「キアラの力だよ」

少女は言い、祈るように両手を重ねた。その背で、羽がふわりと広がる。

「あなたが殺した、わたしのお姉ちゃんの力だよ」

轟っ！！

シユマリの足元から、猛烈な勢いで風が吹き上がる。瞬く間に渦を巻いた風はシユマリの身体を捕らえて離さないまま、宙に吹き上げた。

四・シアワセとそうでないものの、差・4

なんとか二種類の羽を羽ばたかせ、風から逃れようとするシユマリの身体の下で、アシトが竜巻に手を伸ばす。

巻き込まれる寸前で、彼は手を止めた。

「シユマリ」

もがく同僚に、彼も声をかける。

シユマリの糸で、顔の半分と腕を切り取られていたラクラレン。

半分死に掛けている身体で、それでも仲間を、リンカを心配していたカブトの長。

アシトはその力を受け取った。彼の腕に、巻きつくように炎が上がる。

「お前が殺した、カブトの力だ」

炎が、風に絡みつく。

違う力なのに、持ち主の意思に応えるように、二種の力は互いに支えあいながら吹き上がり、絡み合っていく。

透明な風を、赤とオレンジの炎が支えるように噴きあがった。

蛇のようにうねる力が、シユマリを銜え込んだ。

「っああああああっ！！！！」

身体を焼く熱さに絶叫し、シユマリはそれでも振り払うように意識を集中、ゼンダの力を使って強引に風を阻む。それは根元にいたアシトを巻き込むように発動したので、察知したアシトも飛び離れ、炎も消えてしまった。

シユマリは地面に下りる。彼の背のクワガタの羽が焼け焦げ、風に引きちぎられて見る影もなくなっていた。

セミの羽も焦げて千切れかかっている。

「くっそ……やってくれたね。痛いよ……羽虫の羽のクセに、痛みもありやがる……最悪だ……身体は痛くないのに……」

長いこと忘れていた明確な痛みの感覚に、シユマリは顔をしかめ

ている。

「羽、かえして」

リンカはまっすぐにシユマリを見て言う。

「いやだよ」

シユマリはにやりと笑ってリンカを見た。腕をだらりとたらしただま。

指先がほんのわずかだけ、ピクリとする。

「！」

察知できたのは、培^{つちか}ってきた勘と言うしかない。アシトは咄嗟に飛んでリンカを突き飛ばした。

わずかに地面が盛り上がり、そこから飛び出したのは硬質の糸。目で捉えることも難しいような極細の金属の糸が、アシトの左肩を貫いた。

「腕、もらった！」

シユマリが叫び、ぐっと腕を引く。

ぶつん。

嫌な音が、した。

リンカは口元を覆った。ぼたぼたと落ちるのは真っ赤な血だ。

「アシトっ！！」

少年の肩からは大量の血が流れ落ちている。肩の肉が半分近く切り裂かれ、左腕がぶらりと力なく垂れ下がっている。

咄嗟に糸を剣で跳ね上げ、腕を落とされるのは防いだものの、傷は深く左腕は使い物にならないだろう。

「あーらら、失敗！。肩から先落としてやるつもりだったのに……アシト、反応良すぎだよ。でもやっぱりその子かばったか。はは、予想通り」

シユマリはアシトの行動を予想してリンカを狙ったのだ。リンカもアシトをかばうようにして戦っていたが、アシトがリンカをかばう確率のほぅが高いと見越していた。

アシトはシユマリの性格と実力を知っているからだ。

「神経やられたでしょ？ あはは、腕使い物にならないよね？ 五体満足、その上二人がかりでも僕にかなわなかったのに、左腕使えない状態でどうやって勝つつもりかな？」

シユマリの哄笑を受けながら、アシトは立ち上がった。右腕の剣を構える。

「アシト、動いちゃダメだよ！」

止めるリンカに小さく言う。

「逃げる」

「え」

「おれが引き付ける。逃げる」

勝ち目がなくなった。アシトはそう判断している。五体満足でもこちらの攻撃を捌ききったシユマリを、この状態で倒すのは無理だ。出血が止まらない。遠からず動けなくなるだろう。いくら投薬で身体能力を上げているからといって、この出血で死なずにいるのは無理な話だ。

だから、リンカだけは逃がそうと思った。カブトの力もシユマリに奪われるだろうが、リンカが殺されるよりはいい。彼女が連れて行かれるよりはいい。

なにより、虫族の誰もが彼女の幸せを望んでいる。彼女が生きること望んでいる。

「お前の姉たちに頼まれている。お前だけは逃がしてやってくれとだから、逃がす。逃げる」

シユマリを睨みつけながら、少年は言う。

リンカの返事を待たずに駆け出した。傷を負っているとは思えない速さだ。アシトもまた改造を受けている身、痛みは薄い。刻々と出血し続け、さすがに身体に寒気が走ってはいるが、まだ動ける。動けるうちは戦える。

「うわ、アシト、カッコイイ。そんなに惚れてるの？ まあ、確か

にあの子可愛いけどさ」

シユマリは笑いながらアシトの攻撃を捌いている。攻撃してくるつもりがないようだ。手負いのアシトが力尽きるのを待っているようにも思えた。

「カツコイいなあ、彼女をかばって死ぬつもり？ あはは、でも、彼女のほうは逃げる気ないみたいだよ？」

シユマリが言った瞬間、リンカの身体がアシトの視界に飛び込んできた。

「！」

彼女は迷いなくシユマリに蹴りを叩き込み、背の羽で飛びながら手刀、コブシで連撃を加える。空中で舞い踊るような動きだ。シユマリはそれらを全て捌ききったが、さすがにアシトから気が逸れた。彼女が狙っていたのはそれだけだ。すぐさまアシトに抱きついて羽ばたき、シユマリから距離をとる。

「おい……！」

止めようとしたアシトを、地面に降ろしてリンカはシユマリに向き直った。

「アシトのばか。きらい」

背を向けて眩き、彼女はシユマリに走っていく。アシトは啞然。逃げろと言ったのに、何故逃げない？

「あっはっは、アシト、立場ないねー。ねえ君、僕と一緒に来てくれる気になったの？」

「ならないよ！」

叫んでリンカは手刀を打ち込もうとする。シユマリは首を傾けてかわし、お返しとばかりにリンカの腹にコブシを叩き込もうとする。身体を反転させてかわしながら少女は裏拳をシユマリの背中に打ちつけようとし、二つに分けた髪の毛の片方を掴まれた。

「捕まえたー。髪の毛長いと、こういうとき不利だよね」

リンカはひるまない。すぐさま足を上げてかかどでシユマリのす

ねを蹴った。足を上げて余裕でかわす少年に、地面を両足で蹴り上げ、髪が抜けるのもかまわず宙で回転し、膝で頭を狙う。

「おわっ！」

さすがに距離をとるシユマリは、リンカの動きにあきれたようだった。彼女の髪は片方ほどけて、可愛らしい顔には血が流れている。頭皮が裂けたのだ。

「大技だなー。あーあ、けっこう髪抜けちゃったよ？ 痛かったでしょ。血が出てるよ。綺麗な髪してるのに、執着ないの？ 女の子の命でしょ」

羽で滞空している彼女に、にんまりとする。

そこに、アシトが駆け込んできた。

「もー、邪魔だよアシト、黙って死んでて。今、僕、彼女と話して」

四・シアワセとそうでないものの、差・5

シユマリは目を見張った。アシトの肩の傷が消えている。服は出血の痕跡を残しているものの、切れ目から見えるのは傷どころか跡すらない肌だ。

「え」

動揺が、隙を生んだ。

一瞬の隙を逃さず、両手で構えた剣を、アシトが突き出す。

鈍色にびいろに光る剣先が、シユマリのわき腹を削いだ。鮮血が飛び散る。

「っっ」

すぐさまシユマリは糸を放ったが、アシトはもうそこにはいない。宙のリンカを抱えて、脱兎のごとく飛んで距離をとる。

かなり離れてようやく彼女を地面に降ろした。

目を真ん丸くしている彼女に、声がかかる。

「なんて無茶をなさっているの!!」

リンカはさらに目を見開いた。

「何でいるの、チニユ!!」

草むらに立っているのは、チヨウ族の長、隠れているようにと言っておいたチニユだ。

彼女がアシトの傷を治したのだろう。

チニユは柳眉を逆立ててリンカの頭に触れた。

細い手から淡い光が漏れる。癒しの光、チヨウ族の力だ。リンカの頭部の傷が瞬く間に消える。彼女の顔に流れた血を、拭ってやって、

「わたくしもわたくしなりに戦うことにいたしましたの。戦士の力は弱くても、できることはありませんわ」

泣き出しそうに、チニユは微笑む。

「あなただけに戦わせるのは、わたくしイヤですわ。リンカひとりにかっこいい真似はさせませんわよ」

隠れていたところをアシトに見つかった彼女は、自分が殺されると思っただけで、彼は振り下ろした剣を岸壁に叩きつけただけだった。出来ない、何故だと呻く彼に、リンカを助けてやって欲しいと訴えた。

あなたと同じ人間なのだから、彼女だけでも助けてはくれないかと。

彼は苦く呻いた。どうして誰も彼も同じことを言うのだと。

大切だからです、とチニユは答えた。大切な相手を助けて欲しいと願うのは、とても自然なことでしょうと。

苦い表情のまま立ち去った彼に、チニユは考えたのだ。ここでこうしてリンカを待つと約束したけれど、もし、彼女が危ない目にあっていたら。

キアラのように、ナンナのように二度と戻ってこなかったら。

待つと約束した。でも。

彼女だけに戦わせていいのかと。

自分に出来ることはないのかと。

「あ、危ないって言ったでしょ！！ 隠れててって言ったでしょ！！」

「言われましたし一度は約束しましたわ。でもイヤです」

チニユはしれつと言いなながら安堵していた。来て良かった。彼女が来なかったらアシトは死んでいただろう。リンカは怪我を負い、連れて行かれたかもしれない。

「大っ嫌いなあなたの言うことなんて聞いてあげませんわ
来て良かった。」

失わないで済んだ……！

「もーっ！ ばかつ、チニユきらいっ！」

「わたくしだつてあなたなんか大嫌いですわっ」

真正面から、虫族と人間の少女は睨み合い、同時に顔を逸らした。
「……仲、いいのか？ 悪いのか？」

アシトは不思議そうだ。チニユは必死にリンカを助けると言っていた。リンカもチニユを護るためにあの岸壁に避難させたのだろうが、何故ケンカするのか彼には分からない。

「悪いのっ」

「悪いんですわっ」

声を揃えて彼女たちは言い、リンカはブンブンと腕を振った。

「チニユのばかつ！ 危ないのに！！」

「リンカこそ無茶しすぎなんですわっ！！」

チニユは言い返す。

言い争う少女たちを困惑して見ていたアシトが、ハツとして彼女たちを抱えて飛びのいた。彼女たちが立っていた場所を、糸が薙いでいく。ぼうつとしていたら身体が両断されていた……キアラのように。

ゾツとしながらリンカはアシトの腕から下りた。そうだ、シユマリはまだいるのだ。

チニユを護らないと。アシトと二人で、シユマリを倒さないと。シユマリはわき腹に傷を負い、血まみれになりながら、それでも揺らぐことなく立っていた。薄笑いを浮かべたまま。

あの傷で、それでも笑うのか。身体を焼かれ、羽は傷ついているというのに。

「……あの方……本当に人間ですの……？」

アシトとリンカにかばわれて、チニユは怯えている。壮絶なシユマリの様子は鬼気迫るものだった。

「……腹立つなあ……なんだよお前ら……腹立つなあ……羽虫のクセに……アシトのクセに、なんでそんなに幸せそうなんだ……？」

シユマリはリンカを見た。ただの虫のクセに幸せそうなチヨウの女。自分と変わらない、ただの兵器だったはずのアシトも、彼女に接するときはどこか普通の人間のようになっている。彼が変わったのは。

「……君のせいなのかな……？ 君といると幸せになれるのかな？」

そうだ、あのトンボの女だって彼女をとても気にしていた。

生まれながらに力を持つ彼女は、至宝の存在なのだろうか。

ならば、是が非でも。

「君を、ちょうだい？ 僕も幸せにしてよ」

彼女を奪ってやろう。チヨウの女から、アシトから。

この奪った羽虫の力で、彼女以外を薙ぎ払って、彼女を手にいれよう……！！

シユマリは渾身の意思をこめて力を練り上げる。二種の力を同時に行使すれば、いかにアシトでも避けられまい。それと同時にチヨウの女も殺す。チヨウの女の癒しの力が手に入れば、こんな傷だつてすぐ治せるだろう。

残すのは、リンカ、彼女だけでいい。

糸を放った。アシトが剣で捌く隙を狙い、力を練り上げる。

さあ、奪ってやる……！！

瞬間、だった。

血が吹き出る。

「……っ……！！」

チニユが声にならない声を上げて口元を覆った。リンカも目を見開いている。

「シユマリ……？」

アシトは思わず元同僚の名を呼んだ。

「あ、れ……？ 何で……？」

はじけたのは、シユマリの身体のほうがだった。最初に太腿がはじ

けとび、少年は為す術もなく地面に倒れる。次は、肩。
地面はみるみるシュマリの血を吸った。草花が真紅に塗り替えられる。

「何で？」

シュマリにも分かっていないようだった。だが、少年の身体は確実に壊れていく。シュマリが死に直行していることは誰の目にも明らかだった。

倒れた彼の背で、二種類の羽がボロリと崩れるのを見たとき、リンカは声を上げた。

「羽……！ 力のせいだ……ふたつも持つちゃったから……！」

一種に一人の虫族の力。一人にひとつずつ。それが理。

シュマリはそれを知らなかった。知らずにふたつ宿した。更なる力を求め、二種の力を同時に行使しようとした。しかも傷ついた身体で。

理を破る力に、身体が保たなかったのだ。

「自然に……逆らうようなことを……したからですね……」

リンカと同じように理解したチニユが、痛ましそうにシュマリを見る。

「可哀想な、方……」

「羽虫の……クセに……生意気な、ことを……」

シュマリはなおも言う。決してチニユを、虫族を認めようとはしないまま。

「シュマリ」

アシトは元同僚を見下ろした。今はなんとなく、本当に少しだけ、リンカとチニユの言うことが理解できるよう気がする。

「お前もおれも、哀れだな……」

「は、はは……普通の人間みたいなこと……言ってるよ……馬鹿じゃない……？」

笑うシュマリの首が裂けた。鮮血に濡れながら、少年はアシトを嘲笑う。

「アシトだって……僕と同じだったクセに……は、ははは、化け物じゃないか……人間のフリ、したって……遅いよ……？」

無力感のようなものを感じて、アシトは頷く。身体改造を受けたことは、どうしても変わらない現実だ。

「そう、だな」

「先に、行ってるから……はは、幸せになんて、なれないよ？ 僕らは、化け物……兵器、だ……！！」

断じて、シユマリは事切れた。

最後まで、人間以外を認めなかった少年の、なんとも惨い終わりだった。

彼の身体から光がふたつ、舞い上がる。後継を決めていない力が、宿る相手を探している。

それはくるくると回りながらリンカとアシト、チニユの周りを漂っている。

暖かい光だった。シユマリのような使い方をされていい力ではないと、今のアシトには思える。

リンカがそつと手を伸ばした。継承するのではない。そんなつもりはない。自分にはキアラの力だけで充分だ。チニユにもアシトにもそんなつもりはないと、分かっている。

「少しだけ待って。皆を呼んでくるよ。お願い、待っていてね」

光は彼女の声に答えるように、穏やかに留まっている……。

長で生き残ったのは、ハチ族のターネルだけだった。

ゼンダもネーディアもラクラレンもキアラも……還らない。

チニユが大きく手を広げて謳う。

並べられているのは人間に殺された虫族の遺体だ。

チニユの唄声が響き、癒しの力が満ちていく。集う光が一気に高まり、破裂したように収まった。あとには、身体も癒え、生き返っ

た虫族たち。

きよとんとして起き上がった彼らは、チニユの悲しそうな笑顔を見て、状況を察した。

たくさんの虫族が殺され、チニユの力で生き返ったが、長たちだけは戻らない……。

漂っていたゼンダとネーディアの力は、ゼンダと同じセミ族のリュリュ、ネーディアと同じクワガタ族のマギウスが継いだ。

近くにいたリンカやアシト、チニユに宿らなかったのは、きっとゼンダたちが止めたのだらうとターネルは言った。

彼女たちがシュマリのようになることを防いでくれたのだらうと。優しい虫族たちの、想いの、奇跡。

埋葬される長たちを見ながら、アシトはターネルに言った。「……力を返したい。どうすればいい」

ラクラレンから受け取った羽と力。それを持ち帰るつもりは、もうない。

「方法はないよ。お前が死ぬまでは」
「……死ねばいいのか」

「そうだ。でも、自分で死ぬのはダメだよ」
ターネルは優しく止めた。アシトは今にも自分の剣で自分の喉を突きそうだったからだ。

「ラクラレンはお前に力を託した。だから自分で死ぬのはダメだよ。精一杯生きて、お前に寿命が来て、それからなら皆誇って喜んで力を継いでくれるだらうがね。今お前が自分で死んだら、皆悲しむよ。リンカも、泣くよ。ナンナもキアラもいなくなってしまったから」

悲しげに、それでも優しくターネルは語り掛ける。「命が要らないと言うのなら、リンカのために生きておやり」
アシトはうつむいた。

優しい虫族。彼らの心。
キアラの声が蘇る。

「ここは、誰かを裁くところではないよ……。」

「リンカの、ために……生きる？」

アシトは胸元を押さえた。自分に埋め込まれた発信機は、まだ生きているだろう。襲ってきたコルガたちのものはアシトが抉り出して壊した。だが、アシトの中の物はまだ生きているだろう。壊れかけているはずだが、また同じことが起こる可能性がある。

再び虫族たちが襲われるかもしれない。

彼らは里の場所を変えろと言った。一度人間に場所を知られてしまったから、同じ場所には住めないと。

再びの悲劇を防ぐために、彼らは移動する。

アシトがそこについていくことは、出来ない。

人間が彼らの力をあきらめない限りは。

彼は視線をずらした。そこには彼に日の光を与えた少女がいる。

静かに涙を流しながら、永遠に眠る『姉』の周りに花を添えている。その背には、トンボ族の羽がある。

力を継いだ、彼女。次に襲われるとすれば、彼女も標的になるだろう。

それだけは。

「……させない」

生きて欲しいと祈るように死んだナンナ。生きて欲しいと願うように死んだキアラ。

生きて欲しいと望みながら死んだラクラレン。

アシトは誓う。

彼は兵器だ。人間の形をした兵器だ。ならば。

「……護る、よ」

彼女たちが祈ったように、願ったように、望んだように、リンカを護ろう。

アシトに迷いはもはやない。

自分は兵器だ。だが、彼女を護ることはできる……！

楳火の謡（ほたびのうた）

翌日、『虫の里』から、少年は姿を消した。

楳火の謡（ほたびのうた）

四・シアワセとそうでないものの、差・5（後書き）

次回、完結です。

終・檜火の謡

焚き火のようなぬくもりを。

灯火のような導きを。

絶望を拭い去る光を。

半年後。

少年は一人、立っている。ボロきれのようなマントをまとい、刃の欠けた鉄の剣を握り締めて、立っている。

片腕はとうにない。片目もない。全身がボロボロだ。それでも彼は立っている。

向かう先は、最後の場所。

大きな建物。そこで最後だ。ここさえ失くせば、ここにいる重要人物さえいなくなれば、あの樂園のような優しい場所は護られる。

『虫の里』。そこにいる彼女も護られる。

背のカブトの羽はかなり前にちぎれ、今はもう空を飛ぶことは出来ない。投薬と手術で改造された身体はこの半年の戦いでそろそろ限界だろう。

だが、これで最後だ。

「……リンカ」

少年……アシトは彼女の名を呟く。彼女は幸せでいるだろう。きっと、今も笑って過ごしているだろう。

脳裏に宿るのは、あのとときのナンナと、その後のキアラ。そしてラクラレン。

「護る、よ……」

警戒音が響く。少年は地面を蹴った。これで最後だ。最後だから、

もう少しだけ力を貸して欲しい。祈るように虫族たちに願う。

少年の身体を炎が包む。壁の上から放たれた弾丸は、全てその炎に溶かされた。

硬く閉ざされた鉄の門に、彼は剣を振るった。白い炎が放たれ、一瞬で鉄の門は消え失せる。

アシトは迷わず溶けた門を飛び越えた。壁の内側は広く、庭のようになつており……そこには数限りない兵士がいる。

彼がここへ来ることは見越されていたのだろう。この半年の行動を見ればすぐに理解できることだから、警戒されていることくらいは予測はしている。

アシトは完全に包囲されていた。向けられている銃口は、無数にあり、その中のいくつかはただの銃ではない。アシトはそれを見取ってわずかに顔をしかめた。

鉄の弾丸ではなく、光を放つものだ。まだ実用化されるレベルではないはずなのに、アシトを恐れて使うつもりだ。いつ暴発するかも分からないのに。

それだけここにいる人物はアシトを恐れているということ、向こうにも後がないということでもある。

撃て！

声が出た。いくらアシトでも、光はかわせない。

瞬。

「……！？」

紫の光が、放たれた光を歪めて消した。

見覚えのある光　雷に、少年は目を見開く。

今、何が起きた？

雷が収まる。

ふたつの人影が見える。

それぞれの背には羽。

チヨウと……トンボ。

ふたつに結んだ紫がかつた髪が。

その胸元にあるお日様の首飾りが。

確かに、彼女で。

「何故……」

思わず呟く彼に、彼女は輝くような表情で告げた。

「見つけた、アシト！」

言ってから、少年の様子に目を見張る。

「うわあ！ なにその怪我っ!？」

「ほら見なさい！ やっぱりわたくしがついてきて正解でしたわね

!」

胸を張るのは、チヨウの羽持つ少女、チニユ。

「うー、早く治してあげて、チニユ」

「言われなくとも治しますわ。あなたはあの辺の人間をどうにかしてくださいますっ」

「言われなくてもどうにかするよっ」

仲が良いのか悪いのか分からない会話もそのまま。

走り寄ってくるチニユは、彼の体に手を触れる。

瞬。

温かい光が身体を満たし、失った腕も目も、背の羽もが瞬間で元に戻る。激しい戦いで弱った身体すら綺麗に癒してのけ、傷跡すら残さない、優しくして強い力。

「何故、ここにいる!？」

アシトは思わず声を上げてチニユの肩を掴んだ。

彼女はチヨウの姫長。

命すら蘇らせる癒しの姫だ。こんなところにおいていい存在ではなく、それはもう一人の少女にも言えることだ。

「何故って、見たでしょう？ リンカの力ですわ。彼女、どうも限界まで練り上げた雷の力なら、空間を飛び越えることが出来るようです。わたくしたちの里に来た発端も、雷の力で山の上に移動したからのようですわよ。昔の話ですけれど」

リンカは目にも留まらぬ速さで次々と兵士たちを倒していく。彼女を狙って弾丸が飛ぶが、どれもが届かないまま少女に打ち倒されていく。

「そういう意味じゃない！ お前たちは長になったんだらう！？ 何故あの里を出て、ここにいる！？」

チニユは焦るアシトに、可愛らしくにこやかに微笑みかけ、それから少年の頬を打った。

ばしん。アシトの頬に手形が残る。

少年の目が点になっていた。

「その言葉、そっくりそのままお返しいたしますわ。あなたも今は長ですよ」

少年が背負ったカブト族の羽。長であることを示すもの。

「全くもつ……後継もお決めにならないまま里を出て行かれても困りますわ。リンカはアシトがいないと泣き出すし……この半年、ほんとうにわたくしもリンカも困りましたわ」

先ほどまでの微笑を消し、半眼になり、チニユはアシトを見ている。彼女は、怒っている。

「里の者も皆あなたを心配していましたの。お分かり？」

「……おれ、を？」

アシトが出て行ったことで、里の者は心配したのか。

アシトが出て行ったことで、彼女たちは困ったのか。

アシトが出て行ったことで、リンカは泣いたのか……？

「そうですね。半年かかってようやく雷の力で自由に移動できるよ
うになりましたのよ。それはもう、リンカはがんばったんですわ。
一言もなく出て行ったあなたを捜すために　あなたを迎えに行く
ために」

アシトは視線を向けた。強く雷が炸裂し、風が舞い上がり、その
中を彼女は飛び回っている。

半年。アシトと同じように彼女もずいぶんと力を使いこなせるよ
うになったようだ。

兵士は彼女一人の行動で全てが打ち倒された。

舞い戻ってきた彼女、リンカはアシトの眼前に降り立ち、やった
ことはチニユと一緒にだった。

ばしん。もう片方のアシトの頬に手形が残る。

「アシトのばかっ！　きらいっ！」

言うてから、唾然としている少年を見上げる。

「すぐくすぐく心配したんだよっ！！　怒ってるんだからね！！」

「そうですね、もっと言うておやりなさい」

「黙って行っちゃって、どうしてるのか皆皆心配してたんだよっ！
！」

「その通りですわ。もっと言うてもよろしいですわよリンカ」

「ナンナやキアラみたいに……ゼンダやネーディアやラクラレンみ
たいに……アシトも帰ってこないのかと思って、心配、したんだよ

……？」

リンカの瞳が見る間に潤む。

「う、あ」

呻いてアシトはチニユを見た。助けってくれと目が言っているが、
チニユはそ知らぬフリでそっぽを向いている。

アシトはどうしたら良いのか分からない。どうしてこんなことにな
ったのかも分からない。

リンカを護りたくて取った行動が、どうして彼女を泣かせることになるのか分からない。

「な、泣くな」

「アシトのばか……きらいー」

「う、うう」

人間兵器、心底から困る。慌てふためき、なだめることも出来ない不器用な少年に、チニユは押し殺した声で笑っている。

「笑うな、助ける……」

「おほほほ、面白いですわ、アシト」

「笑うな、助けてくれ……」

懇願が入り始めたので、チニユは噴き出しそうになりながら言う。

「わたくしもリンカも、あなたからまだ聞いていませんわよ」

「何をだ……？」

困惑する少年に、虫族の少女は楽しげに告げる。

「答えは簡単でしょう？ 謝罪、ですわ」

アシトはチニユを見た。彼女は楽しそうに笑っている。

リンカを見た。涙を湛えた目で、恨めしそうにアシトを見ている。

「……す、すまん」

「誠意がないですわっ!」

「アシトのばかー」

即座に飛んだ言葉に、少年は困惑する。

「ど、どうしろと、言うんだ……」

「謝る言葉は『ごめんなさい』っ!」

リンカが睨んでくる。アシトはチニユを見た。チニユは楽しそうに彼を見ている。

逃げ場は、なかった。

ある意味どんな戦場よりも恐ろしいところに立たされている気分で、少年は何とか口を開く。

「……」
「うん。もうしないでね」

「よろしいでしょう、許してさしあげます」

一言口にしただけで、少女たちは彼を許した。とても簡単に、彼を許した。

彼女たちが心配していたことを、彼は理解しただろうから、それ以上責める気はないのだ。

「ごしごしと瞳をぬぐって、リンカはようやく笑った。

「ねえ、なんでアシトこんなところにいるの？ 人間の里に帰りたかったの？」

「い、いや、ここは……その、おれに……虫族の力を手に入れて来いと命令したやつが、いるところで」

アシトの言葉に、チニユは目を見開いた。即座に振り返って物々しい建物を指差す。

「何ですって！？ リンカ、やっておしまいなさい。わたくしが許します。傲慢で悲しい人間に、痛みを教えてさしあげて」

「……チニユ、命令しないでよー。やるけどさ」

リンカは建物を睨む。恨みよりも怒りよりも憎しみよりも、戻ってこない大切なヒトを、悲しく思う。奪われた幸せな時間を何よりも愛しいと思っていたから。

「キアラの、皆の痛み、教えてあげる。もう戻ってこないんだからね。皆、皆……戻ってこないんだ！！」

怒りよりも、悲しみを含んだ紫の光が、人間の愚かさを砕くように降り注いだ。

少しだけ待っていてくれと言い残し、リンカとチニユを外に置いて、アシトは崩れた建物に入っていった。

多分どこかに避難する場所があるだろう。秘密裏に動く立場だったアシトは知っている。

ざり。

瓦礫を踏み越え、たどり着いた人の気配があるところに剣を突き立てる。壁の向こうに突き出ただろっ剣先から、炎が吹き出た。

くぐもった悲鳴が聞こえる。アシトは剣を離さない。

気配がなくなるまで、少年はそうし続けた。

こんなに汚い連中の血で手を汚すのは、自分でいいと思うから。彼女にさせられないと思うから。

「アシト、遅いね」

「そうですね。何をしてらっしゃるのかしら？ は！ まさかまた逃げようとしているのでは!？」

「ええ!？ そんなのやだ！ ダメ！ 一緒に帰るの!」
騒ぐ彼女たちに苦笑を浮かべてアシトは近寄る。

「……待たせた」

「遅いですわよ、アシト」

チニユはつんとそっぽを向き、リンカはホツとした笑みを浮かべている。

「おかえり」

彼女はそう言って、アシトに手を差し伸べる。

「帰ろ?」

あの優しい場所へ。

優しい虫族たちのところへ。

『虫の里』へ。

「……うん」

アシトは、はにかむように微笑み、少女の手を取った。

昔、彼女は恐れられ、人の里を追われた。

彼女に手を差し伸べてくれたのは優しい虫族だった。

その手のぬくもりを、あの日見たお日様の光を、彼女は忘れたことがない。

受け入れてくれた虫族たちの優しさに、いつのころからか彼女はこう思うようになった。

幸せを知った。ぬくもりを知った。優しさを知った。

与えられた大切なものを、いつか自分も誰かに与えてあげたいと。

少年は知らなかった。何も知らなかった。

何一つ持たなかった彼に、光が差した。

何も分からなかった彼に、手を差し伸べるヒトがいた。

奪うだけだった自分に、与えてくれるヒトがいた。

奇跡のような光が差した。

護りたいと想うものが、やっと彼にもできたのだ。

そこにあるのは、確かな榎火^{ほたび}。

彼女に与えられたぬくもりが、彼に伝わった瞬間。

チヨウの羽持つ彼女が謳う。

花畑の中で唄を謳う。

長い冬が明け、春を告げるかのように。

寒い夜を暖める、確かな榎火^{ほたび}のように。

遙かな山の高み、人間の知らない場所が在る。

ここは『虫の里』。優しい虫族たちの住むところ。

終・榎火の謡（後書き）

これにて『榎火の謡』は完結です。まだまだ幼いリンクと不器用なアシトに、チニユは笑いながら過ごすのでしよう。相変わらず仲が良いのか悪いのか分からないまま、アシトを不思議がらせて。優しい虫の里で。

長らくお付き合いありがとうございました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5783c/>

櫓火の謡（ほたびのうた）

2009年3月24日10時55分発行